

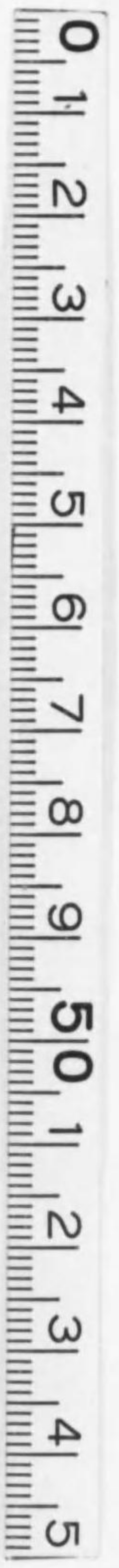
曠野

914. 6-H877ㄅ



1200500757749

914.6
77



始



112[✓] -

914.6

H877



雄辰堀

野曠

社德養



985
127

目次

曠野

=

-

「死者の書」

黒髪山

若菜の巻など

伊勢物語など

更級日記

三

二五

三三

四一

四八

五六

東京大学

文学部

東京大学



三

ふるさとびと

斑雪

櫓の上

四

雉子日記

續雉子日記

ノオト

春日遅々

雲について

七一

九五

一一二

一二三

一三一

一三五

一三八

一四七

七つの手紙

一五二

山の家にて

一七三

ト居

一七四

雨後

一七九

山日記 その一

一八一

山日記 その二

一八六

木の十字架

一八九

五

マルセル・ブルウスト

二〇三

三つの手紙

二〇四

覺書

二二八

リラの花など

小説のことなど

ヴェランダにて

狐の手套

ユウジエニイ・ド・グランの日記

ノオト

*

後記

二四七

二五六

二六九

二八一

三三七

三六四

三七七



そのころ西の京の六條のほとりに中務大輔なかつかきのだいふきながしといふ人が住まつてゐた。昔氣質の人で、世の中からは忘れられてしまつたやうに、親譲りの、松の木のおほい、大きな屋形の、住み古した西の對たいに、老妻と一しよに、一人の娘を鍾愛しんあいしみながら、もの靜かな朝夕を過ごしてゐた。

漸くその一人娘がおとなびて來ると、ふた親は自分等の生先なひまきの少ないことを考へて、自分等のほかに頼りにするもののない娘の行末を案じ、種々しゆしゆいひ寄つて來るものうちから、或兵衛佐ひやうゑのすけを選んでそれに娘をめあはせた。ふた親の心になつたその若者は、何もかもよく出來た人柄だつた上、その娘の美しさに夢中になつてしまつてゐることは、はた目にもあきらかだつた。さうしてそれから二三年がほどといふものは、誰にとつても、何もいふところのない月日だつた。

が、さうやつて世の中から殆ど隔絶してゐるうちに、その中務大輔のところでは暮らし向きの悪くなつてゆく一方であることは、毎日女のもとに通つて來る傭にも漸くはつきりと分かるやうになつた。そのなかでは、男だけは以前と變らずに手厚いもてなしを受けてはゐた。それはかへつて男には心苦しかつた。が、女との語らひは深まる一方だつたので、男はその女のもとをばもはや離れがたく思ふやうに

なつてゐた。

ところが、或年の冬、中務大輔は俄かに煩ひついて亡き人の數に入つた。それから引きつづいて女の母もそのあとを追つた。女は悲歎なげきのなかに一人きりに取り残されて、全く途方に暮れずにはゐられなかつた。勿論、男は相變らず夜毎に來て、さういふ女をいたはり盡してはくれた。だが、世の中を知らない二人だけでは、すべてのことがいよいよ思ふにまかせなくなつて來ることは爲方がなかつた。毎日宮仕に出てゆく男のためにもそれまでのやうに支度を調へることも出來悪かつた。それがことに女には苦しかつたけれども、どうすることもその力には及ばなかつた。

再び春の立ち返つた或夕方、女は端近くなはぢかにゐた夫を前にして、この日頃思ひつめてゐたことを口にすゝる決心が漸つとそときついたやうに、こんなことを言ひ出した。

「わたくし達もこの儘かうして暮らして居りましたは、あなた様のおためではないのが漸つとはつきりと分つて參りました。父母のをりました間は、それでもまだ何かとお支度などもお調へしてさし上げられてをりました。けれども、かう何かと不如意になつて來ましては、それも思ふにまかせなくなり、お出仕の折などにさぞ見苦しいお思ひもなされることがおありでございませう。ほんたうに私のことなどは構ひませぬから、どうぞあなた様のお爲めになるやうになすつて下さいませ。」

男はちつと黙つて聞いてゐた。それから急に女を遮つた。「ではこの己にどうせよといはれるのか。」

「ときどきわたくしのことが可哀さうにお思ひになりましたなら——」女は切なげに返事をした。「餘所へいらしつてゐても、その折にはどうぞいつでも入らつして下さいませ。どうしていまの儘では、見苦しい思ひをなさらずに宮仕などがお出来になれませう。」

男はしばらく目をつぶつて聞いてゐた。それから急に男は女のはうへ目を上げ、素氣ないほどきつぱりと言つた。

「この己にこの儘おまへを置きざりにして往かれると思ふのか。」

それきりで、男はわざと冷やかさうに顔をそむけ、破れた築土のうへに葎がやさしい若葉を生やしかけてゐるのを、そのときはじめて氣がついたやうに見やつてゐた。

やがて女の漸つところへてゐたやうな忍び泣きが急にはげしい嗚咽に變つていつた。……

男は、さうやつて女のはうから別れ話をもち出されてからも、一日も缺かさず女のもとに來ながら、以前とはすこしも變らないやうに女と暮らしてゐた。しかしだんだん女の家から召使ひの男女の數も乏しくなり、築土なども破れがちになつて來、家に傳はつた立派な調度などもいつか一つづつ失はれてゆき出してゐるのが、男の目にもいつまでも分らないはずはなかつた。男の様子が昔から見るとよほど變つてきて、以前よりか一層寡黙になりだしたやうに見えたのは、それから程經てのことだつた。しかし

男はその様子がさう少し變つただけで、女をいよいよいたはり盡すやうにしてゐた。それが逢ふ毎に女にはたまらなく思はれて、どうしたらいいのか、ただもうあぐね果てるばかりだつた。

とうとうまた、或夕方、女はこらへかねたやうに言つた。

「いつまでもかうしてわたくしと一緒にゐて下さるのは、わたくしは嬉しがらなくてはならないのですが、どうもそれ以上に心苦しくてなりません。わたくしはかうしてあなたのお傍に居りましても、あなたのお窠れになつたお姿を見ることが出来ませぬ。のみならず、この頃あなた様はわたくしに隠して、何かお考へになつていらつしやるのでせう。なせそれをわたくしに言つては下さらぬのです。」

男は物を言はずに、女をしばらく見てゐた。

「己がおまへに隠して考へごとなどをしてゐるものか」と男は何か言ひにくさうに口をきいた。「おまへが自分のことに構はずに、己のことばかり構はうとしてゐるのが己には窮屈でならないのだ。己だつて、もう少ししたら、どうにかなるだらう。さうすれば、おまへ一人位はどうにでもしてやれるのだ。それまで、いまま少し、辛抱してゐてくれ。」

男はさう言ひながら、ひと時、いかにもいたいたしさうな目つきで女を見た。しかし女はいつかそこに袖を顔にして泣き伏してゐた。男はしげしげと女の波うつてゐる黒髪を見てゐた。それから自分も急に目をそらせて、ふいと袖を顔にもつていつた。

男がその女の家に姿を見せなくなつたのは、それから何日もたたないうちだつた。

八

二

男が黙つてふいに立ち去つてから、それでも女はなほ男を心待ちにしながら、幾人かの召使ひを相手に、さびしい、便りない暮らしを續けてゐた。が、それきり男からは絶えて消息さへもなかつた。女にとつては、それは自分から望んだこととはいへ、たまらなく不安だつた。待つことの苦しみ、——何物も、それを紛らせてはくれなかつた。それでも女はまだしもそのなかに一種の満足を見いだした。——だが、いつまで立つても、男のかへつて来るあてのないことが分かつて来ると、わづかに残つてゐた召使ひも誰からともなく暇をとり出し、みな散り散りに立ち去つて往つた。

一年ばかりのあとには、女のもとにはもう幼い童が一人しか残つてゐなかつた。その間に、寢殿は跡方もなくなり、庭の奥に植わつてゐた古い松の木もいつか伐り取られ、草ばかり生ひ茂つて、いつのまにか葎むらのからみついた門などはもう開らなくなつてゐた。さうして築土のくづれがいよいよひどくなり、ときをり何かの花などを手にした裸か足の童がいまは其處から勝手に出はひりしてゐる様子だつた。なかば傾いた西の對の端に、わづかに雨露をしのぎながら、女はそれでもちつと何物かを待ち續けてゐた。

最後まで残つてゐた幼い童もとうとう何處かに去つてしまつた跡には、もう一方の崩れ残りの東の對の一角に、この頃田舎から上つてきた年老いた尼が一人、ほかに往くところもないらしく、棲みついてゐた。それは昔この屋形やかたで使はれてゐた召使ひの縁者だつた。さうしてその尼は此の女をかはいさうに思つて、ときどき餘所から貰つてくる菓子や食物などを持つて来てくれた。しかしこの頃はもう女にはその日のことにも事を缺くことが多くなり出してゐた。——それでもなほ女はそこを離れずに、何物かを待ち續けてゐるのを止めなかつた。

「あの方さへお爲合せになつてゐて下されば、わたくしは此の儘朽ちてもいい。」
さう思ふことの出来た女は、かならずしも、まだ不爲合せではなかつた。

男にとつては、その一二年の月日はまたたく間に過ぎた。

しかしその間、男は一日も前の妻のことを忘れたことはなかつた。が、何かと宮仕が忙しかつた上、あらたに通ひ出してゐた伊豫いよの守かみの女の家で、懇ろに世話をせられてゐると、心のまめやかな男だつただけ、彼等を裏切らないためにも、男はつとめて前の妻のところからは遠ざかり、胸のうちでは氣にかけながらも、音信さへ絶やしてゐた。

最初のうちは、それでも男は幾たびか、人目に立たないやうにわざと日の暮を選んで、前の女のゐる

西の京の方へ往きかけた。が、朝夕通ひなれた小路に近づいて来ると、急に何物かに阻まれるやうな心もちで、男はその儘引返して来た。男はこんなことで、心にもなく女とも別れなければならなくなる運命を考へた。

しかし、その儘女にも逢はずに月日が立つにつれ、もう忘れてゐてもいいはずのその女のことを何かのはずみに思ひ出すと、その女の、袖を顔にした、さびしい、俯伏した姿が前にも増して鮮明に胸に浮んで来てならなかつた。さうしてとうとうしまひには、その女のさうしてゐるときの息づかひや、やさしい衣ずれの音までがまざまざと蘇るやうになり出した。

その春も末にちかい、或日の暮れがた、男はとうとう女戀しさにゐてもたつてもゐられなくなつたやうに、思ひ切つて西の京の方へ出かけて往つた。

其處いらは小路の兩側の、築土も崩れがちで、蓬のはびこつた、人の住まつてゐない破れ家の多いやうなところだつた。漸く以前通ひなれた女の家あたりまで来て見ると、倒れかかつた門には葎の若葉がしげり、藪には山吹らしいものがしどろに咲きみだれてゐた。

「こんなに荒れてゐるやうでは、もう誰もここにはゐまい。」男は心のなかでさう考へた。

おそらくその女も他の男に見いだされて餘所に引きとられてしまつたのだらうと詮めると、その女戀しさを一層切に感じ出しながら、その儘では何か立ち去りがたいやうに、男はなほあたりを歩いてゐた。

すると、築土のくづれが、一ところ、童でもふみあげたのか、人の通れるほどになつてゐた。男は何の氣なしに其處からはひつて見ると、もとは何本もあつた大きな松の木は大い伐り倒されて、いまは草ばかりが生ひ茂つてゐた。古池のまはりには、一めに山吹が咲きみだれてゐ、そのすつと向うの半ば傾いた西の對の上にもちやうど夕月のかかつてゐるのが、男にははじめてそれと認められた。その對の方は眞つ暗で、人氣はないらしかつた。それでも男はそちらに向つて女の名を呼んで見た。勿論、なんの返事もなかつた。さうなると男は女戀しさをいよいよ切に感じ出し、袖にかかる蜘蛛の網を拂ひながら、山吹の茂みのなかを掻き分けていつた。男はもう一度空しく女の名を呼んだ。男はそのとき思ひがけず反對の側にある對の屋からかすかな灯の洩れてゐるのを見つけた。男は胸を刺されるやうな思ひをしながら、そちらの方へさらに草を掻き分けて往つて、最後に女の名を呼んだ。返事のないのは前と變りはなかつた。男は草の中から其處には一人の尼かなんぞゐるらしいけはひを確かめると、頭を垂れた儘、もと来た道をあとへ引つ返した。もう昔の女には逢はれないのだと詮め切ると、それまで男の胸を苦しいほど充たしてゐた女戀しさは、突然、いひ知れず昔なつかしいやうな、殆ど快いもの思ひに變りだした。……

なかば傾いた西の對の、破れかかつた妻戸のかげに、その夕べも、女は晝間から空にはのかにかかつ

てゐた織い月をぼんやり眺めてゐるうちに、いつか暗にまぎれながら殆どあるかないかに臥せつてゐた。そのうちに女は不意といふかしさうに身を起した。何處やらで自分の名が呼ばれたやうな氣がした。女の心はすこしも驚かされなかつた。それはこれまでも幾たびか空耳にきいた男の聲だつた。さうしてそのときもそれは自分の心の迷ひだとおもつた。が、それからしばらくその儘ちつと身を起してゐると、こんどは空耳とは信せられないほどはつきりと同じ聲がした。女は急に手足が竦むやうに覺えた。さうして女は殆どわれを忘れて、いそいで自分の小さな體を色の褪めた蘇芳の衣のなかに隠したのが漸つとのことだつた。女には自分が見るかげもなく瘦せさらばへて、あさましいやうな姿になつてゐるのがそのとき初めて氣がついたやうに見えた。たとひ氣がついてゐたにせよ、そのときまでは殆ど氣にもならなかつた、自分のさういふみじめな姿が、そんなになつてまだ自分の待つてゐた男に見られることが急に空怖ろしくなつたのだつた。さうして女は何も返事をしようとはせず、ただもう息をつめてゐることしか出来なくなつてゐる自分の運命を、われながらせつなく思ふばかりだつた。それからまだしばらく池のほとりで草の中を人の歩きまはつてゐる物音が聞えてゐた。最後に男の聲がしたときは、もう女のある對の屋からは遠のいて、向ひの尼のゐる對の屋の方へ近づき出してゐるらしかつた。それからもう何らの物音もしなくなつた。

すべては失はれてしまつたのだ。男は其處にゐた。其處にゐたことはたしかだ。それを女にたしかめ

でもするやうに、男の歩み去つた山吹の茂みの上には、まだ蜘蛛の網が破れたままいくすぢか垂れさがつて夕月に光つて見えた。女はその儘荒らな板敷のうへにいつまでも泣き伏してゐた。……

三

それから半年ばかり立つた。

近江の國から、或郡司の息子が宿直のために京に上つて来て、そのをばにあたる尼のもとに泊ることになつたのは、ちやうど秋の末のことだつた。

それから何日かの後、郡司の息子が異様に目を赫やかせながら言つた。「きのふの夕方、向うの壞れ残りの寢殿に焚きものを捜しに往きますと、西の對にちやうど夕日が一ぱいさし込んでゐて、破れた簾ごしにまだ若さうな女のひとが一人、いかにも物思はしげに臥せつてゐるのがくつきりと見えましたので、私はおどろいてその儘歸つて来てしまひましたが、あれはどなたなのですか。」

尼は當惑さうに、しかしもう見つけられてしまつては爲方がないやうに、その女の不爲合せな境涯を話してきかせた。郡司の息子はさも同情に堪へないやうに、最後まで熱心に聞いてゐた。

「そのお方にせひとも逢はせて下さい。」息子は再び目を異様に赫やかせながら、田舎者らしい率直さで言つた。「そのお方はもうでもその氣になつて下されば、わたしが國へ歸るとき一緒にお伴れして、

もうそのやうなお心細い目には逢はせませんから。」

尼は、それを聞くと、まあこんな自分の甥ごときものかと思ひながら、それでも彼の言ふやうに女も一そそんな氣もちにでもなつた方が行末のためにもなるのではないかと考へもした。

尼はいくぶん躊躇しながらも、何時かその甥の申出を女に傳へることを諾はないわけにはいかなかつた。

或野分立つた朝、尼はその女のもとに菓子などを持つて來ながら、いつものやうに色の褪めた衣をかついだ女を前にして、何か慰めるやうに、

「あなた様もどうして此の儘でいつまでも居られませう」と言ひだした。「こんなことはわたくしとしては申し上げ悪いことですけれど、いまわたくしの所に近江からいささか由縁のありますもののお子息が上京せられて來てをられますが、そのものがあなた様のお身の上を知つて、せひとも國へお伴れしたいと熱心にお言ひになつて居りますけれど、いかがでございますか、一そそのもののお言葉に従ひましては。此の儘かうして入らつしやいますよりは、少しはましかと存じますが。」

女はそれには何にも返事をしないで、空しい目を上げて、ときをり風に亂れてゐる花薄の上にもちぎれちぎれに漂つてゐる雲のたたまひを何か氣にするやうに眺めやつてゐたが、急に「さうだ、わたくし

はもうあの方には逢はれないのだ」とそんなあらぬ思ひを誘はれて、突然そこに俯伏してしまつた。

夜なかななどに、ときをり郡司の息子が弓などを手にして、女の住んでゐる對の屋のあたりを犬などに吠えられながら何時までもさまよふやうになつたのは、そんな事があつてからのことだつた。夜もすがら、木がらしが萩や薄などをさびしい音を立てさせてゐた。どうかすると、ひとしきり時雨の過ぎる音がそれに交じつて聞えたりした。さうでなければ、郡司の息子が、ときどき自分の怖ろしさを紛らせようとしてもするのか、あちこちと草の中を歩きまはつてゐた。……

そんな夜毎に、女は妻戸をしめ切つて、ともし火もつけず、身の置きどころもないかのやうに、色の褪めた衣をかついだまま、奥のはうにちつとうづくまつてゐた。かくも荒れはてた棲み家では、奥ぶかくなどになつとしてゐると、その儘何かの物のけにでも引つ張り込まれていつてしまひさうな氣がされて、女は怯え切り、殆ど寐られずに過ごすことが多いのだつた。

或しぐれた夕方、尼は女のところ來ると、いつものやうに沁沁と話し込んでゐた。

「ほんたうにいつまで昔のままのお氣もちでいらつしやるのでございませう。」尼はことさらに歎息するやうに言つた。「それは今のやうにでもして居られますうちはまだしも、此のわたくしでも若しもの事がございましたら、どうなさるお積りなのですか。しかし、やがてさういふときの來ることは分かつてゐます。」

女は数日まへのことを思ひ出した。——数日まへ、尼にその話をはじめて切り出されたとき、突然はつとして「自分はもうあのお方には逢はれないのだ」と氣づいたときのいまにも胸の裂けさうな思ひのしたことを思ひ出した。あのときから女の心もちは急に弱くなつた。それまでのすべての氣強さは——畢竟、それはいつかは男に逢へると思つての上での氣強さであつた。——女はもう以前の女ではなかつた。その晩、尼は郡司の息子をその女のもとへ忍ばせてやつた。

それから夜毎に郡司の息子は女のもとへ通ひ出した。

女はもう詮方盡きたもののやうに、そんなものにまですべてをまかせるほかなくなつた自分の身が、何だかいとほしくていとほしくてならないやうな、いかにも悔やしい思ひをしながら、その男に逢ひつづけてゐた。

漸く任が果てて、その冬のはじめに近江へ歸らなければならなくなつたときには、郡司の息子はもうすつかり此の女に睦んで、どうしてもその儘女を置きざりにして往く氣にはなれずじまつた。

女はそれを強ひられる儘に、京を離れるのはいかにもつらかつたけれど、しかし自分の餘りにもつたなかつた來しかたに抗ふやうな、さうして何か自分の運を試めしてみるやうな心もちにもなりながら、その郡司の息子について近江に下つていつた。

四

しかしその郡司の息子には、國元には、二三年前にめとつた妻が残してあつた。さうして親達の手まへもあり、息子は、その京の女をおもてむき婢として伴れ戻らなければならなかつた。

「そのうちまた、わたくしは京に上るはずです。」息子は女を宥めるやうにして言つた。「その折にはきつと妻として伴れて往きますから、それまで辛抱してゐて下さい。」

女はそんな事情を知ると、胸が裂けるかと思ふほど、泣いて、泣いて、泣き通した。——すべての運命がそこにうち挫かれた。

が、一月たち二月たちしてゐるうちに、——殆ど誰にも氣どられずに婢として仕へてゐるうちに、——かうしてゐる現在の自分がその儘でまるきり自分にも見ず知らずのものでもあるかのやうな、空虚な氣もちのする日々が過ごされた。いままでの不爲合せな來しかたが自分にさへ忘れ去られてしまつてゐるやうな、——さうして、そこには、自分が横切つてきた境涯だけが、野分のあとの、うら枯れた、見どころのない、曠野のやうにしらじらと残つてゐるばかりであつた。「いつそもうかうして婢として誰にも知られずに一生を終へたい」——女はいつかさうも考へるやうになつた。

此處に、女は、まったく不爲合せなものとなつた。

山一つ隔てただけで、こちらは、梢にひびく木がらしの音も京よりは思ひのほかにはげしかった。夜もすがら、みづうみの上を啼き渡つてゆく雁もまた、女にとつては、夜々をいよいよ寢覺めがちなものとならせた。

それから数年後の、或年の秋、その近江の國にあたらしい國守が赴任して来て、國中が何かとさわぎ立つてゐた。

國內の巡視に出た近江の守の一行が、方方まはつて歩いて、その郡司の館のある湖みづうみにちかい村にかかつたときは、ちやうど冬の初で、比良ひらの山にはもう雪のすこし見え出した頃だつた。

その日の夕ぐれ、丘の上にあるその館では、守は郡司たちを相手にして酒を酌みかはしてゐた。

館のうへには時をり千鳥のよびかふ聲が鋭く短くきこえた。——すつかり葉の落ち盡した柿の木の向うには、枯蘆のかなたに、まだほの明るいみづうみの上がひつそりと眺められた。

守は、すこし微醺を帯びたまま、郡司が雪深い越こに下つてゐる息子の自慢話などをしてゐるのをききながら、折敷せしきや菓子などを運んでくる男女の下衆たちのなかに、一人の小がらな女に目をとめて、それへちつと熱心な眼ざしをそそいでゐた。他の婢と同様に、髪は巻きあげ、衣も粗末なのをまといつてはゐたが、その女は何處やら由緒ありさうに、いかにも哀れげに見えた。その女をはじめて見たときから、

守の心はふしぎに動いた。

宴の果てる頃、守は一人の小舎人こしやうらひ童を近くに呼ぶと、何かこつそりと耳打ちをした。

その夜遅く、京の女は郡司のもとに招せられた。郡司は女に一枚の小桂こぎを與へて、髪なども梳いて、よく化粧してくるやうにと言ひつけた。女は何んのことか分からなかつたが、命せられたとほりの事をして、再び郡司の前に出ていつた。

郡司はその女の小桂姿を見ると、傍らの妻をかへりみながら、機嫌好ささうに言つた。「さすがは京の女ぢや。化粧させると、見まぢがふほど美しくなつた。」

それから女は郡司に客舎の方へ伴れて往かれた。女は漸つと事情が分つて來ても、押し黙つて、郡司のあとについてゆきながら、何か或強い力に引きすられて往きでもしてゐるやうな空虚な自分を見しか見出せなかつた。

守の前に出されると、ほのぐらい火影ひかげに背を向けた儘、女は顔に袖を押しつけるやうにしてうづくまつた。

「おまへは京ださうだな。」守はそこに小さくなつてゐる女のうしろ姿を氣の毒さうに見やりながら、いたはるやうに問うた。

「……」女はしかし何とも答へなかつた。

さうして女は数年まへのことを思ひ出した。——数年まへには、田舎上りの見ず知らずの男に身をまかせて京を離れなければならなかつた自分が自分でもかはいさうでかはいさうでならなかつた。さうしてそのときは相手の男なんぞはいくらでもさげすめられた。が、こんどと云ふこんどは、その相手がかへつて立派さうなお方であるだけに、さういふ相手のいひなりにならうとしてゐる自分が何だか自分でもさげすまずにはゐられないやうな——さうしていくら相手のお方にさげすまれても爲方のないやうな——無性にさびしい氣もちがするばかりだつた。女にしてみると、かうして見出されるよりは、いままでのやうに誰にも氣づかれずに婢としてはかなく埋もれてゐた方がどんなに益しか知れなかつた。……「己はおまへを何處かで見たやうなふしぎな氣がしてならない。」男はもの靜かに言つた。女は相變らず袖を顔にしたがり、何んといはれようとも、懶げに顔を振つてゐるばかりだつた。館のそとには、時をりみづうみの波の音が忍びやかにきこえてゐた。

そのあくる夜も、女は守のまへに呼ばれると、いよいよ身の置きどころもないやうに、いかにもかほそげに、袖を顔にしながらか其處にうづくまつてゐた。女は相變らず一ことも物を言はなかつた。

夜もすがら、木がらしめいた風が裏山をめぐつてゐた。その風がやむと、みづうみの波の音がゆうべよりかすつとはつきりと聞えてきた。をりをり遠くで千鳥らしい聲がそれに交じることもある。守はいたはるやうに女をかきよせながら、そんなさびしい風の音などをきいてゐるうちに、なせか、ふと自分がまだ若くて兵衛佐だつた頃に夜毎に通つてゐた或女のおもかげを鮮かに胸のうちに浮べた。男は急に胸騒ぎがした。

「いや、己の心の迷ひだ。」男はその胸の靜まるのを待つてゐた。

突然、男の顔から涙がとめどなくながれて女の髪に傳はつた。女はそれに氣がつくと、いかにも不審に堪へないやうに、小さな顔をはじめて男のはうへ上げた。

男は女とおもはず目を合はせると、急に氣でも狂つたやうに、女を抱きすくめた。「矢張りおまへだつたのか。」

女はそれを聞いたとき、何やらかすかに叫んで、男の腕からのがれようとした。力のかぎりがれようとした。「己だと云ふことが分かつたか。」男は女をしつかりと抱きしめた儘、聲を顫はせて言つた。

女は衣ずれの音を立てながら、なほも必死にのがれようとした。が、急に何か叫んだきり、男に體を預けてしまつた。

男は慌てて女を抱き起した。しかし、女の手に触れると、男は一層慌てずにはゐられなかつた。

「しつかりしてゐてくれ。」男は女の背を撫でながら、漸つといま自分に返されたこの女、——この女は

ど自分に近い、これほど貴重だいじなものはないのだといふことがはつきりと身にしみて分かつた。——
さうしてこの不爲合せな女、前の夫を行きすりの男だと思ひ込んで行きすりの男に身をまかせると同じ
やうな詮あきらめらめで身をまかせてゐたこの惨めな女、この女こそこの世で自分のめぐりあふことの出来た唯
一の爲合せであることをはじめ悟つたのだつた。

しかし女は苦しさうに男に抱かれたまま、一度だけ目を大きく見ひらいて男の顔をいぶかしさうに見
つめたぎり、だんだん死顔に變りだしてゐた。……

「死者の書」

— 古都における、初夏の夕ぐれの對話 —

客 なんともしへす好い氣もちだね。すこし旅に疲れた體をやすめながら、暮れがたの空をかうやつて見てゐるのは。

主 京都もいまが一番いいんだ。この頃のやうに澄み切つた空のいろを見てゐると、すっかり京都に住みついてゐる僕なんぞも、なんだか、かう旅さきにあるやうな氣がしてきてならないね。まあ、さういふ氣もちになるだけでもいいからな……それにしても、君はこの頃はよくこちらの方へ出てくるなあ。いつか話してゐた仕事はその後はかどつてゐるのかい。何か、大和のことを書くとかいつてゐたが……

客 いや、あれはあのままだ。なかなか手がかりがつかないんだ。まあ、そのうち何んとかものにするよ。……なんしろ、まだ、かういつた感じのものが書きたいと、埴輪をいぢつたり、萬葉の歌を拾ひ讀みしたりしては一種の雰圍氣を自分のまはりに漂はせて、ひとりでもいい氣になつてゐるぐらゐのものだ。……當分はまあ折を見ては、かうやつてこちらに来て、できるだけ腰ゝみごとな田園と化した都址みやこぢや、西にしの京きやうあたりの松林のなかなどをぶらぶらするやうにしてゐる。

主 さうやつて君は何げなささうにぶらぶらしながら、突然、松林の奥から古代の風景が君の前にひらけるやうな瞬間を待つてゐるわけなのだね。

客 さうだよ。少くとも、はじめのうちはさうだつた。だが、このごろはさういつた奇蹟は詮めてゐる。まだ、自分には古代の研究がなにひとつ身についてゐないのだからね。もうすこしおとなしく勉強をする。

主 だが、こんなことを僕から君に云ふのもどうかと思ふけれど、小説を書く氣なら、あんまり勉強しすぎてしまつてもいけないのではないかしら。ゲエテも、どこかで、こんなことを云つてゐる。『自分はギリシヤ研究のおかげで「イフィゲニエ」を書いたが、自分のギリシヤ研究はすこぶる不完全なものだつた。もしその研究が完全なものだつたら、自分の「イフィゲニエ」は書かれずじまつたかも知れない。』

客 うん、なるほどね。つまり古代のことは程よく知つてゐる位で、非常にうひうひしい憧れをもつてゐるうちのはうが小説を書くのにはいいといふことになるわけか。これは好い言葉をきいた。……どうもこのごろ、自分でも悪い癖がついたとおもひ出してゐたところだ。日本の古代文化の上にもはつきりした痕を印してゐるギリシヤやペルシヤの文化の東漸といふことを考へてみてゐるうち、いつか興味が動きだしてギリシヤの美術史だとか、ペルシヤの詩だとか讀み出してゐる。それはまだいい、そのう

ちにいつのまにかゲエテの「ディヴァン」だとか、ノワイユ夫人の詩集までが机の上にもち出されてゐるといつた始末だ。

主 (同情に充ちた笑) まあ、ゆつくりでもいいから、あまり道草をくはずに、仕事に精を出したまへ。……さういへば、數年まへに釋道空さんが「死者の書」といふのを書いてゐられたではないか。あの小説には實によく古代の空氣が出てゐたやうにおもふね。

客 さう、あの「死者の書」は唯一の古代小説だ。あれだけは古代を呼吸してゐるよ。まあ、ああいふ作品が一つでもあつてくれるので、僕なんぞにも何か古代が描けさうな氣になつてゐるのだよ。僕ははじめ大和の旅に出るまへに、あの小説を讀んだ。あのなかに、いかにも神祕な姿をして浮かび上つてゐる葛城の二上山には、一種の憧れさへいだいて來たものだ。さうして或晴れた日、その麓にある當麻寺までゆき、そのこごしい山を何か切ないやうな氣もちでときどき仰ぎながら、半日ほど、飛鳥の村を遠くにながめながらぶらぶらしてゐたこともあつた。

主 その二上山だ。その山に葬られた貴いお方の亡き骸が、塚のなかで、突然深いねむりから村びとたちの魂乞ひによつて呼びさまされるあたりなどは、非常に凄かつたね。森の奥の、塚のまつくらな洞のなかの、ぼたりぼたりと地下水が巖づたひにしたたり落ちてくる濕つばさまでが、何かぞつとするやうに感せられた。

客 全篇、森嚴なレクイエムだ。古代の埃及びとの數種の遺文に與へられた「死者の書」といふ題名が、ここにも實にいきいきとしてゐる。

主 毎日の寫經に疲れて、若い女主人公がだんだん幻想的になつて來、ある夕方、日の沈んでゆく西のはうの山ぎはにふと見知らない貴いおかたの俤を見いだすところなども、まだ覺えてゐる。

客 あの寫經をしてゐる若い女のすがたは美しいね。僕はあそこを讀んでからは女の手らしい古い寫經を見るごとに、あの藤原の郎女の氣高くやつれた容子をおもひ出して、何んとなくなつかしくなる位だ。

主 あの小説には、それからもう一つ、別の興味があつた。大伴家持だ。柳の花の飛びちつてゐる朱雀大路を、長安かなんぞの貴公子然として、毎日の日課に馬を乗りまはしてゐる兵部大輔の家持のすがたは何んともいへず愉しいし、又、藤原仲麻呂がその家持と支那文學の話などに打ち興じながら、いつか話題がちかごろ佛教に歸依した姪の郎女のうへに移つてゆく會話なども、いかにもいきいきとしてゐたな。

客 さういふところに作者の底力がひとりでに出てゐる。人間として大きな幅のある人だ。

主 一方、萬葉學者としてもつとも獨創に富んだ學說をとなへてきた、このすぐれた詩人が、その研究の一端をどこまでも詩的作品として世に問うたところに、あの作品の人性があるのだね。だが、どうしてあれほどのものがほとんど世評に上らなかつたのだらう。

客 世間はさういふ仕事は簡單にディレクタンチズムとしてかたづけしてしまふのだ。學界の連中は、こんどは小説といふ微妙な形式なので、讀まずともいいとおもつたらうし……本當にこの作品を讀んだといふ人は、僕の知つてゐる範圍では、五人とはゐなかつたものね。

主 僕などもその一人だつたわけか。幸福なる少數者の……しかし、それはそれだ。君もいい仕事をしてくれたまへ。いい讀者になつてあげるから。

客 こんどはこつちに風が向いてきたな。まあ、もうすこし待つてくれ。まだ自分でもしやうがないとおもふのは、大和の村々を歩いてゐると、なんだかかう、いつもお復習をさせられてゐるやうな氣もちが抜けないことだ。もうすこし何處にゐるのだから忘れたやうになつて、あるときは初夏の風にふかれながら、あるときは秋の雲をみあげながら、ぼんやりと歩けるやうになりたい。——心におそろしげに描いてきた神々のゐられた森が何かつまらない小山に見えるきりだつたり、なにげなく見やつてゐたある森のうへの塔に急に心をひかれて暑い田圃のなかを過ぎつていつたり、ある大寺の希臘風なエンタシスのある丹のはげた圓柱を手で撫でながら、目のあたりに見る何か大いなるものの衰へに胸を壓しつぶされたり、さうかとおもふと、見すてられたやうな廢寺の庭の夏草の茂みのなかから拾ひ上げた瓦がよく見ると明治のやつだつたりして、すつかりへとへとになつて、日ぐれ頃、朝からみると自分の仕事からかへつて遠のいた氣もちになつて歸つてくることが多いのだ。

主 さういつた君の日々が、そのまま君の小説になるのではないか。

客 いや、もうさういふ苦しまぎれのやうな仕事はこんどだけはしたくない。もつと、かう大どかな仕事ぶりをしてみたいんだ。だが、僕みたいなものには難しいことらしいな。——あれは、をとしの秋だつたかな、ともかくもまあ小手しらべにと、何か小品を、ちやうど古代の人々がふいとした思ひつきで埴輪はにわをつくりあげたやうな氣もちで、書いてやらうとおもつて、古代の研究がてら、大和にやつてきて、毎日寺々を見て歩いてゐるうちに、なんだか日にまし氣もちが重くるしくなつて、とうとう或る夕方、もうその仕事をどう云つてやつてことわらうかと考へるため散歩にいつた高畑たかはたけのあたりの築土つじちのくづれが妙にそのときの自分の氣もちにびつたりして、それから急に思ひついて「曠野あらの」といふ中世風なものがなしい物語を書いた。

主 あの小説は讀んだよ。大和までわざわざ仕事をしにきて、毎日お寺まはりをしながら、やつぱり、ああいふものを書いてゐるなんて、いかにも君らしいとおもつたよ。

客 あれは、いまおもへば、僕のさびしい諦めだつた。それが何處かで、あの物語の女のさびしい氣もちと觸れあつてゐたのだな……

主 さういへばさうもいへようが、あれもあれでいい。だが、僕は君の新しい仕事を期待してゐる。勇氣を出して、いつまでもその仕事をつづけてくれたまへ。

客 うん、ありがたう。ひとつ一生をかけてもやるかな。……それまでのうちに、これから何遍ぐらゐこつちにやつて來ることになるかな。どうも大和のはうに住みつかうなんといふ氣にはなれない。やつぱり旅びととして來て、また旅びととして立ち去つてゆきたい。いつもすべてのものに對してニイチェのいふ「遠隔パスト・ディスタントの感じ」を失ひたくないのだ。……

そのくせ、いつかの日にか大和を大和ともおもはずに、ただ何んとなくいい小さな古國ふるくにだとおもふ位の云ひ知れぬなつかしさで一ぱいになりながら、歩けるやうになりたいとおもつてゐるのだ。たわわに柑橘類のみのつた山裾をいい香りをかいで歩きながら、ああこれも古墳のあとかなと考へ出すのは、どうもね。

主 しかし、君はもう大抵大和路は歩きつくしたらうね。

客 割合に歩いたはうだらうが、ときどきこんなところだと、——本當に思ひがけないやうな風景が急に目のまへにひらけ出すことがある。

この春も春日野の馬酔木あしびの花ざかりをみて美しいものだとおもつたが、それから二三日後、室生川の崖のうへにそれと同じ花が眞白にさきみだれてゐるのをおやと思つて見上げて、このはうがよつほど美しい氣がした。大來皇女おほくみのみめの挽歌にある「石いそのうへに生おふる馬酔木あしびを手折らめど……」の馬酔木はこれではなくてはとおもつた。さういふ思ひがけない發見がときどきあるね。まあ、そんなものだけをあてにし

て、できるだけこれからも歩いてみるよ。——だが、まだなかなか信濃しののの高原などを歩いてゐて、道ばたに倒れかかつてゐる首のもぎとれた馬頭観音などをさりげなく見やつて、心にもとめず、過ぎてゆく、といったやうな氣軽さにはいかない。……

それでゐて、そのふと見過ごしてきた首のない馬頭観音の像が、何かのはすみで、ふいと、そのときの自分の旅すがたや、そのまはりの花薄はなすすぎや、その像のうへに青空を低くさらさらと流れてゐた秋の雲など一しよになつて、思ひがけずはつきりと蘇へつてくるやうなことがあつたりする工合が、信濃路ではたいへん好かつた。なんだか、さういつたうつけたやうな氣分で、いつの日か、大和路を歩けるやうになりたいものだ。

主 いい身分だね。さうやつて旅行ばかりしてゐられるなんて。

客 君なんぞにもさう見えるのかい。でも、僕はこんな弱蟲だからね、不安な旅でない旅などをしたことはない。いつ、どこで、寝こむかも分からないやうな心細さで、旅に出てくるのだよ。まあ、それなりにだんだん旅慣れてはきたけれど。……

主 さうか。あんまり無理をするなよ。——ああ、もうすっかり暗くなつてしまつたね。すこし冷え冷えとしてきたやうだから、窓をしめようね。

昭和十八年六月

黒髪山

源氏物語の「總角かづまき」の巻で、長患ひのために「かひななどいとはそなりて影のやうによわげに」、衾かきまのなかに糶ひなかなんぞの伏せられたやうになつたきり、「御髪みかみはいとこちたうもあらぬほどにうちやられたる、枕よりおちたるきはの、つやつやと」した宇治の姫君が愛人の薫かきの君たちにもとられながら、遂に息を引きとつてしまふ。そのとき薫の君が「夢かとおぼして、御殿油みどのあぶらをちかうかかげて見たてまつり給ふに、隠したまふ顔もただ寐たまへるやうにて」、なんだかいつまでもその儘の姿にして、置いておきたい程のいぢらしい氣がしながら、「御髪をかきやるにさとうちにほひたる、ただありしながらのほひに」何とも云へず切なくなる心もちを描いてゐる。私は其處を讀んだとき非常に感動した。

若く美しい女のもう冷たくなつた亡骸を描いて、そのかき亂れた髪の毛だけがまだ生きてゐるときと同じやうに匂ふところを書き添へたのは實に效果的である。これほど簡潔で深い印象を與へる死の場面はさう他處にあるものではない。私達の遠い祖先は既にかういふ効果を知つてゐたのかと思つた。

そこにはもう圓熟した物語作者がある。人間の死に對してもあまり怯ひるまず、佛教などで鍛へ上げられた、透徹した觀念を既に持つた人の目であつたにちがひない。

この頃私は萬葉集を屢々手にとつて見てゐるが、そんな源氏物語などの頃とは異り、宗教思想が未熟だつたせゐか、生と死との境界さへはつきり分からぬ古代人らしく、

秋山に黄葉あはれとうらぶれて入りにし妹は待てど來まさぬ
とか、又、

秋山の黄葉を茂み迷ひぬる妹を求めむ山道知らずも

などといふ考へ方でもつて死者に對してゐる。これは歌といふものの性質上、わざとさういふ原始的な素朴な死の觀念を借りて、山に葬られた自分の妻を、恰も彼女自身が秋山の黄葉のあまりの美しさに甦かれたやうにして自ら分け入つてしまつたきり道に迷つてもう再びと歸つて來ないやうに自分も信じてをるがごとくに歎いて、以つて死者に對する一篇のレクキエムとしたのかも知れない。

萬葉の頃の悼亡の歌には、直接に自分の歎きを痛切に吐露したものよりも、さうやつて死者の葬られた山を對象とし、或は空しくなつた家の日ごとに荒廢してゆく有様や、故人の遺物である木や花や鳥などを對象としたものが多いやうである。肉體が死んでも魂は分離して亡びないことを信じてゐた古人は、深い山の中をさすらつてゐる死者の魂を鎮めるためにその山そのものの美しさを讃へ、又、死後彼

**

等の居處や木々を拂はずに其處に漂つてゐる魂の落ちつくまで荒れるがままにさせ、ときをりその荒廢した有様を手にとるやうにさながらその死者の魂に向つていふやうにいふ、——そんな事を私は萬葉の挽歌作者をよみながら考へる。萬葉人たちが實際の信仰としてさういふ考へ方をしてゐたか。或は、もつと古代の人たちの信仰の名残りから、その中にある生活感情を再現しようとしたところに彼等の文學があつたのであらうか。

山吹の立ちよそひたる山清水汲みにゆかめど道の知らなく

これも挽歌の一つである。萬葉學者の一人が此歌の第一句から第三句までが「黄泉」の和譯であることを發見した。周圍に山吹の黄いろい花の咲いてゐる泉は即ち黄泉だといふことに氣がついたのである。さうなのかも知れない。さう云はれないでゐると、これでも悼亡詩なのかと思ふ位の、明るい感じをさへ此歌は誰にでも與へるだらう。しかし死んだ貴女のために、山の中にはひつて行かれた彼女の魂を鎮めるための祈りとしての合唱のやうな種類のものだとしたら、かういふ歌もそれが挽歌としてはつきり分かつてくる。そして死から來るじめじめとした感じのない、清冽な後味を跡に残つた人達の上に與へることが出来るのである。

萬葉人としても死後の人體の醜惡を知らないでゐたわけではなかつたらうが、否、それを後代よりもよく知り、それに對する恐怖の一層はげしかつたあまりに、彼等の死者を哭する歌はいよいよ切なく美

しくならなければならなかつたのであらう。

奈良へは、二年前の若葉の頃、神西清と一しよに往つた。

誰でもさうするやうに、秋篠寺、唐招提寺、薬師寺、法隆寺などを廻つて歩いたが、古い佛たちを拜する傍ら、私は古い大和の村々や野や民家や、ことに里近くの山々を見ることを楽しんだ。

萬葉びとがこれらの村や山々に彼等の謂はば前宗教的 (Pre-religious) な生活を托しながら小さな喜びや悲しみを歌ひ續けてゐた間に、一方では既に、今日もなほ残つてゐるかういふ大きな寺が建立され、大きな佛たちが製作せられてゐたのだといふことは不思議な心もちがしてならなかつた。それほどその二つのもの——無智にちかい土俗的な信仰の中に隠れてゐる萬葉びとと、佛を製作しつつあつた本當の信仰に目覺めた人たちとの間には互に共通しあつたものが殆ど無かつたやうだからである。前者が後者のために遂に大和や山城から逐はれて、遠い國々を彼等の歌を携へたまま流浪し出す日はそのとき既に近づいてゐたのである。

私は毎日のやうに古い寺々を歩き、古い佛たちを拜しながら、殆ど萬葉の歌を口に上らせなかつた。新薬師寺へ行く途中の、くづれた築泥がちの道などは好きで何度も歩いたが、私はそこを通りながら思

ひがけず伊勢物語の一節などをなつかしく思ひ出すやうな氣分にさせられるやうなことはあつても、家持の歌ひとつ浮んで來なかつた。萬葉の歌はいまはもう大和の村々にも生きて居らず、寧ろ私達の平凡な日常生活の奥深くに反つてひよいと見出されるやうなときにだけ本當に私達に生きてくるのではないかとさへ思へた程だつた。

だが、大和の村々を歩き疲れて宿に著き、夜ふけていつまでも目を覺まして晝間見てきたさまざまの事物を思ひ浮べてゐるやうなときなどには、どうかすると熱心に見てきた古い佛たちの顔よりも、木深い山の奥にいまだに奇蹟的にその儘埋まつたきりであるかも知れない死んだ古代人のひとり取り残された淋しさうな姿などが、いまにも目に見えて來さうになつたりした事もないではなかつた。

神西が都合で先きに歸京し、私はそれから三四日ひとりで奈良に止まることになつたとき、私はもう古い寺々は訪れず、ただぼんやりとそこいらの村々を歩いて暮らすことにした。

私は卷向山や二上山などの草深い麓をひとりであらふらしながら、信州の山々を見馴れてゐる自分のやうな者も、それ等の山そのものとしては何らの變哲もなく見える小さな山々に對して一種異様な愛情の湧いてくるのを感じ出してゐた。いまから千年以上も前、それらの山々に愛する者を葬つた萬葉の人

人が、そのとき以來それまで只ばんやりと見過ごしてゐたその山々を急に毎日のやうに見ては歎き悲しみ、その悲歎の裡からいかにその山が他の山と異り、限りないそれ自身の美しさをもつてゐることを見出して行つたであらう事などを考へてゐると、現在の自分までが何かさういふ彼等の死者を守つてゐる悲しみを分かちながらいつかそれらの山々を眺め出してゐるのだつた。さういふこちらの氣のせゐか、大和の山々は、どんなに小さい山々にも、その奥深いところに何か哀歌的なものを潜めてゐる。

奈良を去る前日、私は「大和雜記」といふ本を讀んでゐたら、奈良山の一部分に人麻呂歌集などにも出てゐる黒髮山といふ山があり、そこから法華寺村の北方の歌姫といふ部落に出る舊道のある事を知つて、ちよつとその黒髮山とか、歌姫といふ美しい地名に心をそそられて、その山越えを試みてみたくなつた。其處でその翌朝、私は奈良坂の上までバスで行き、元明、元正兩天皇の御陵のあたりから大體の見當をつけて、山のなかへはひつて行つた。二つのみささは通り過ぎた。もう昔の佐保山である。私は手にしてゐた參謀本部の地圖に大體黒髮山らしいものの印をつけておいたが、その山の中はまださほど深いとも思はれないのに、小さな袖道が多くて、私にはすぐその地圖が何んの役にも立たない事を知つた。私はもうあてすつぼうにそれらしい山を探して見るより仕方がなかつた。

さうやつて少し歩いて見てゐたが、てんで見當がつかず、こんな工合では黒髮山を捜すことは先づ斷念した方がいいと思ひ、せめて歌姫の方へ出る舊道でも見つけようとして後戻りをしてみたりしてゐた

が、どれがさつき通つて來た道かなんども分からなくなり、すこし困つた事になつてきたなと思つた。この儘、この山中に迷つていつまでも自分がさまよひ續けてゐるやうな事にでもなれば、私は萬葉びとに考へられてゐたやうな、山に葬られた死者の死後の姿をつくりではないか。ただあたりは若葉の明るい山で、私の上に一めんもみぢはに黄葉が浴びせられるやうに散つてゐないのがちよつと興を殺ぐ。と、そんな暢氣な事を考へながら、もうちよつと此の儘かうして自分をそんな死人に擬して山の中をさ迷つてゐて見たいやうな氣もしてゐるうちに、いくら歩いても同じところばかり歩いてゐるやうなので、私は一方ではなんだか本當に自分が佐保山の奥に迷ひ入つたやうな不安をさへ感じ出して來た。しかし、何處までいつても、山は若葉のせゐか、非常に明るかつた。明るいなりに、山は無氣味にしいんとしてゐた。誰一人にも行き逢はず、私は小一時間もそんな山の中をだんだん心細くなりながら歩きまはつてゐたが、ときどき古代人の幻想したやうな木の葉をいつばい浴びた死者のあはれ深い姿が、自分の裡に氣味わるいほどまざまざと蘇つて來てならなかつた。

漸く私は自分の行く手に大きな池の一部らしいものを認め、そつちへ近づいて行つて見ると、それが聖武天皇陵の近くの池であるらしい事を地圖で知り、自分の目標から大ぶ外れて來た事を認めたが、そこからはもう法蓮はふれんの村がすぐ近さうなので、半ばほつとした。

結局、實際に存在してゐるのだから分らないのだから分らないやうな黒髮山は見當さへつかず、只そのま

はりをうろうろと歩いてゐただけだった。それでも、その山歩きは私には決して無駄ではなかつた。私はその小一時間もかく「萬葉的に」自分が死んでゐたと云へば云へるやうな、子供らしく微笑ましい想像から、その奈良に於ける最後の日をいまだに忘れがたく思つてゐる。

昭和十六年六月

若菜の巻など

最近「かげろふの日記」「ほととぎす」それから「嫉捨」と續けて平安朝の女たちの日記に主題を求めて短篇を書いてばかりゐますせぬか、屢々平安朝文學に就いて何か書けなどと言はれますので、どうも飛んだ事になつたと思つてゐます。まだ、そんな事について一言言をもてるほど、とつくりと讀んぢやゐないし、——いままで讀んだ二つ三つのものだつて自分勝手のいい加減な讀み方だし、——しかし、少し讀み出して見たところではなかなか好いので、これから大いに勉強するつもりはつもりでいろいろとその勉強の計畫も立ててゐますけれど、今のところそれに就いてかれこれ喋舌るのは、どうも氣が引けるのです。

**

この間も「文學界」の折口信夫さんを中心とした座談會にひつぱり出されました。ほかならぬ折口さんの事ですので、そのお話が聞きたくて、僕も少し熱のある身體を押して出かけました。が、僕はなんにも喋舌るほどのことがありませんでしたので、殆ど黙つて折口さん達のお話するのを聞いてゐただ

けの事でした。——源氏物語の事などが大ぶ座談の中心になりましたが、同席せられてゐた青野季吉さんなどは毎日六時間づつも讀まれて、それで八ヶ月かかつて全部お讀み上げになつたさうです。まあ平安朝の文學を云々するのには源氏物語が一番大事なものでせうし、それを精讀してゐないと話になりませんが、僕はまだそれすらところどころ走り讀み位しかしてゐませんので、結局黙つてもゐたわけですが、——そんな話を聞いてゐるうちに、その源氏が猛烈と讀みたくなつて來て困つてしまひました。しかし、僕はいま他の仕事を控へてゐて、そんな八ヶ月はおろか、その三分の一ほどの閑暇さへちよつと得られさうもないので、家へ歸つて來てからも二三日そんな心を外へそらせるのに手古摺つた位でした。——が、それもやうやつと、この夏の間「若菜」二巻だけでもゆつくり讀み返すことにして置かうと、そんな情熱を抑へつけてゐるところへもつてきて、こんな文章を書かなければならない羽目になりました。

**

まあ、いま他にはちよつと思ひついた事がありませんので、その座談會で折口さんなどのお話を聞きながら、いろいろと考へさせられてゐた事でも少し書いて見ませう。

源氏物語五十四帖、——あの大きな物語では、僕なんぞのやうな初心者には光源氏を中心にした巻々

よりも、薫の宇治の十帖の方がどうも入り易いし、親しみやすいやうに思はれるものです。(青野さんなんぞもさう仰つてゐられた。)それで僕もこつちは少々讀んでをりますが、——事實、折口さんのお話では、文章もすつとやさしくなつてゐるさうです。——それは一つは薫とか、總角あづまかの君とか、浮舟などの、やや近代小説にでも出てきさうな面白い性格をもつた人物が出てくるせゐでせうが、——折口さんなんぞにはさういふところが却つて物足りなく思はれるのでせうか、控へ目にですが、それよりも「若菜」上下を推賞せられて居りました。

それは折口さんの御持説のやうで、源氏物語の一番上うへりつめたところがその「若菜」で、そこらあたりをつくりと讀むのが一番よいと、前にも僕に話して下すつた事がありました。——それは一昨年の夏でしたが、これから「ほととぎす」を書かうとしてゐたところでしたので、丁度手許にあつた湖月抄本とウエイレイの英譯とをちやんぼんに見ながら急いで走り讀みをしました。そんな怪しげな讀み方も随分面白かつた。そのうち暇が出來たら、もう一遍ゆつくりと讀み直さうと思ひながら、ついそれなりになつて居ましたが、そのとき讀んだ記憶を辿つて見ますと、この巻あたりになると、光源氏ももう晩年に近いせゐか、何か性格に陰翳ができてきて、柏木や女三の宮などに對するときには思ひがけず残忍なところさへ發揮します。自分よりもすつと弱い相手をこれでもかこれでもかと云つた位に苦しませ、苦しむがままにさせてゐる、——そして大いなる強者として自分は鷹揚さうに何げなさうにはし

てゐるものの、心のうちではこれまでにつひぞ味つたことのなかつたやうな激しい苦しみを味つてゐる。のみならず、最愛の紫の上にはすでに死の影がちらちらと搖曳し出してゐる。……この巻あたりまで来ると、どの人物の背後にも、目に見えずに過去がうづたかく堆積してゐて、それが彼等の現在の上にくらい影をおとし、それを何んといふ事なしに支配しはじめてゐる、——さういつた不氣味な思ひさへがする。しかも、彼等のおもてだつた生活は相も變らず單調なまでに花やかなのです。……さういふ王朝文學獨得の花やかで寂しい情趣をいま假りに措いて、さういふ物語の奥に潜んでゐる何か不氣味な感じのするものを取り出して見てみますと、これまでのやうに佛敎的な因果などで説くだけではないかにも僕らには物足りなく、やはり僕らはそれをすぐれた長篇小説の一つの特性から来る——たとへば近代のブルウストやトオマス・マンの長篇小説の持つてゐるのと同様な——何か本質的なものやうに考へても見たいと思ひます。

私はそんな事を考へる一方、それらのブルウストやマンの取り扱つたどちらかといふと頽廢的な近代人とは對蹠的に、光源氏といふものを、或意味で日本古代の最後のトラヂックな人物のやうに考へなければいけないのではないかと考へるのです。トラヂデイといふ語を悲劇と譯したのではこの場合どうもまづい、鷗外流に悲壯劇とでも譯したらまあ感じが出ませうが、——本來のトラヂデイといふものは、本當に崇高な人物が、運命の抵抗に遭つて、さまざまな苦しみをしつづつ、その生涯の何處かに人知れぬ

涙の痕をにじませながらも、しかもその生得の崇高さを少しも失はずに、最後まで生き抜く、——さういつたものではないでせうか。もう一度讀みかへさないでこんな事を言ふのは少し不安でもありませんが、「若菜」に於ける光源氏の苦惱はさういふ悲壯なる人物の最も苦しい晩年を描いたものとして立派なものだつたのではないでせうか。

それと同時に、僕はこんな事も考へ出して居りました。——さういふ本當の意味でトラヂックな古代人は、この光源氏においてはじめて文學に現はれたのではなく、それよりもつと古い、古事記などのバラッド風な作物のうちにそれを求めたら、そのプロトタイプのやうなものを見出し得るのではないか。それも従來のやうに支那の古小説などに求めるまでもなく、もつとわれわれの身近い血縁のなかにそれを見出し得るのではないか。それも既に折口さんが暗示せられてゐるやうに、遠い神代の、長い苦しい征伐の旅をつづけられた若い王子が、その果ては白鳥となつて天翔けられたといふ、あの悲壯な物語が、次第に人間化せられた物語となりながらこんなところまで姿を變へて來た、——と考へることが出來たなら、大へん愉快なのではないでせうか。そして折口さんの考へられるやうに、そのやうな神に近かつた若い王子の旅の物語の、はたの目から見ると大へんおいたはしい、さういふ漂泊の悲しみのやうなもののみが次第に人々に強調せられて、それを一層現世的にするために、その漂泊の原因に女性を結びつけて考へるやうになつてくる。先づ、いかにも古代の人々に愛せられたらしい、輕太子かろのこと輕大郎女かろのをこの

との哀切な情史が其處にある。それがいくつかの似たやうな物語——例へば萬葉集の石上乙麻呂いそのかみのおとまるの流離の歌や、中臣宅守なかのみやもりと狭野茅上さののちがみのをこめ娘子との悲戀の相聞のやうなもの——に次から次へと姿を變へながら、つと平安朝まで續いてくる。そして其處に、不遇な業平をそれとなく主人公のやうにした伊勢物語がある。次いで、それが光源氏の物語において完成せられる。(この物語では、光源氏の須磨への配流が一つの大きな主題をなしてゐるとも考へられませう。その配流の原因となつた若き日のものまされが遂に結末に近い「若菜」の巻にいたつていつか大きなものとなつて彼を苦しめ出すのです……)そして甚だわれわれを悲しませることは、それを最後のそして最高の完成として、さういふ優れた人間の典型は以後の文學から全く跡を絶つてしまつたのです。

僕はまだ淺學のせむか、或は性格上、鎌倉以後の文學にはどうも同情がもてませぬせむか、どうもさういふ本來の意味でトラジックな人物は鎌倉以後の文學には到底見出し得ないのではないかと思ふのです。何處かでニイチェがこんな風なことを言つてゐるのを讀みましたが、「われわれを悲しませる最大の損失は、優れた典型の流産である。」——そんなニイチェの言葉がいまさらのやうに痛切に思ひ出されてなりません。わが國の文學は、それから隠者たちの手に渡つて、次第に面白くもないものになり、僅かにその最もいい部分が西行から芭蕉へと受け繼がれていつて居りますが、その間に狭衣さきころもなどをはじめ源氏物語を模倣したものは數多く出たやうですが、僕がいま言つたやうな源氏物語にある本當の意味で

トラジックな精神を生かさうとしたものの一つもなかつたのは、何としても大へんな損失だつたと思はずにはゐられません。

昭和十五年七月七日

伊勢物語など

——いかに古典を読むかとの問に答へて——

四八

今夜、伊勢物語を披いて居りました。そのうちふいと御誌からのお訊ねを思ひ出しましたので、とりあへずペンを取つて、只今、考へてをるがままに書いて見ることにします。

僕がこのペンを取るまで、氣もちよく讀みふけてゐた伊勢物語の一段はかういふのです。短いもので、全部引用してみませう。

むかし、男ありけり。人の娘のかしづく、いかでこの男にもいはむと思ひけり。うち出でむこと難くやありけむ、もの病びよになりて死ぬべき時に、かくこそ思ひしかといひけるを、親聞おやきつけて、泣く泣く告げたりければ、まどひ來りけれど、死にければ、つれづれともりをりけり。時は六月みなつきのつごもり、いと暑きころほひに、宵はあそびをりて、夜ふけてややすすしき風吹きけり。螢たかくとびあがる。この男、見ふせりて、

とふ螢雲の上までいぬべくは秋風ふくと雁につげこせ

くれがたき夏の日くらしながむればその事となくものぞかなしき

かういふ一段を讀んでをりますと、何かレクキエム的な——もの憂いやうな、それでゐて何となく心をしめつけてくるやうなものでいつか胸は一ぱいになつて居ります。「宵はあそびをりて」——自分ゆゑに死んでいつた女の棺の前で、男はその魂を鎮めるために音楽などをしてその宵を過ごしてゐた。「夜ふけてややすすしき風吹きけり。螢たかくとびあがる。」もうなすわざをやめて、横になつてゐた男は、その螢に向つて、死者の魂をもう一度戻すやうに「雁につげよ」と乞ふやうな氣もちになる。昔は、雁にかぎらず、鳥はすべて魂を運ぶものと考へられて居たからである。——その次ぎの歌は、それと同じ夜に歌つたものではなく、それから數日といふもの、ずつと喪にこもつてゐた男が或夕ぐれなどにふと歌つたものでありませう。「その事となくものぞかなしき」——別に自分がしたしく逢つてゐた女と死別したのではない。だから、その事と思ひ出して悲しむ節はないけれど、自分ゆゑ死んだのだといふ事を考へるといかにも不便な氣がして、長い日ねもす思ひつづけて男はもの悲しさうになる。——そのうつけたやうな男のおもはず洩らす溜息までが手にとるやうに聞えてくるやうな一段であります。

この一段は、古註によりますと、萬葉集卷十六の車持くらもち氏の娘子の戀夫君歌を採つて換骨脱胎して一篇の物語としたのであらうと言はれて居ります。ついでに、その萬葉集の歌といふのも引用して見ませ

うか。

五〇

夫君に戀ふる歌一首并に短歌

さにづらふ 君が御言と 玉梓の 使も來ねば 思ひやむ わが身一つぞ ちはやぶる 神に
もな負せ 卜部坐せ 龜もな燒きそ 戀しくに いたきわが身ぞ いちじろく 身にしみとほ
り むらぎもの 心くだけで 死なむ命 俄かになりぬ いまさらに 君か我をよぶ たらち
ねの 母の命か 百足らず 八十の衛に 夕占にも 卜にもぞ問ふ 死ぬべき我がゆる

反歌

我命は惜しけくもあらずさにづらふ君によりてぞ長く欲りせし

卜部をも八十の衛も占問へど君をあひ見むたどきしらすも

左註によりますと、車持氏の娘が、ひさしく夫が通はないために、戀ひ焦れてその果は病氣になり、いよいよ臨終といふ際に、使をやつて夫を呼びよせたが、夫の顔を見ると、泣きながらこの歌をくちさんで、すぐに息を引きとつた、と云ふことになつてゐます。「戀しくに痛きわが身ぞ。いちじろく身にしみとほり、むらぎもの心くだけで、死なむ命、俄かになりぬ……」と自分の運命の拙なさを歎きな

がら、「いまさらには君か我を呼ぶ。……死ぬべき我がゆる」と一種の諦念に達してゐる。伊勢物語では、男の方の氣もちを主として書いてゐるが、萬葉集の方ではどこまでも女の方の氣もちを主としてゐる。さういふ殆ど死なんとしてゐる女にこれだけの骨を折つた歌なんぞは到底詠めさうもないことだと思へるのだけれど、これをさういふ哀れな女みづからの詠としてどこまでも讀者に味はしめずにはおかない。その方が直截に人の心に響くからである。だが、ひよつとしたらこれはその不幸な若い女の死を哭し、その魂を鎮めるために近親の者がその女の心もちになつて代つて詠んだものかとも考へられる。さうやつて、その死を哭し、魂を鎮めるためにはあくまでもその死者の心と一つになり切らすにはをられぬところに萬葉びとの萬葉びとらしいところがあつたのではないか。それが伊勢物語の頃までくると、同様に哀れな女の死に對する人々の態度もそんなには慟哭的でなく、同情的ではあるが、だんだん情緒的なものになつて來つつあるのが、この二つの例でもわかるのであります。

午前、僕はリルケの「ドウイノ悲歌」の一節を讀んでをりました。(これは最近芳賀檀君が非常に骨を折られて全部譯出せられました。——しかし此處には、便宜上、その一節の大意を拙譯いたして置きます。)

夭折した者たちは、もう私達を必要としないのだ。

五一

彼等は徐かに地上の事物から離れてゆく、丁度

母から乳離れてゆくやうに。しかし

屢々歎ひといふわざによつて倅せな進歩を遂げても來た、

いつも大いなる神祕を必要とする、私達の方こそ、

それらの夭折者たちなしには生存し得ないのではないか。

昔、リノスの夭折のための慟哭が、

凍えついたやうな虚無を貫いて、

はじめて音楽となつたといふ、かの傳説は空しいものであらうか。

(第一の悲歌)

リルケがその畢生の大作、「ドウイノ悲歌」を歌ひはじめるにあつて、先づ胸中に絶えずおもつてゐたことの一つは、音楽の始原は美青年リノスの突如とした死に對する人々の慟哭にあつたとする希臘人たちの考へと等しく、詩歌の發生もまたあらゆる神に似た夭折者たちを哭し、その魂を鎮めんがためであつたといふ考へではなかつたでありますか。唯、そのやうな希臘人たち乃至リルケの考へ方が私達の素朴な祖先たちのそれとやや趣を異にするのは、さうやつて愛する者の突如の喪失によつて其處に生

じた空虚がはげしく震動し、それが遂に一つの旋律に變じてわれわれの恍惚となり、慰撫となり、救済となつたといふ、いかにも自らを基準とした、彼等の西洋流な受け入れかたであります。私達の祖先らは、人の魂といふものをどこまでも外在的なものと素朴に考へて居つたやうであります。それゆゑ、それが結局は自分の慰めとなり、救ひともなることを少しも思はずに、唯、死んだ相手の魂を鎮めることのみをひたすら考へてゐたものと見えます。

さういふいくぶんの相違はあるやうであります。少くとも詩歌とか音楽とかの源泉についての考へ方が、おのづから東西軌を一つにしてゐるらしいことは、只今の僕には大へん有難い發見であるといはなければなりません。

前述の伊勢物語の一段、及びそれと關聯した萬葉集の歌一首のことを語つてゐるうちに、いつのまにかかういふリルケ詩中の希臘の傳説にまで及びましたが、かかる考への推移は僕には殆ど偶然でありました。このリノスの傳説にもつと近いものを求めようとしたら、或は古事記あたりに發見せられたでもありません。しかし、いますぐ僕には思ひつきませんし、それを調べてみるいとまも今はないので、これで御免を蒙つておきますが、僕がこれまでかうして書いて來たのは、さういふ東西の詩歌の源泉についての考への類似にただ興味を抱いたからばかりではありません。

ただ、或はかういふ日本の古い歌物語だの、或はかういふ西洋の輓近の詩だのを前にしながら、文學

といふものの本來のすがたを屢々見なほしてみたりする事は、あまりに複雑多岐になつてゐる今日の文學の眞只中に身を置いてゐる自分のごときものにとつては、時として、大いに必要なことではないかと考へてゐるからに他なりません。少くとも、僕は、さういふ古代の素朴な文學を發生せしめ、しかも同時に近代の最も嚴肅な文學作品の底にも一條の地下水となつて流れてゐるところの、人々に魂の靜安をもたらず、何かレクキエム的な、心にしみ入るやうなものが、一切のよき文學の底には嚴としてあるべきだと信じて居ります。考へついたままに、順序もなく書いて參つたので、甚だ意に充たず、又、御質問の趣にも添はないものになつてしまひましたが、取り敢へずお答へまで。

昭和十五年四月三十日

追記 折口先生の説によると、舒景歌といふものは、先づ最初、旅中鎮魂の作であつた。昔、男が旅に出るとき、別れにあたつて、女が自分の魂の半分を分割して與へる。又、男も自分の魂の半分を分離してわが家に留めるものと人々に信せられてゐた。旅中、その妻の魂を鎮めてしづかに自分に落ち着かせるやうにと、男はその日に見た旅の景色などを夜毎に詠んだのである。さういふ歌がだんだん萬葉の中頃から獨立して、純粹な舒景そのものの歌となつていつた。しかし、すべての

日本の舒景歌の中にはさういふ初期のレクキエム的要素がほのかに痕を止めてゐるのである。——そのやうにわが國に於ける舒景歌の發生を説かれる折口先生の創見に富んだ説は何んと詩的なものでありませう。僕はこの頃折口先生の説かれるかういふ古い日本人の詩的な生活を知り、何よりも難有い氣がいたしてゐる者であることを、この際一言して置きたいと思ひます。

「更級日記」は私の少年の日からの愛讀書であつた。いまだ夢多くして、異國の文學にのみ心を奪はれて居つたその頃の私に、或日この古い押し花のほひのするやうな奥ゆかしい日記の話をしてくだすつたのは松村みね子さんであつた。おそらく、その頃の私に忘れられがちな古い日本の女の姿をも見失はしめまいとなすつての事であつたかも知れない。私は聞きわけのよい少年のやうにすぐその日から、當時の私には解し難かつた古代の文字で書綴られたその日記のなかを殆ど手さぐりでのやうに少し往つては立ち止まり立ち止まりしながら、それでもやうやう讀みすすんでゐるうちに、遂に或日そのかすかな枯れたやうな匂の中から突然ひとりの古い日本の女の姿が一つの鮮やかな心像として浮かんで來だした。それは私にとつては大切な一瞬であつた。その鮮やかな心像は私に、他のいかなるものにも増して、日本の女の誰でもが殆ど宿命的にもつてゐる夢の純粹さ、その夢を夢と知つてしかもなほ夢みつつ、最初から^{あきら}詮めの姿態をとつて人生を受け容れようとする、その生き方の素直さといふものを教へてくれたのである。

さうやつて少年の日に「更級日記」を讀み、さういふ古い日本の女のひとりに人知れぬ思慕を寄せて

ゐたのは、しかし私の心の一番奥深くでだつた。私は誰にもその思慕については自分から言ひ出さうとはしなかつた。只一度、私は何かの話のついでに佐藤春夫さんの前でちよつとその事に觸れたが、そのとき佐藤さんもこの日記を大へん好んでゐられることを知ると、反つて私は何んだか氣まりの悪いやうな氣がして自分の思つてゐることを餘計しどろもどろにしか言へなかつた事をいまだに覚えてゐる。それから數年立ち、他の仕事などに取り紛れて、いつかこの日記からも私の氣もちの離れ出してゐた頃、保田與重郎君がこの日記への愛に就いて語つた熱意のある一文に接し、私は何かその日頃の自分を悔いるやうな心もちにさへなつてそれを感動しながら讀んだものだつた。それ以來、再びこの日記は私の心から離れないやうになつてゐた。

ここ數年といふもの、私はおほく信濃の山村に滞在して、冬もそこで雪に埋れながら越すやうな事さへあつた。それらの日々は、私のもつて生れたどうにもならぬ遙かなるものへの夢を、或は其處の山々に、或は牧場に、或はまた樺や樅などの木々から小さな雑草にまで寄せながら、自分で自分にきびしく課した人生を生きんと試みてゐた日々にはかならなかつた。私は或晩秋の日々、そこで「かげろふの日記」を書いてゐた。私がさういふ孤獨のなかでそんな煩惱おほき女の日記を書いてゐたのは、私が自分

に課した人生の一つの過程として、一人の不幸な女をよりよく知ること、——そしてさういふ仕事を爲し遂げるためにはよほど辛抱強くなければならぬと思つたからであつた。そして私の対象として選ぶべき女は、何か日々の孤獨のために心の弱まるやうなこちらを引き立ててすんすん向ふの氣持ちに引き摺り込んでくれるやうな、強い心の持主でなければならなかつた。しかもそれは見事に失戀した女であり、自分を去つた男を詮め切れずに何處までも心で追つて、いつかその心の領域では相手の男をはるかに追ひ越してしまふほど氣概のある女でなければならなかつた。「あるかなきかの心地するかげろふの日記といふべし」とみづから記するときのひそやかな溜息すら、一種の浪漫的反語めいてわれわれに感ぜられずにはゐられないほど、不幸になればなるほどますます心のたけ高くなる、「かげろふの日記」を書いたやうな女でなければそれはどうしてもならなかつた。

しかしさういふ不幸な女を描きかけながら、一方、私はそれとほぼ同じ頃に生きてゐた、もう一人のほとんど可憐といつてもいいやうな女の書き残した日記の節々を思ひ浮べるともなしに思ひ浮べ、前者の息づまるやうな苦しい心の世界からこちらの靜かな世界へ逃れてきては、しばらくそれに少年の頃から寄せてゐた何んといふこともない思慕を蘇らせてゐたりした事もあつた。さういふ日の私にとつては、「更級日記」を書いたいかにも女のなかの女らしい、しかし決して世間並みに爲合せあはせではなかつたその淋しさうな作者すらも何んとなく爲合せに見え、本當にかはいさうなのは矢つ張り「かげろふ」の作

者であるやうな氣がした。さうしてそのとき私が一つの試煉でもあるかのやうに自分をその前に立ち續けさせてゐたのは、その何處までも詮め切れずにゐるやうな、一番かはいさうな女であつたのだ。

**

「かげろふの日記」を書き、さらにその女のやや心の落着いた晩年の一挿話を描いた「ほととぎす」を書いた後、私もまた孤獨の境涯を去り、ひとりで信濃の山中に何かを思ひつめたやうにして暮らすやうなこともなくなつてしまつてゐたが、去年の夏にならうとする頃、或雜誌に依頼された短篇小説を書くために本當にしばらくふりに一人きりでふらつと信濃に出かけて往つた。そのときその山麓の古びた村と「更級日記」と——私が少年の日から別々にそれを懐しんできた二つのものが、不意にその折の私の餘裕のある心の裡で結び合はさり、私は再び王朝の日記から取材して小さな短篇を書いて見る氣になつた。なせこの日記が信濃に因んで「更級日記」と題せられるやうになつたか、それまでそんな事には殆ど意を介しなかつたのに、そのとき突然私にそれがはつきりと分かつた。月の凄いほどいい、荒涼とした古い信濃の里が、當時の京の女たちには彼女たちの花やかに見えるその日暮らしのすぐ裏側にある生の眞相の象徴として考へられてゐたに違ひなく、そしてさういふ女たちの一人がその心慰まぬ晩年に筆をとつた一生の回想録はまさにそれに因んだ表題こそふさはしいのだ。そして彼女の回想録を讀み

了らうとする瞬間に誰しもの胸裡におのづから浮かんで来るであらう信濃の更級の里あたりの佗しい風物、——さういふ讀後の印象を一層深くするやうな結末を私は自分の短篇小説にも與へたいと思つた。そこに私がこの「更級日記」を自分のものとして書き變へるための唯一のよりどころがあつたと云つてもいい。

**

「あづまぢの道のはてよりも、なほ奥つかたに生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを……」と更級日記は書き出されてゐる。この日記の作者は、少女の頃から、自分がそのやうな片田舎に生ひ育つた、なんの見よいところもない、平凡な女であることを反省しつつ、素直に人生にはひらうとする。ただ彼女は既に物語を讀むことの愉しさだけは身にしみて覺えてゐて、京へ上るやうになつてからも、冊子の類を殆ど手放さうとはしない。就中、源氏物語を一揃へ手に入れることの出来たときなどは、几帳のうちに打臥したきり、晝は日もすがら、夜は目の覺めたるかぎり火を近くともして、それをばかり讀んで暮らしてゐるやうな熱心さであつた。さういふ夢みがちな彼女にとつて、自分の前に漸く展かれたした人生はいかに味氣ないものに見えたことであらう。が、その人生が一樣に灰色に見えて來れば來るほど、彼女はいよいよ物語に没頭し、そしてだんだん自分の身邊の小さな變化をもいくぶん物語めか

してでなければ見ないやうになる。私はいつもこの日記のそのあたりを讀むとき、その點に一つの重心を置きながら讀むことにしてゐる。こちらがそんな氣持ちでそれに向つて見ると、日記のそのあたりで、彼女がつぎつぎに出逢ふところの三つの死——侍従大納言の女の死、乳母の死、それから姉の死の前後を描いてゐるところなど、非常に省略した筆ながら、それが反つて效果的に見える位、驚くほど生彩を帯びてゐるのが感ぜられて來る。そこには特に人の心をそるやうなところはないのに、しかもそこに作者の見出してゐる人生の小さな眞實がいかにわれわれに物語めいた濕やかな情趣をさへもつて感ぜられるか。私はそこにこの作者独自の心ばへを見とめる。さらに日記のもう少し先きに行くと、作者自身でかういふ自白をしてゐるところがある、——ゆくゆくは光る源氏や薰大將のやうな人並すぐれた男に見出され、浮舟の女君かなんぞのやうに山里にかくしすゑられて、「いと心細げにて」暮らしながら、年に一度ぐらゐその御方がお通ひになつてくだされば、あとはときをり御文などを頂戴するだけでもいい、そんな身分になら自分のやうなものだつてなれなくはなささうな氣もするがと若い女らしく夢みる、——さういふ心もちを半ば自嘲しながら打ち明けてゐる一節であるが、そんなしどけない心の中まで日記に書きつけずにはゐられなかつたその女の迷ひの美しさといふものは、寧ろその箇處でよりも、前に擧げたやうな身邊雜記的なものをさりげなく記した箇處に反つてその表面の何氣なさを通して一層あはれ深く感ぜられはすまいかと思ふのである。

そんな物はかない日々のうちに、當時の女らしくときどき夢などに佛のすがたを見ては、信仰のない人間の不爲合せをはつとするほど衝動的に知らされ、その度毎にいままでのやうに物語のみに夢中になつてゐるやうな心境を棄ててひたすら信仰に生きようとも決意するが、いつのまにかそれも中途半端に終つてしまふ。そのやうに女らしい迷ひと覺醒との間にどつちつかずに漂つてゐるやうな不安げな氣分が、その日記の後半ともなると、屢々見出されがちになつてくる。

が、遂に彼女にも「物まめやかなるさまに心もなりはてて」物語のことなども何かに取り紛れて次第に忘れるやうな中年の日々が近づいてくる。宮仕へもしたが、それもただ内氣な彼女にはつらく思へただけで、「光る源氏ばかりの人はこの世におはしけりやは」と漸つとの事で知つた後、彼女はそのとき始めて「人がらもいとすくよかに世のつねならぬ人」に見えた奥ゆかしい同じ年頃の男に出會ふ。それは冬のくらい、しぐれ模様之夜であつた。彼女は殿の戸口ちかくで、その男を相手に朋輩の女房と三人して、ときどき木の葉にしぐれの降りかかる音をききながら、世の中のあはれなる事どもをしみじみと物語りあふ。——そのしぐれの夜の對話はこの二人の中年の男女の心に沁み、互に相手を淡い氣もちでなつかしみあふが、それざりて二人には再びゆつくりと語り合へる機會は來すにしまふ。ただ二度ほど同じ殿中で互をそれとなく認め合ふ折もないではなかつたが、共に折悪しくて僅かに口頭で歌をとりはすだけで別れる。が、その逢へさうで逢へずにしまつた刹那ほど、彼女は自分がそつくりそのまま

物語のなかの女でもあるかのやうな氣もちを切實に味つたことはないのだ。さういふ氣もちにさせられただけで、そのやうな一瞬間の心と心との觸れ合ひを感じ得られただけで、既に物語そのもののこの世には有り得ないことを知つてゐる彼女は、いかにも切ないが、一方、その心の奥で一種の云ひ知れぬ満足を感じる。

その後、彼女は宮仕へを辭し、或平凡な男と結婚し、何事もなかつたやうに靜かに一生を終へる。……いま私がここにその経過を語つて來たところのものは、半ば私の書いた短篇小説のそれであつて、「更級日記」の原文からはやや離れて來たものになつて來てゐるらしい事は私も認めないではゐられない。いま私の讀みとつたやうにこの「更級日記」を讀むのは、私の詩人としての勝手な讀み方で、或は原文を非常に歪めてゐるやうな懼れもないとはかぎらぬ。もしさうとすれば、それは私の不心得であらう。しかし、このやうな心の経過は私が早い日からさういふ風に讀み慣はして、いまでは私の裡にしつかりと根を下ろしてゐるこの女の心像と切り離せないものになつてしまつてゐるので、もはや、私としては如何んともなし難いことなのである。

**

さらに私は不心得にも、自分の作品の結末として、原文ではその女は結婚後その夫が信濃守となつて

任國に下つたときには京にひとり留つてゐるのであるが、そのときその夫に伴つて彼女自身も信濃に下るやうに書き變へてしまつた。これは自分でもそこを書くときまでは全然考へもしなかつたことで、書いてゐるうちにどうしてもさう書かすにはゐられなくなつてしまつたのだ。信濃への少年の日からの私の愛着が、自分の作品の女主人公をしてそんな遠い山國で暮らしてゐる彼女の夫の身の上を氣づかはしめる事によつてのみ信濃といふものと彼女とを結びつけるだけでは何んとなく物足りなくなつて、知らず識らずの裡に私の筆をそのやうに運ばせて行つたものと見える。が、もう一つ、それをさう改竄させ、ぬきさしならないやうな氣持ちも私にはいつか生じてゐたのだ。それは私が自分の作品の題詞とした、古今集中の

わが心なくさめかねつさらしなやをばすて山にてる月をみて

といふ讀人しらすの歌への關心である。この古歌は、私には、どうしても自分の作品の女主人公とは似たやうな境遇にあつた女が、それよりもずつと遠い昔に人知れず詠んだもののやうな氣がしてならない。「大和物語」や「無名抄」などで歌物語化せられてから人々の心にいろいろな影を投げてきた古歌ではあるが、さういふ境遇の女が自分の宿命的な悲しみをいだいた儘いつかそれすら忘れ去つたやうに見えてゐるが、或月の好い夜にそれをゆくりなくも思ひ出し、どうしやうもないやうな氣もちにさせられてゐる時におのづから詠み出したものとして、それを考へて、一番私の心にそのなつかしさの覺え

られる歌である。——原文では、信濃に下つてゐた夫はそれから一年立つか立たないうちに病を得て歸京するが、その後間もなく身まかつてしまふ。あとに取り残された女は「さすがに命はうきにもたえず、ながらふめれど」遂にまつたくの孤獨となつた自分の身の上を「をばすて」と觀じ、そのやうな感慨をその古今集よみ人知らずの歌を本歌とした一首の和歌に托してゐるのだが、私は彼女自身の詠んだその歌よりも、この古歌そのものをこそ彼女に口ずさませたいやうな氣がしてならなかつたのである。——それ故、私は自分の作品に特に「姨捨」といふ題を選び、その作品の中では女主人公をして夫に伴つて信濃に赴かしめるところで筆を絶ち、その代りにただ、その後の女の境涯をそれとなく暗示するかのやうに、そのよみ人しらすの古歌を題詞として置いておいたのである。

今年の晩春の一日、私ははじめてその更級の里、姨捨山のほとりを歩いてみた。この山國のまなかでは、遠い山々にはまだかなり雪が残り、里近い田畑はすべて枯れ枯れとしてゐて、いかにも春なほ淺い感じであつた。私は一冊の小さな書物を携へてゐたが、その書物によると、多くの古歌に詠せられた平安朝の頃の姨捨山といふのは、實は私のさまよひ歩いてゐる低い山ではなく、その山のもう一つ向う側に半ば隠れながら山頂だけ見せてゐる現在の冠着山かむりやまだつたのださうである。さうでなくてはならない。

現在姨捨の驛のあるこのあたりがさうなのでは餘りにも感じが小さ過ぎる。この山の向うの、いかにも奥深い感じのする冠着山こそわれわれの姨捨山のやうに見える。

なほ、その書物によると、それよりもつと古代の姨捨山は、その冠着山でもなく、やはり同じ更級郡にあつて昔小長谷山といはれてゐた山（現在の參謀本部の地圖には篠山と記載せらる）であつたらしいと云ふ。それは泊瀬即ち上古の葬所のあつたところであり、それが轉訛して「をばすて」となり、それへ古代の信濃でも行はれたらしい棄老の傳説が結びつきながら、丁度、その讀人しらすの古歌の詠せられた平安朝のはじめ頃を界として、現在の冠着山に移動したのであらうと考證せられてゐる。「大和物語」や「無名抄」などに傳へられてゐる有名な傳説の出來たのはその後の事であつたらしい。その後さらに、元祿の頃芭蕉が此地にやつて來て「更科紀行」などを書いた少し前に、その冠着山からもう一度現在の姨捨山に移動して來てゐるのださうである。——しかし、いまのところ私はそれらの諸説にはこたはずに、自分の前にある古歌をただそれだけのものとして單純に味ひたい。——或はこの讀み人しらすの歌は、その更級の里にあつて近親を失つたものがそれを山に葬つた後、或夜その山に照る月をながめながら詠んだ哀傷の歌として味ふのが本筋かも知れないが、いまはその考へをさへ棄てて、私はそれをただわれわれの女主人公のやうな境遇の女がその里に侘び住みながらふと詠みいでた述懐の歌としてのみ味ひたいのである。

さうやつて半日近く姨捨山のはとりを歩いてから、私はまた木曾路へも行つて見た。その谷間の村々もまだ春淺い感じであつた。まなかひに見える山々はまだ枯れ枯れとしてをり、村家の近くには林檎や梨の木が丁度花ざかりであつた。其處でもまた私は古代から中古にかけての木曾路がいまの道筋とは全く異り、それらの周圍の山々のもつと奥深くを尾根から尾根へと傳つてゐたものであることを知らされた。私はそれらの山奥に、われわれの女主人公たちがさまざま感慨をいだいて通つて往つたであらう古い木曾路が、いまはもう既に廢道となつて草木に深く埋もれてしまつてゐる有様をときをり空に描いたりしては、何んといふこともなしに一人で切ない氣もちになつて、花ざかりの林檎の木の下などをぶらぶらしながら晩春の一日をなまけ暮らしてゐた。

昭和十六年六月

Handwritten text in a vertical column on the left page, possibly a page number or a small note.

おえふがまだ二十かそこいらで、もう夫と離別し、幼兒をひとりかかへて、生みの親たちと一しよに住むことになつた分去れの村は、その頃、みるかげもない寒村になつてゐた。

浅間根腰の宿場の一つとしての、瓦解前の繁榮にひきかへ、今は吹きさらしの原野の中に、いかにも宿場らしい造りの、大きな二階建の家が漸く三十戸ほど散在してゐるきりだつた。しかもそのなかには半ば廢屋になりながら、まだ人の棲んでゐるのがあつたり、さすがにもう人が棲まずになり、やぶれた床の下を水だけがもとの儘せせらぎの音を立てて流れてゐるやうなものも雜じつてゐた。

村の西のはづれには、大名も下乗したといはれる、樹形の石積がいまもわづかに残つてゐる。

その少し先きのところで、街道が二つに分かれ、一つは北國街道となりそのまま林のなかへ、もう一つは、遠くの八ヶ岳の裾までひろがつてゐる佐久の平を見下ろしながら中山道となつて低くなつてゆく。そのあたりに、この村を印象ぶかいものにさせてゐる、「分去れ」である。

その分去れのあたり、いまだに昔の松並木らしいものが残つてゐたり、供養塔などがいくつも立つたりしてゐる。秋晴れの日などに、かすかに煙を立ててゐる火の山をぼんやり眺めながら、貧しい旅びとらしいものがそこに休んでゐる姿を今でもときどき見かけることもあるのだつた。

おえふの生れた家、牡丹屋は、もとはこの宿の本陣だつた。何もかも昔のつくりで、二階はいかめしい出格子になり、軒さきに突きでた木彫りの蒼龍にも、まだ古さびた色が何處やらに、ぼんやりと残つてゐた。……

おえふたちは小さいときから、この生れた家を離れたきりであつた。——もともと、おえふの父の草平といふ人は、郡はおなじでも、ここから五里ほど離れた或村の赤屋敷といはれてゐる舊家の出で、牡丹屋とは血つづきだつたが、此の村の人ではなかつた。が、明治のはじめ頃にその牡丹屋の主人がまだ稚い子を残して亡くなると、後見に頼まれて、瓦解以來何度も倒れさうになつてゐたその世帯を引き受けることになつた。しかし、牡丹屋は、——といふより、この古い宿全體がいよいよいけなくなるばかりだつた。——そこへ鐵道が出来た。が、村は素通りをされる。——おえふの父の、草平は、その預つてゐる牡丹屋をみすみすその儘仆れるのにまかせてゐるときではないと思つた。そこで自分の一存で、隣村の原野のまんなかに出来た停車場の前へ、率先して、牡丹屋の裏にあつた厩舎をそっくりそのまま移した。さうしてそこで蕎麥を賣り、汽車辨を一手にまかなつた。それが見事にあつて、牡丹屋は徐々に立ちなほり出した。

おえふも、弟の五郎も、その驛前にできた新店から、たつつけ姿で、舊道のはうにある寺を校舎にし

た小學校へかよつた。

その村も村で、それまではほかの宿場とおなじやうな運命をたどつて、ひどく衰へ、みるかげもない一古驛となり果ててゐた。が、その村のなかに停車場のできるのと前後して、そこいら一帯の風物がそのすこし前から日本の各地に夏を過ごす高原を捜してゐた外人の宣教師たちの目がねにかなつて、夏だけ、そこに風變りな部落がいつのまにか出来るやうになつてゐた。

おえふは弟たちと寺の小學校にかよひながら、さういふ村の急激な變化を、——村のあちこちに紅殻べにがら塗りの小屋が急にたち、高草やキャベツなどの畑ができ、又、その近くに牛や羊の飼はれてゐる牧柵などができてゆくのを、何か目をみはるやうな驚きと、一種の憧れをさへもつて見てゐた。しかし、それも夏のあひだだけのことで、冬になると、おえふたちは又いかにも山の中の娘らしい娘に立ちかへつてゐた。

おえふが年頃になると、その村の葛ホテルから、突然、長男の嫁よめにと懇望された。

大體、その葛ホテルといふのは、もうその頃は村の北方にある森の中にいかにも山のホテルらしいものになつてゐたが、ついその前までは、舊道のなかほどにあつたほんの小さな葛屋といふ旅籠屋だつた。——若い頃村を飛び出して、静岡あたりで傳道師をしてゐた當主の耕作は、このごろ自分の郷里が

外人のおほく集つてくる避暑地として拓ひらかれたしてゐるのを知ると、こんな事をして妻子をかかへながらうろろしてゐるよりはと、自分の家に戻つてきて、そこで日曜學校をひらき、かたはら英語がすこし話せるので通譯などをやつてゐた。そのうちに知合の外人たちに頼まれて、自分の家にも二人三人泊めるやうになり、その客たちにいろいろ教はつて、疊の上に花の模様のあるうすすべりを敷いたり、繩でベットを編んだりすることを覚え、だんだんホテルらしい恰好になつて來はじめてゐた。

そのうちに好いパトロンが見つかった。獨逸人の寡婦で、二三度泊りに來てゐるうちに、この村がすつかり氣に入り、本氣でホテルをやる氣があるなら金を出してやるから此處にもつといいホテルをつくつてはどうだと、向うから言ひ出した。そこで、その獨逸婦人の提案で、村の北にある小ぢんまりとした森のなかに場所を選んで、そこにとにかくもさうしたホテルらしいものを建てた。さうしてそれから數年のうちに、すんすん發展して、そのうち本陣でもやはりはじめたホテルを凌駕して、村で一流のホテルになつてゐた。

ただ、さうやつて稼業のはうは一番工合のいいホテルになつてはゐた。——だが、この狭い山のなかの村、ことに古い家柄のものをいふ此の村では、なんとしても葛屋の一家は家柄が悪かつた。同じ稼業をしてゐる本陣とは、何かにつけ、とても太刀打ちできなかつた。……そこで長男の嫁よめとして、牡丹屋のおえふが眞先きに選ばれた。牡丹屋といへば、いまでこそ昔ほどの羽ぶりは利かなかつたが、隣の

村の本陣。——そしておえふの父の草平は、たとへ本家すぢではないとはいへ、いろいろ牡丹屋のためにも、村のためにも盡してきた人で、いまではもう押しも押されぬその村の顔役になつてゐた。

おえふが、親の云ふなりになつて、葛屋ホテルに嫁いでいつたのは、明治の末、かの女が十九の春だつた。……

結婚して一年。——おえふは、はじめて出来た子の初枝を生みに、母親のもとに歸つてくると、そのままどうしてももうホテルに戻らうとはしなかつた。理由はなんとも云はなかつた。それを云つても、誰にも分かつてもらへさうもないから、一そ云はずにゐようと思ひ込んでゐるやうな容子だつた。……おえふは、それまでとは打つて變つて、急に勝氣な女になつた。誰になんとも云はれようと平氣なやうに、店さきなどで背なかにした初枝をあやしてゐるおえふの姿は、いかにも屈託なささうに見えた。

さうしておえふの父がいままで面倒をみて相當のものに仕上げた驛前の店を、もう成人した本家のあとりに譲つて、それと入れ代つて、隣の村のものと牡丹屋に隠居をすることになつたとき、おえふも初枝を連れてそちらへ一しよに往つた。さうしてそれきり遂にホテルへは戻らなかつた。弟の五郎は、それを機會に、東京に出た。

おえふは初枝を漸くふところから離せるやうになつた頃、ホテルでは草津の有名な温泉旅館からその評判娘を嫁にしたといふ噂を耳にした。

が、それからまだ一年と立たないうちに、その嫁も離縁になつたことを知つても、おえふはもうなんとも思はないやうになつてゐた。一たん詮めると、かうも氣が強くなれるものかとおもはれるほど、かの女は全くいまの境涯に安んじてゐるやうにさへ見えた。さうして、そこいらの村の女たちと同じやうになりふり構はない容子をしてゐたが、さすがに何處か品があり、それがかへつてかの女のまはり一抹の淋しさを漂はせてゐたことはゐた、——が、そんな事にも無頓着らしく、いかにも何氣なささうにしてゐるおえふには、ああ不しあはせな女だと人々に云はせないやうなものがあつた。

こちらの舊牡丹屋は、もうながいこと廢業同様になつてゐたが、おえふたちが移つて來てから、夏など人に頼まれて學生を二人三人預かつてゐるうちに、それからそれへと聞きつたへて、夏休みになると學生たちが行李に一ぱい本を詰めて勉強に來だした。そのうち、村の南にある谷間に夏場だけの假停車場ができ、使ひ古しの乗合馬車が一臺きりで、松林の中を伐りひらいた道をとほり、そこと宿との間を往復するやうになつた。

おえふはその夏のあひだ、學生の世話を一人で引き受け、小女などを相手に、昔の自分に立ち返つた

やうに、赤い裨がけで娘らしく立ち働いた。年よりもずつと若く見せてゐるおえふの美貌は、學生たちの間に、何かと噂の種を播いてゐた。しかし、おえふはそんな事にはいつかう氣もとめず、身なりかまはずに働いてゐるばかりだつた。さうして夏だけ手つだひに歸つてきてゐる弟の五郎などに何かぞんざいにものを云つてゐるときなどは、これがあのおえふさんかと思ふほど、きびきびしたものの云ひ方をしてゐた。

或る夏の半ばのことだつた。おえふが小女と一しよに流しもとで働いてゐると、丁度日ざかりなのでさつきから人けの絶えてゐる街道のはうに、急に人影がみとめられた。見てみると、三村さんの奥さんと、娘の菜穂子と、もう一人、見かけたことのない、背がたかくて、疲れたやうな、痩せた男との三人づれだつた。三村夫人はふと日傘の中からおえふと目を合はせると、何か見られたくないやうに、無言で會釋をして、すうつと通り過ぎていつた。おえふはさういふ夫人の容子に何か異様なものを感じた。そのときその連れの背のどかい男は菜穂子とならんで、家の前に立ち止まり、軒さきに突きでた龍の彫りものなどをまぶしさうに見上げてゐたが、ふと家の中から夫人と會釋をかはしたおえふの姿に目をとめると、何か意外なやうな目ざしでかの女の方をじつと見た。が、そのまま菜穂子に何か話しかけられて、もう一度軒のはうへ顔をあげながら、そこから歩き去つた。

こんな山國にはこんな女もゐるのか、——その人の目はさう云つてゐた。おえふはそんな鋭い目ざしでこれまでつひぞ人に見られたことがないやうに思つた。

二

さういふおえふは、それから何年立つても、その頃のままのおえふでゐた。そんな山の中ですんすん年をとつてゆくこともいつかう苦にならないらしく、いつも何氣なささうに暮らしてゐたが、それでゐておえふは不思議にいつまでも若く美しかつた。

しかし、おえふの背負はされてゐる運命はそれだけではなかつた。

娘の初枝が十二の冬、村の小學校への往きがけに、凍みついた雪の上に誰かに突きころがせられたやうに轉んで、それがもとで脊髄を患ふやうになつた。

一年たち、二年たつても、その病氣はすこしも快くならなかつた。とうとう上田の病院に入れて、いやるの無理に手術をさせたが、結果ははかばかしくなかつた。その上、初枝は自分の病氣に怖氣づき、もうすつかり寝たきりになつてしまつた。

おえふは、自分の娘がみすみすそんな癡人同様になつてゆくのを自分の力ではどうにもならないことを、そのときまざまざと知らせられた。

それから二三年の間といふもの、おえふの心痛には、殆ど量り知れないものがあつたはずだ。——だが、みたところ、おえふは相變らずもとの儘のおえふであつた。

八〇

その春ごろ、東京から歸つてきた弟の五郎は、やつと村に落ちつくやうになつても、すこしも家業に身を入れず、夏には學生たちを誘つて小諸へ酒をのみにいったり、冬は冬で、獵に夢中になり、ジャックといふ犬をつれて出たまま、何處へ獵にいくのか、二日も三日も歸つて來ないことがあつた。

「む、あいつは家に落ちついてゐようなんて考へもしないんだ。若いうちにや、好きなやうにするがいいさ。」

老人はいつも爲様がないといった顔をしていふのだつた。

そのまま、その冬も、なにもかも吸ひつくやうな寒さのうちに過ぎていつた。

その翌年。——何か暗いかげが、家全體をおほひ出してゐることは匿せなかつた。

そんな年の、秋になつてからだつた。ときどきおえふの許に東京から手紙が届いた。おえふはよく何處かの物陰へいつて、一人でそれをよんで來ると、そのあとでしばらく淋しさうな顔つきをしてゐた。

「どうせ生きられても、ちやんとした身體になれない位なら、いつそ此の娘でも死んでくれたら……」

おえふはさう心の隅でおもふこともある。ふいと何か希望のやうなものがかすかに涌いてくる。

何度も山に雪がふつて、麓の村にもやがて雪がおとづれさうになつた頃、初枝の工合の悪い日が續き出した。それまで何か外のことと氣をとられてゐたやうに見えるおえふは、急に我に返つたやうになつて、初枝の看護に身を入れるやうになつた。

「この娘は、この頃、ずつと一人で苦しんでゐたのだわ。何か云ひたさうに、いつも大きい眼でじつと私を見つめてゐたけれど、云ひたいことも云へなかつたのだ。……私はもうすこしその傍に坐つてゐてやらなければいけないかつた。……」

さうおもふと、自分ひとりだけの考への中にとちこもつてゐた此の頃の自分が、無性に悔やまれて來た。

おえふはもうすべてを證めた。初枝のために、自分のすべてを棄てようとした。——が、さういふ自分がさぞ慘めに見えるだらうと、ふと自分を見かへしてみたとき、おえふは其處に、もとの儘の自分を見いだしたばかりだつた。

もう冬だ。明けがた、暗いうちに獵に出かけたさう、五郎は日が暮れても歸らないことが多かつた。暗くなつて歸つてきても、何もいはずに、獲物をはふり出し、圍爐裡に土足のまま這入つて、いつまで

八一

も一人きりで、冷え切つた體を温めてゐた。その間、うすぐらい土間で、ただジャックの白いすがたが何やら蠢いてゐるばかりだつた。……

三

老人は、たまにこの古驛を見にくる山好きの旅びとなどがあると、その客を相手に、若いころからの此の村の變りやうをさまざまに思ひ出し、夜のふけるのも知らぬやうに語りきかせてゐた。

その頃は、まだ何處にもいまのやうな官有林ができてゐず、わづかに赤松がまばらに立つてゐただけで、村から火の山の裾野は一目だつた。

吹きとばす石もあさまの野分かな

さういふ古人の句さながらに、昔噴き上げられて落ちてきた焼石があちこち草の中に見えてゐるきりの、果てしない裾野がこの村を過ぎる旅びとの足もとまで迫つてきてゐ、見あげると、ついもうそこに火の山の火口がちぎれちぎれに煙を飛ばせてゐる。……

さういつた野分のころの一昔前の村のありさまを、老人はさういふ話の折には、いつも好んで思ひ浮べるらしかつた。

その老人が一生のあひだ自分の骨折つてやつてきたすべての事は殆ど忘れ、たださういつた野分の日のありさまだけを自分の前に浮べながら、一と月ほど煩つただけで死んでいつたのは、まださういふ冬の立ち去らないうちだつた。

老人の死後、思ひがけない困難がおえふたちのまへに生じた。老人に舊牡丹屋を預けたのは老人一代といふ約束だ、と本家のはうで云ひ出したのだつた。それはおえふたちには寢耳に水だつた。その本家のあととりと老人とのあひだにどういふ約束があつたのか、誰もそれについては知らなかつた。——しかし、おえふたちにしてみれば、こちらの牡丹屋は自分たちのもの、といふ氣もちになり切つてゐた。それが當然のことと思へてゐた。——だが、本家からさう云ひ出されると、何分ほんの口約束だけだつたのだらうから、どうにも爲様がないことだつた。結局、どちらに分があるといふこともない儘に、紛糾はいつ果てるともつかなかつた。……

そんななかで、五郎は、もと小諸で藝者に出てゐて、二年ほど前からすこし體をこはして東京に歸つてゐたおしげといふ女を家内にした。おしげが小諸にゐた頃からの約束であつたのを老人には隠してゐたのだつた。おえふたちはそれをうすうす知つてゐたので、こんどの事にも何も云ふことはなかつたけれど、場合が場合だけに、困つたことになつたと思つた。

おしげは、しかしそんな稼業をしてゐた女にも似ず、いかにも氣立のいい女だつた。もうすつかり體

もよくなり、牡丹屋にきた日から、たつつけ姿で、おえふと一しよになつて働いた。こんな山奥で、かうやつてなりふり構はずに働いてゐる方が、この東京の女にはかへつて何んの氣苦勞もなくていいらしかった。

おえふたちもそれを見て、思はずほつとした。

ただ、これからみんな唯一の頼みにしようとしてゐた五郎が、その梅雨さきから、突然足を患ひ出した。リウマチスといふ診断だつた。——が、何しろ、この二三年つづけて雪の中で獵ばかりしてゐたので、すつかり冷え込んでゐたと見え、それはかなり悪性らしく、梅雨がすぎ、夏になつても、立てなくなつてゐた。

そんな五郎の病氣のおかげで、ここしばらく、本家とのいざこざもその儘になつたきりであつた。

夏になり、又學生たちがやつて來た。をととし頃からその學生たちの間に、自分のことが何かと陰口にのぼつてゐるらしいのを、おえふも知らないことはない。おえふにはそれが何よりもつらいことだつた。が、この夏は、おしげにすつかり學生のはうの事は任せてゐられたので、自分は殆どひきこもつて初枝や五郎の看護に向ひ、あまりそんな噂には心をわづらはせずゐられた。

九月になつて、學生たちがみんな歸つてしまひ、家のものだけになると、いつになくおえふは自分のまはりが急に淋しくなつたやうな氣がした。なんとなくいつもとは工合がちがふやうに見えた。「また

自分たちだけが取り残された——」なせか、そんな滅入るやうな氣がしてならなかつた。

秋が深くなつて、朝など山の方から獵銃の音がきこえ出すと、老犬のジャケットはなんだかじつとしてゐられないやうに走りまはり、不意と見えなくなる。さうして日暮れ頃枯葉を一ぱい身につけて歸つてきては、圍爐裡のそばにさびしさうに上り込んでゐた。ひとりで山へいつては雉子などを追つてくるらしかつた。

冬になると、襦袢のやうなものにくるまつて、村の子たちが大きいのも小さいのも一かたまりになりながら、ほかにはもう殆ど人どほりのなくなつた街道を、朝夕小學校にかよふ姿が目立つやうになる。

「あれが越後屋の子さ。ああ、あつちかい、あれは……」そんなことを老母がおしげに教へてやつてゐる。見馴れないおしげには、まだ、どの子もおなじやうに見えるらしかつた。……

十二月も末になつた頃、突然、見知らない洋装の男女が村のなかに姿を現はした。

林のなかをしばらくさまよひ、それから村はづれまで往つて雪のある山を見たりしてから、村の子に案内をさせて、牡丹屋にきた。三村さんの知りびとらしく、その別荘を明けて一と冬使はせてもらへまいかと云ふのだつた。どうも様子が變なので、それまで二人を泊めて、返事を待つことにした。が、三村夫人からは何んの返事もなかつた。その代り、有名な小説家の森さんといふ人から牡丹屋に宛てて爲替を送つてよこし、もしそちらにさういふ二人づれがいつてゐたら何分よろしく頼むと云つて來た。

そこで、おえふは病氣の五郎と相談して、丁度いま東の林のなかに一軒小さな家が空いてゐる、何年も人が住んだことがないので大ぶ荒れてゐるだらうけれど、それでよかつたら借りて上げませう、といった。二人はそれに同意した。そこで、牡丹屋では一通りのものを揃へてやつて、そこに二人を住ませた。

雪深い林のなかで、二人はそれきり滅多に村へも出て来ずに、ひっそりと暮らしてゐた……

おえふはいつしか二人の身の上を知るやうになつてゐた。男は或雑誌の記者で、女は良家の娘だつた。現在の二人にとつては、自分たち以外には、世間もなにもないらしかつた。山のなかの寒さも何んともないらしかつた。——さういふ二人の向う見ずの生活が何かしらおえふを脅やかした。……

二月の末、おえふは誰もほかにゐなかつたので、森さんの送つてよこした書留をもつて、その林のなかの家まで届けてやつたことがある。

林の中には、まだ雪がところどころに薄汚く残つてゐた。おえふはジャックを先に立てて、そんな中を歩きにくさうに往つた。

林の奥から、ふと、人の諍いさかひ合ふ聲がきこえて来た。おえふは悪いときに來合はせたとおもつた。が、ジャックがひとりですんすん先きさきにその中にはひつてしまふので、やむをえず、かの女も柴折戸の前に立ち止まつた。

「お手紙がこちらに參つてをりましたので——」と少しためらひながら言葉かけた。

漸つと男が外套を着たまま出て来た。なんだか髪を掻きむしつたやうに逆立ててゐた。

おえふはそちらを見ないやうにして手紙だけ渡した。

「これはどうも——」

男はそれを受けとつて、封筒を見ると、何か待ち切れずにゐたもののやうに、おえふの前でもうそれを披いてゐた。

「おい」男は急に物陰にゐる女のはうに聲をかけた。「森さんは北京に往かれるんだとよ。……」

おえふはいそいで柴折戸のそばを離れた。

それから再びジャックを先立たせ、残雪の間を拾つて歩き歩き、いま見てきたばかりの荒うらんだ二人の生活を心に泛べながら、かの女は何か思ひがけない思ひに充たされた。さうしてふいと、かうやつて林の中をひとりで歩くことなど殆ど無いといつていい此の頃の自分のことをかへりみた。

その林を出ると、冬の日がばあつとかの女の顔にあたつた。おえふはいつになく老おけて見えた。

それから二三日後、林のなかにはもう住んでゐるものがゐなかつた。……

この頃になつて、誰が云ひだすともなく、古驛としておもかげをよく残してゐるこの村の家並み、こゝに昔の本陣だつたままの家作りの牡丹屋や櫛形きしがたの茶屋の古びた美しさや、その村はづれの分去れわかきのあたりの山々の眺めなどをなつかしんで、東京などからわざわざ訪れてくる人が多くなり出した。

昔この宿しゆくに遊女がゐてその墓の一とむれがいまも残つてゐるさうだが、といつて、その墓のありどころを尋ねてくる學者らしい外人などもゐた。そんなときには、おえふが出て、故人になつた老人がよく客などに話してゐたのを聞き覚えてゐるまま、それはたぶんあそこのこととせうと、うちでは奉公人どもの墓といつてゐる、寺の墓地とは別になつて、もつと先きの森のなかにある一とむれの古い墓を教へるのだつた。

或日、老母がなんといふこともなしに昔話を思ひ出して、初枝にきかせてやつてゐる。——昔、この村に古い狐が住んでゐて、それが人知れず毎晩のやうに数年まへ武家に殺害せられた或遊女の墓のほとりをさまよひ、ときどきそつとそれに近づいてはそれを舐めてやつてゐた。村びとがやつとその事を知つて、其處へいつてみると、その墓にもひとりで深い傷ができてゐたのだつた……

おえふはそばで、そんな話をききながら、自分もはじめてそれを聞いた子供の頃の事、——秋など、森のなかで眞つ紅になつた蕨のからみついてゐる古い小さな墓などを見かけると、きまつてその狐の話話をを聯想し、何だか遊女といふものをかはいさうにおもつたりした事のあるのを思ひ浮べてゐた。……

「初枝もすぐ二十はたちになる。——」おえふはさう考へて、急に何かに愕おどろかされるやうな氣もちになることがある。

考へてみると、十二のときに病氣をしてから、いつまでもその日の儘の心もちで、自分にすつかり甘え切つてゐる初枝を相手にして暮らしてきたせぬか、自分までが一しよにその日から殆ど年をとるのを忘れてしまつてゐたかのやうだつた。

おえふには、その日から後の事はなにかもついこなひだの事のやうに思へる代り、それより先きにあつた出来事はすべてがもう夢の中のやうに思へるばかりだつた。

こないまの初枝のやうな年頃に、自分はもうあんな不しあはせな結婚をさせられてしまつて、——と、さう強ひて思つてみても、その頃の自分のすべてが何ひとつ目を外らせたいほど痛ましい姿をして蘇つて來ないのである。……

おえふは、まだ四十にもならないうちに、こんなこたはらない氣もちで、自分の若い日のことが思ひ出されようとは思ひも及ばぬ事だつた。

いそがしい夏場だけ、高崎の在ざいから飯炊きの婆さんがよく働きに來てゐた。目が悪いので、いつも孫ぐらゐの小娘を連れてきてゐた。去年歸るときに小僧でもあつたらと頼んでおいたら、こんどはもう自

分は働けないからといつて、十八になる捨吉といふ自分の甥を世話してよこした。——夏のはじめ、その捨吉が来てみると、生れつきのひどい跛びつこだつた。まあ、この若いものまでが——と、おえふは老母やおしげとおもはず顔をみあはせた。

しかし、今年も非常に客の立て込んだ夏の間、まだ五郎がリウマチスで寝たきりになつてゐる始末なので、そんな捨吉でもゐてくれた方がすつとよかつた。

「こちらが上段の間じやうだんまといつて殿様がお泊りになつたお部屋です。それからあちらがお小姓の間で……」捨吉は、昔の本陣の構へを見せてもらひに牡丹屋をおとづれる外人たちの一行の先きに立つて、跛を引き引き、説明して歩かなければならないこともある。

お殿様の間に泊つてゐる、松平といふ、美術史専攻の學生は、いつもその部屋の奥で靜かにレンブラントの畫集などに向ひながら、さういふ捨吉の説明をかしさうに聞いてゐた。

「捨さんもなかなか牡丹屋の説明がうまくなつたな。」

松平は捨吉の顔をみると、よくさう云つて冷やかした。

或日、捨吉が學生たちのしてゐた話を聞いてきて、おしげに云ひつけてゐた。

「さつき藤棚の下に五六人集つて、何かおもしろさうに話し合つてゐるので、ちよつと聞いてましたら、

みんなで此の牡丹屋の最後の日のことを勝手に想像しあつてゐるんです。誰かが、もう五六年もしたらひとりで突然目の前でがらと崩れてしまふやうな氣がすると云ふと、いや、まだこのまま百年位はもちこたへて、この次ぎの淺間の爆發でやられるさなど云つてゐる人もゐました。……」

おしげはそんな事をきくと、本氣になつて腹を立てた。

「馬鹿をおいひでないよ。お前はまたそんな事をとんな顔をして聞いてたんだらう。」

捨吉はさも困つたやうに、ただ、人のよささうな笑ひを浮べてゐた。

「私、なんだかこはくなつたわ。」初枝は陰でそれを聞きながら、おえふの方を何か訴へるやうな目つきで見あげてゐた。

おえふは縫物をしながら、こともなげに云つた。「そんな、お前、ばかばかしいことを。」

さう云つたきり、おえふは娘から目を外らせてゐた。おえふはそのとき心のなかでこんな事を考へ出してゐた。——いまこそ弟の病氣のおかげで本家との問題が小康を得てゐるもの、いつまたそれが再燃して、自分たちを劫おびかすやうになるか分からない、若しかして自分たちがこの家を手放さなければならぬやうな羽目にでもなつたりするのよりか、一そのこと、その前にこの牡丹屋がひとりでさうやつて崩壊して自分たちも一しよに死なれたらいい。……

「そんなことをこはがつてゐた事には、お前……」

おえふはさう云ひながら、しけしけと初枝のはうへ目をやつた。

九月になると、學生たちはあらかた歸つてしまふ。急にひつそりとなつた牡丹屋の前に、或秋らしくなつた日、一臺の最新型の自動車が着いて、そのなかから若い外人の男女が下りた。葛ホテルかなんかで知合になつた同志が、人目を避けて、此處まであひびきに來たらしかつた。

二人とも日本語がよく分ならず、おしげは困つて、まだ滞在してゐた松平に來てもらつて、通譯をたのんだ。

松平も困つたやうな顔をして二人と何やら押問答をしてゐたが、漸つと笑ひながらおしげの方をみて云つた。この二人は、二三時間でいい、どこか静かな部屋があいてゐたら、其處で休ませてくれ、といつてゐるんですよ。さうしてあちらのホテルはどこも人が多過ぎる、と勝手な文句まで抜かしてゐるんですよ、と付け加へた。

おしげも笑ひながら、その厄介な客を連れて、裏二階にあがつていつた。

松平はそのまま小さな本を懐に入れて、宿を出て、東の林のはうへ往つた。……

夕方近くなつて、松平が林から歸つてくると、すつと遠くの方から牡丹屋の大きな建物の前にまださつきの外人の乗つてきた自動車の駐まつてゐるのが小さく見えた。それが何か異様に西日にびかびかと

光つてゐた。

九月の末になつて、一番最後まで滞在してゐた松平もとうとう歸つていつた。

捨吉は自轉車にその荷物をつけ、一しよについてきたジャックとあとになり先きになりしながら、森のなかにさきに姿を消した。

その森にはひる前に、松平は急にふり返つて、最後に村全體を見わたした。村のあちこちの森から、炭を焼いてゐるらしい煙りがいくつとなく立ち上がつてゐた。

松平は、自分の去つたあともこの古驛に残る人達のことを考へながら、そのまま森のなかへはひつて往つた。

谷間の驛には、捨吉が自轉車に手をかけたまま、何かぼんやりとして待つてゐた。その足もとに、老犬もうづくまつてゐた。

汽車のくるまでまだ間があるので、松平もそこいらの柵によりかかりながら、山の方を眺めてゐた。「信州つて随分淋しいところですね。」捨吉がふいに松平のはうを向いて云つた。

松平は意外なやうな面もちで捨吉の方を見た。さうしてこのかたはな若者がこの村のものでなく、高崎の在から雇はれて來てゐることに漸つと氣がついた。

「ふん、捨さんでも淋しいなんぞとおもふのかい。」

さう事もなげに云つてしまつてから、ああ、もうすこし何んとか云つてやればよかつた、と松平はおもつた。

「さういへば、捨さんははじめて此處で冬を過ごすんだね。冬は寒さうだなあ、ここは……」

捨吉は黙つたまま、足もとの老犬のはうへ目を落してゐた。

松平もそれきり黙つて、もうすつかり秋めいて近かちか見える火の山の火口のあたりに小さな雲がたえず移つてゐるのを見やつてゐた。小さな雲がひとつづつ立ち去ると、そのあとに火の山の煙らしいものが一すぢ、かすかに立ちのぼつてゐた。……

昭和十七年十二月

斑雪

「冬になつて、雪がふつたら、すぐ知らせて下さい。そのときはきつと、一人ででもやつて來ますから。……」

その山の村にとうとう居残つて冬を越すことになつたK君夫妻に僕はその秋のなかばその村を立ち去るとき、さう云ひ残していつた。

「……けさほどから急に雪がふりだしてゐますの。この分では大ぶ積りさうですので、主人が早くお知らせした方がいと申しますから、これからこの手紙をもつて雪のなかを郵便局まで一走りいたします」
——萬里子さんからさう云つてよこしたのは、もう十二月も末近かつた。

僕はまへから雪の信濃路を見たがつてゐた學生のM君を誘つたり、一しよに往く筈だつた妻の都合が悪かつたりして、すこし出かけるのに手間どり、妻だけ二三日あとから來させることにして、漸つとその小さな冬の旅に出たのは、それから四五日たつてからのことだつた。……

ゆふがた着いたその山の村には、數日まへの雪はもう殆ど消え、林の中などにとろどろわづかに雪らしいものが残つてゐるきりだつた。そんな一つの林の奥に、K君たちが冬ごもりをしてゐる山小屋

がある。

「まあ、よくいらつしやいました」その小屋の中から飛びだしてきて僕たちを出むかへた萬里子さんは一とほり挨拶がすむと、さも困つたやうに大きい目をしてまじまじと僕の方を見ながら言つた。「——でも、もうすつかり雪がなくなつてしまつてゐて。なんだか……」

「いやあ、雪なんぞはどうでもいいですよ。」

僕はあわてて手をふりながら、それを遮つた。

「こなひだの雪は午前中ふつたきりでしたの。大ぶ積つたことは積りましたけれど、午後から日があたつて見る見るとけていつてしまふので、あんな手紙なんか出してしまつて、氣が氣ではありませんでしたわ。——でも、まだあそこいらには少しばかり残つてゐますの。」

もう薄暗くなり出してゐる林の奥のはうにまだいくらか残雪が何かの文様のやうにみえるのを、萬里子さんはすこし氣まり悪さうにして示した。

僕はもうそんなものはどうでもよかつたが、すつかり葉が落ちて林の中がどこまでも透いてみえたりするのを珍らしさうに見てゐるM君におつきあひして、その儘しばらく三人でそこに立つて見てゐた。そのうち小屋のかけからポブが飛び出してきた。

「ポブ、駄目よ。……」萬里子さんはその人なつこい犬が泥足でもつて僕のはうに飛びかからうとする

のを、すばやく捕まへた。

「よう。」K君が小屋の中から首だけ出して僕たちに聲をかけた。「何をしてゐるんだい。寒いだらう。」

「こなひだの雪をお見せしてゐますの。」萬里子さんはポブがもがくのを漸つとおさへつけながら言つた。

「雪なんぞはもうありあしないだらう。」寒がりのK君はうちの中でも頸巻をしたままで、小屋から出て來ようともせず僕たちを促した。「早くはひりたまへ。」

「さつきここの林のいりぐちで、クルツといつたかな、あの、變な女を見かけたが、なんだか夏とは見ちがへるやうな、凄い毛皮の外套を着て、眞紅なペレかなんぞかぶつて、氣どつた風に歩いてゐたが、こんな冬の村に一人きりで何をしてゐるんだらう？」僕は煖爐で體が温まると、突然その不思議な女のことを思ひながら言つた。

「では、けふまた見にきたのでせうか。これで三度目ですわ。」萬里子さんは急に目を大きくして、頸巻をしたまま煖爐の火を掻きまはしてゐたK君のはうを見た。

「なんだかよく來るね。」K君はやつと手を休めながらその話に加はつた。「このすこし向ふに、十一月ごろまでゐた獨逸人の一家がゐてね、それがクリスマス頃になつたらまた來るからと云つて、一時引き

上げていったのさ。——その人達がまだ来てゐないかどうかと、さうやつてもう二週間ぐらゐも前から、毎日のやうにその女が様子を見にくるのだよ。二三度、僕たちのところにも立ち寄つて、何か心配さうに様子をきくので、こつちでもその度に相手になつてやつてゐたが、問ひ合はせの手紙でも出したらどうかと云ふと、ただ首をふつてゐるきりなのだ。もうその家では來ないことが分かつてゐるのだ。それだのにこの頃は一日のうち二度も三度もやつて來るんだ。いつもあの毛皮の外套をきて、紅いペレをかぶつて。——さうしてその度に、僕たちの家の中をちいつと見てゆくんだ。それをまた萬里子が薄氣味わるがつてね。……」

「結局、一人でさびしくつてしやうがないんだな。こつちにある他の外人とは全然つきあはないのかい。」

「どうもその女だけ除けものにされてゐるらしい。村の人にきくとあの女はしやうがありませんと云つて、てんで相手にならないんだ。」

「そんなのかい。——僕はどういふ素性の女かよく知らないが、夏なんぞその女が奇妙ななりをして、買物袋をぶらさげながらなんだかしよぼしよぼして歩いてゐるのを見かけては、何者だらうとおもつてゐたんだがね。あれで、この夏聞いたことだが、戀人があるんださうだ。毎夏やつてくるハンガリーの音楽家でね、その男と町などで逢ふと、人中だらうと何だらうと構はずに立ち止まつて、黙つてその音

樂家の顔を穴のあくほどちつと見つめてゐるのださうだよ。それがもうかれこれ十年來の意中の人なのださうだ。」

「あの女にもそんな話がね。」K君はうなづいてゐた。

「どうもこんなところに来てゐる外人には突拍子もない奴があるものだな。——夏あんなに見すばらしいなりをしてゐた女が、冬になつて誰れもゐなくなると、急にすばらしい毛皮の外套なんぞを着込んで林の中をあるいてゐるやうなんで、想像もできないことだよ。だが、ああして一人つきりでもつて、よく暮らしてゐられるものだなあ」

「本當によく暮らしてゐるね。……」K君も考へ深さうに答へた。

「だが、人のことよりか、君も寒がりのくせに、こんなところでよく我慢してゐるね。——どうして暮らしてゐるだらうと、ときどき噂をしてゐたよ。」

「暮らさうとおもへば、どんなことをしても暮らせることが分かつたよ。それに寒さだつて、かういふものだと思つてしまへば、いくらでも我慢してゐられるね」

「でも、萬里子さん。」と僕は言葉を挿んだ。「あなたの方の爲事は大へんでせう？」

「そんなでもありませんわ、いまのところ何んにも困りませんの。」萬里子さんはそんな事はいかにも何んでもなささうな答へかたをした。

「そりあ困らないわけさ、一週間も同じものばかり食べさせられてゐても、僕はなんにも言はないんだもの。」K君はさうは言つても、すこしも不平さうではなかつた。むしろ、さういふ山のなかの簡素な暮らしを好んでゐるやうにさへ見えた。

夕食は、しかし山のなかでは思ひがけない御馳走だつた。ひさしぶりに四人で鳥鍋をかこみながら身も心も温かになつて、世はさまざまな話をするのは愉しかつた。

僕はこの秋から冬にかけてひとり旅して歩いた大和路のことを話した。それからその旅のをはりに、エル・グレコの繪を見てきたことなども話した。——その倉敷といふ小さな町まで五時間もかかつて往つて、やつとその美術館にたどりつき、畫廊にはひるなり、すぐエル・グレコの繪に近づいて見ると、それは思つたより小さなものだつたが、いかにも凄い繪で、一べんではねつけられ、しかたなく他のゴッホやロートレックなどを一とほり丁寧に見て歩いてから、一番最後に再びそれに近づいたら、こんどはやつと少し平靜な氣分でその繪に向へたことなど話しながら、エル・グレコなんぞの繪の自分たちにとつて、なまやさしいものでないことをしみじみと告白した。

「それもごく小さな「受胎告知圖」なんだがね。そこでは、この抒情的な畫題に對していただいてゐる僕たちの觀念がもの見事に粉碎せられてしまつてゐるのだ。天使は天使で、闇のなかから突然ざらざらと光を發する異常なものとして描かれてゐるし、その天使のはうを驚いて見あげてゐる處女の顔も何か

ただならぬやうに見える。すべてがいかにも悲劇的な感じなのだ。……こんどはこの一枚だけでもよく見てゆかうとおもつて、すむぶん一所懸命になつて見てきたつもりだが、どうしてもまだその繪が分かつたやうで分からない。さう、分らないといふより、なんだかこんな繪がこんなところに来てゐるのが不思議な氣がしてくるのだ。なんだかそれがあるべき場所にゐないやうな……それほど何か異様なのだ……」

「そのグレコの繪は僕も見たいね。」K君は何かちつと煖爐の上の空間を見入つてゐるらしかつた。「かうやつて火を焚いてゐると夜でもちつとも淋しくないでせう。」僕はふいと萬里子さんのはうを向いて言葉をかけた。いつのまに臺所からはひつて來たのか、萬里子さんの足もとにはポブが温かさうにうづくまりながら、僕たちの團欒のなかに加はつてゐた。「僕ははじめてここで冬を越すことになつたとき、夕方になるといつも淋しくつて淋しくつてどうしようかとおもふのだけれど、すつかり夜になつて火をどんだん焚きはじめると、もうちつとも淋しくなくなつたものでしたよ。」

「本當に。」萬里子さんは大きい目でしげしげと僕のはうを見かへしながら、深くうなづいた。それからまた煖爐を前にして、ひとしきりさまざまな話がはずんだ。……

その夜十時過ぎ、僕たちは宿に引き上げることにした。K君たちもそこまでちよつと送らうといつて頸巻をしたり、外套をきたりしだしてゐた。もういいからとことわつても、一しよに小屋を出た。ポブもあとからくつついてきた。夜の空氣は稀薄で、痛いやうに冷え切つてゐた。僕たちはあすは何處かも

つと山の方——菅平か、野邊山あたりまで出かけ、妻がこちらに来る頃にまた戻つてくることを約束して林のはづれで別れた。

僕たちはそれから沈黙がちに、枯木の下を抜け抜け、僕たちの靴に踏まれて凍つた土の割れる音を耳にしながら、歩いていった。するともう一つ、ときどき何處かから、それとはちがつた、硬い、金屬的な幽かな音が聞えて来た。

「あれは何んの音でせう？」M君がいぶかしさうに訊いた。

「ああ、あれかい。あれは、君、枯枝と枯枝とが風でぶつかる音だよ。——ほら、ああやつてちよつとぶつかるだけでも、ずぶん鋭い音を立てるだらう。空気がばりばりになつてゐるのだね。……」

さう言ひながら、一しよに頭上の梢をみあげてゐると、絶えずかすかに搖れてゐる枯枝の網を透いて、一めんの星空だつた。さうしてその星のひとつひとつが東京なんぞの空で見えるよりかすつと大きく見えた。

突然、右手の空家の庭の一隅で、がさがさと溜つた落葉がひつかきまはされるやうな音がきこえた。

何か白いものがそこいらをひとりりで駆けずりまはつてゐた。

「ポプ！」僕はそのほうへ聲をかけて見た。

すると、まるでその木魂のやうに、向ふの林の奥から「ポプ！」と呼ぶ聲がかすかにした。

「いまのは萬里子さんらしいね。静かだなあ。なんだか、かう、ひさしぶりで昔の冬に出逢つたやうな氣もちがしてならないよ。……」

「またこちらで冬をお越しになりませんか？」M君はさもそれが何んでもないことのやうに言つた。

「さういふこともときどきは考へてゐる。……」僕はたださう言つたぎりだつた。

僕たちはまた凍つた土を踏み割りながら、徐かに歩き出した。

翌日。僕たちは朝はやく小諸まで行き、そこから八つが嶽の裾野を斜に横切るガンリン・カアに乗り込んだ。もう冬休みになつてゐても、この山麓地方はあまりスポーツではないので、乗客は僕たちのほかはみんな土地の人たちらしかつた。

南佐久の村々の間をはじめの一時間は何かは何事もなく千曲川に沿つてゆくだけだが、そのうち川邊の風景が少しずつ變つてきて、白楊や樺の木など多くなり、石を置いた板屋根の民家などが目立ちだした。さうしてそれらの枯木だの、家だのの向うに、すつかり晴れ切つた冬空のなかに、眞白な八つが嶽の姿がくつきりと見えるやうになつて来た。

さうやつてまだ人家のおほい平原を横切りながら、ぐんぐんと雪のある山に近づいてゆく一種の云ひ

知れない快感を満喫しながら、僕は時々、物陰などにまだ残つてゐる雪の工合などへも目を配つてゐた。

「この分では、野邊山までいつても雪は大したことはなささうだせ。」

僕はそんなことを口ごもつたりした。

「さうですかしら。」M君はもう見當がつかないやうな様子をして、ただ窓の向うに白く赫いてゐる八つが嶽のはうを見つづけてゐた。

そのうち、だんだん谷間のやうなところにはひり出す。しばらくはもう山々ともお別れだ。さうして急に谷川らしくなりだした千曲川の流れのまん中に、いくつとなく大きな石がころがつてゐるのばかり目に立つてくる。そんな谷の奥の、海の口といふ最後の村を過ぎてからも、ガンリン・カアはなほも千曲川にどこまでも沿つてゆくやうに走りつづけてゐたが、急に大きなカアを描いて曲がりながら、楢林かなんぞのなかを抜けると、突然ばあつと明かるい、廣々とした高原に出た。さうしてまだ雪もかなり澤山残つてゐるその草原の向うの一帶の森のうへに、眞白な八つが嶽——そのうちでも立派な赤岳と横岳とが竝んで聳え立つてゐた。

「高原といふのは、かうやつてそこへ出た時の最初の瞬間がなんとも云へず印象的でいいな。」僕はさういふ目付をしてM君の方を見た。

やがて、野邊山驛に着いた。白い、小さな、瀟洒とした建物で——いや、もうそんなことはどうでも

いいことにしよう。——それよりか、僕はその小さな驛に下りかけて、横書きの「野邊山」といふ三字が目に飛びこんできた途端に、なにかおもしろはつとした。いままではさほどにも思つてゐなかつた。「野邊山」といふ土地の名がいかに美しい。まあ何んといふ素樸な呼びかたで、いい味があるのだから。さうして此處まで来て、その三文字をなにげなく口にすると、はじめてそのいい味の分かるやうな、それほどこの土地の一部になりきつてしまつてゐる純粹な名なんだとおもつた。……

その高原の驛に下りたのは僕たちのほかには、二人づれの獵師が一组あるきり。——その獵師たちは驛員と一しよになつて檻に入れられてきた獵犬をとり出しにかかつてゐた。

そこで僕たちは二人きりで驛のそとに出たが、其處はいちめんの泥濘だつた。驛の附近には、一棟の舎宅らしいもののほか、二軒ばかり休み茶屋みたいなものがあつたが、どちらも戸を閉ざしてゐた、——そんなところで一休みして、簡単に腹でもこしらへながら、それからどこをどう歩くか考へてみるつもりだつた。そこへいつてみれば、大體どうすればいいかがひとりでに分かつてくるだらう位に、僕はいつもの流儀で高を括つてゐた。

だが、すぐ目のさきに赤岳だの横岳だのがげざやかに見えてゐながら、この泥濘の道ではどうしやうもない。せつかくの野邊山が原もいい氣もちになつて歩きまはるわけにゆきさうもない。それに、もう午近い。なんとか腹をこしらへないことには。……

「あそこに何か爲事をしてゐる人たちが見えるな。あの人たちに訊いたら、すこしはこのへんの様子に分かるかもしれない。」

僕はM君にさう言ひ、ひどい泥濘の中にはひり込まないやうに、道のへりのはうを歩きながら、舊街道らしいものの傍らで、二人の法被はつぎすがたの男がせつせと爲事をしてゐる方へ近づいていった。

が、だんだんそつちへ近づいていつて見ると、その男たちが何か荒ら荒らしい手つきで皮を剥いてゐるのは兎であるのが分かつてきた。さうしてまだ生々しいやうな皮がいくつももう板に擴げて張りつけられてあるのが見え、皮を剥がされた肉の塊りが道ばたまでころがり出してゐた。

「こいつはかなはないや。一番の苦が手だ。もう一べん驛までひつかへして、訊いてみよう。」

僕はさつさとそつちへ背を向けて、もう泥濘の中だらうとんだらうと構はずに、その街道を突つ切りだした。そのときひよいと目を上げると、ちやうど鼻のさきに小さな道標が立つてゐる。それと右が板橋いたばし、左が三軒屋。兩方とも約二軒位。——さうさう、板橋といふ部落はなんだか聞いたことがある。たしか、そこにはわびしい旅籠屋なんぞもあつたはずだ。二軒ぐらゐなら、思ひ切つて往つてみようかと、M君と相談してゐると、——その板橋のはうへ通じてゐる、片方は林で、もう一方は草原になつた、眞直な街道を、何處からどう抜け出したのか、さつきちらりと驛で見かけた獵師が二人、大きな獵犬を先立てながら、さつさと歩いてゆくのが見える。

「往かう。」と僕は言つた。

「ええ。」M君もそれにすぐ應じた。

僕たちはその獵師たちのあとを追ふやうにしてその街道を歩き出した。どこもかもひどい泥濘だが、道のへりなどにはまだすこし雪が残つてゐる。そんな雪のうへを擇んで歩き歩き、ときどき片側の枯木林を透かしながら赤岳だの横岳だのをちかちかと目に入れたり、もう一方の、まだかなり雪が残つてゐるさうな、果てしなく廣い草原のはるかかなたを、甲武信こぶしの國境の薄白い山々が劃くわつてゐるのを眺めたりしてゐると、なかなか好いことは好い。日光もほどよく温かで、かうして歩いてゐるとすこし汗ばんでくる位。——だが、ものの十分とたたないうちに、僕たちの前方を歩いてゐた獵師たちは、急に林の中へでもはひつてしまつたのか、もう影も形も見えない。そのかはりに、いつのまにか、僕たちの背後には重さうな鞆を背負つた郵便配達夫がひとり姿をあらはし、黙々として泥濘のなかを歩きつづけながら、傍目もふらずに僕たちを追ひ越さうとしてゐるのだつた。——僕たちも何かそれにつりこまれたやうに、ふたりとも急に黙り合つて、ぼんやりと立ち止まつたまま、その郵便配達夫の通り過ぎるのを見送つてゐた。

僕たちはとうとう二人きりになつてしまふと、別にいそぐ旅でもないのに、雪のまだかなりありさうな草原のはうへちよいとはひつていつて見た。雪は、しかし、其處にもさうたんと残つてはゐない。た

だ遠くから見た目に何んとなくさう見えるだけのものらしい。が、そんな少しばかり雪の残つた草原のまんなか立つて見ると、あちこちに一本づつ離れ離れに立つてゐる樺の木なんぞが、その變に枝をねぢらせてゐる工合までも、何かなつかしく思はれてくる。

「かういふ高原の木は、どこか孤獨の相のやうなものを帯びてゐるね。」僕はふとM君にさう言つてみたが、それだけではまだなんだか言ひ足りないやうな氣がした。

それから僕たちはその儘、その草原の雪のうへを歩いてみてゐたが、なかなか道がはかどらない。そこで、またさつきの街道のはうへ出ることにした。

みると、こんどはその街道をやはり板橋のはうへ向かつて、一匹の牝山羊をつれた女が、かう、すこし首をうなだれるやうにして歩いてゆく。まだ若い女らしい。

冬の眞晝、ときどきまぶしく光つてゐる雪原、風のために枝のねぢれた樹木、それらのすべてを取り圍んでゐる雪の山々、——さういふ自然の中からひとりでに生れてきたやうなその羊飼ひの女。……

「まるでセガンティニの女みたいだね。」僕はおもはず小さく叫んだ。「あの首のうなだれ方までそつくりだな。」

「セガンティニは僕はあの倉敷くらしきの美術館にあるのしか知らないな。」

M君は僕の言葉をそのまま受け入れるにはすこし自信がなささうだ。

「そりあ知らないといへば、僕だつてなんにも知らないやうなものだがね、ただまあひよいとそんな聯想がうかんだんだ。」僕の方でもそんな云ひわけをした。「さういへば、あそこにもアルプスの繪かなんかあつたね。あれはどんな繪だつたかな？」

「たしか眞晝の牧場の繪で、アルプスが遠く見え、前のはうに羊飼ひの女の立つてゐるやうな構圖だつたとおもひますが。……」

「ああ、それで思ひ出した。なんだかかう妙にねぢくれた白樺の木にその女がもたれてゐるんだらう。……」僕はそこの美術館ではエル・グレコの繪しか見て來なかつたやうな氣がしてゐたが、セガンティニのやうな特異な繪はやはり注意して見てゐたものと見える。さつき草原に立つた木をなつかしさに見ながら、何かいまにも思ひ出せさうでまだ思ひ出せずにあるものが、その殆ど忘れかけてゐたセガンティニの繪に描かれた白樺の木とも何か關係のありさうなことをふいと感じた。だが、それはまだ僕のうちでもはつきりとしてゐない。……

僕たちはその牝山羊をつれた若い女に追ひつかうとして、いそいで泥濘の街道に出て、再び道ばたの雪を拾ひながら歩きはじめた。が、そんなことをして漸うやつと歩いてゐる僕たちは、泥濘のなかをも平氣で歩いてゆくその牝山羊をつれた女にもすんすん引き離されてしまつた。さうしていつのまにか、また僕たち二人きりにされてしまつた。

そんな調子でいくら歩いていても、野邊山が原は盡きさうもない。もうかれこれ一時間ぐらゐは歩いてゐるだらう。腹もへつてきてゐるし、もうおしやべりをする元氣もなく、二人とも泥だらけになつた靴をただ重さうに運んでゐるきりになつた。——さうして僕はもう口には出さずに、昔小さな本で讀んだことのあるセガンティニの美しい生涯などを考へつづけてゐた。セガンティニには、アルプスの高原の自然のなかに——いはば人間の住める自然のぎりぎりの限界のやうなところに人間を置いて描いてゐるやうな繪が多いが、その繪がどれもこれも妙に人なつこい。人間の世界から離れば離れるほど、そしてそこに描かれてあるアルプスの風景がいよいよきびしければきびしいほどセガンティニの繪のもつてゐる人なつこさはいよいよ切實になつてくる。——そこにセガンティニの繪の寫眞を見ただけでも、僕たちが何か心を動かされるものがありはすまいか。……さうだ、僕がさつき草原に立つた木をしみじみと見てゐるうちに、ふいと何か思ひ出せさうで思ひ出せずにはゐたもの、そのために知らず知らず心を一ぱいにさせてゐたもの、それはそんな木の或る恰好ばかりではなしに、かういふ高原のなかに生を得てゐるすべての小さな生きものもつてゐる深い味なのだ。それらのものは、ちよつと見ると、何か近づきたいやうな孤獨の相を帯びてみえるけれど、それらのものほど人なつこいものはないのだ。それほど切實に、存在の本質にあくがれてゐるものはないのだ。……

そんなことを考へつづけながら、僕はもう自分の泥だらけになつた靴の重たさもさほど苦にしなくなつてゐた。

つてゐた。

「あそこの藪のなかに馬が二三匹草を食べてゐますね。もう村が近づいてきたのではないでせうか。」

M君は自分の大きな身體をすこし持ち扱ひ出してゐるやうに見える。

「島もあるぢやないか。」僕はおもはず聲をはずませた。「もう村に着いたやうなものだ。」

いつか僕たちの歩いてゐる街道は草原から離れて、兩側が雑木林だの島だのに變つてきた。さうしてすこし坂道になり出した。さういふ地形の變化は、もうさすがの曠野も果てようとしてゐることを思はせた。それに元氣づき、だんだん急になるその坂道をあがつてゆくと、その突きあたりに一軒の藁屋根の家が見え出し、さうしてその家の前の、ちやうど山かげになつた道のほとりで、一人の瘦せた老人がそこだけまだ一面に残つてゐる雪をシャベルかなんかで掻きよせてゐた。

そこまで坂をあがり切つて、その手にしたシャベルに凭りかかつて一息ついてゐる老人に軽く會釋しながら、ふとそのそばを通り過ぎようとした途端、すぐ目のまへに、川を挟んだ小さな部落が見え、さうしてその中ほどには、古びた木橋が一つ、いかにも人なつこさうに、さうして「板橋」といふ名前をもつた村の目じるしのやうに懸かつてゐた。さうしていつか私達の眼界から遠ざかつてゐた八つが嶽が、又、ちやうどその橋の眞上に、白じろと赫いてゐた。

橋の上

その小屋のなかで待つてゐてくれと云はれるまま、しばらく五六人の馭者らしい人たちの間に割りこんで、手もちぶさたさうに爐の火にあたつてゐたが、みんなの吹かしてゐる煙草にむせて急に咳が出たので、僕は小屋のそとに出ていつて、これから自分のはひつてゆかうとする志賀山の案内圖をながめたり、小さな雪がちらちらとふつてゐるなかを何んとなく歩いてみたりしてゐた。雪の質は乾いてさらさらとしてゐるし、風もないので、零下何度だか知らないけれど、寒さはさうひどく感ぜられなかつた。そのうちに、向うの厩の中から、さいせんの若い馭者が馬の口をとりながら、一臺の雪橇を曳き出して來るのが見えた。僕は雪橇といふものをはじめて見た。——粗末な箱型をしたものに、幌とはほんのなまじかりの、繼ぎはぎだらけの鼠いろの布を被つただけのものである。馭者臺なんぞもない。それもそのはず、馭者は馬のさき立つて雪のなかを歩いてゆくのである。

その橋が自分の前に横づけになつたものの、どこから乗つていいのか分からないでまごまごしてゐると、馭者が飛んできて、幌をもちあげながら入口をあけてくれた。ふとそのなかに蔘蔘こぎの敷いてあるのが目にとまつたので、僕はいそいで靴をぬがうとすると、その儘あがれといふ。そこで僕はほんのまね

事のやうに外套を叩いたり、靴の雪を拂ひ落したりして、首をこごめるやうにして幌の中にはひつた。そのなかにはまあ二人で差し向ひに腰かけるのがやつと位だが、そこには座蒲團や毛布から、火鉢の用意までしてある。火鉢には火もどつさり入れてある。——寒いから、その火鉢に足をのせて、その上からその毛布をかけよと云つてくれる。さう云ふとほりに、僕がそこにあつた毛布をひろげて膝の上にかける出すのを見とどけると、馭者は幌をすつかり下ろして、馬のうへに飛んでいつた。

**

やがて雪橇はごとんと動き出した。あまり揺られ心ちのいいものではなかつた。それに幌には窓が一つもついてゐないので、全然おもての景色の見られないのが何よりの缺點だ。——このままかうしてごとんと揺られながら、毛布の中に小さくなつてゐたんでは、いくら寒さはしのげても、なんにも見えず、わざわざ雪のなかまでやつてきたかひがない。そこで幌を少しもち上げてみたが、その位のことでは、道ばたに積みあげられた雪のほかは何んにも見えない。……

が、さつきから首すちがすこし寒いはおもつてゐたが、そのところだけ幌の布がなんだか縮んだやうになつてゐて、ひらひらしてゐるのにはじめて気がついた。ためしにそれをちよつと手でもち上げて見ると、小さな窓のやうな工合になる。僕はこれはいいとおもつて、そこに目を近づけると、ちやう

ど村の一番最後の家らしい、なかば雪に埋もれた一軒の茶店のやうなものが通り過ぎた。ちよつとの間だつたのに、もうさうたう雪が深さうだ。

そのうちにあちこちの森だの山だのが見えて来る。細かい雪がいちめんじふりにふりしきつてゐるので、それもほんの近いものだけしか見えなかつたが。……それでも、僕は自分が生れて初めて見るやうな雪の山のなかにはひり出してゐることを感じだしてゐた。だが、さうやつて外ばかり眺めてゐると、そこから細かい雪がたえず舞ひこんでくるとみえ、膝のうへの毛布がうつすら白くなつてゐる。僕はその毛布を軽くはたきながら、すこし坐りなほして、しばらく目を休めることにした。なんにも見えなくとも、自分の身體のかしきかたで、上りが急になつたり、また、すこし樂になつたりしてゆく工合がよく分かる。なんだか自分の不安定の感じが或る度を過してくると、櫓のはうもいつか止まつてしまつてゐる。馬が息をつくためにしばらく休むのである。雪の中にぼつんぼつんと立つてゐる樹木なんぞを見ても、四方から雪を吹きつけられてゐるので、どのくらゐ雪が深いのだからちよつと見當がつかない。櫓道はちやんとついてゐるらしいが、すつと上りづめらしく、馬も、馭者も、すゐぶん骨を折つてゐるのだらうと思つた。

又、櫓がとまつた。こんどはだいぶ長くとまつてゐるな、と思つてゐると、雪の中から急におもひがけない話しごゑが聞えだした。どうやら向うから下りてくる雪櫓があつて、道をゆづりあつてゐるらし

い。「まだあとからも来るか」と向うの馭者が問ふと、「いや、もうこれが最後だ」とこちらの馭者が答へてゐる。……そのうち僕の櫓が動きだして向うの櫓とすれちがはうとすると、突然、向うの馭者が何かはげしく自分の馬を叱したので、ひよいと例の穴からのぞいて見ると、道を避けようとして片がはの積雪のなかへ深くはひり込んでしまつた櫓を曳き出さうとして、一しやう懸命になつてゐる馬は、ほとんど胸のあたりまで雪に埋つてゐた。なんども前脚を雪のなかから引き抜かうとしては、そこらぢゆうに雪煙りをちらしてゐた。僕もそのとばつちりを受けさうになつて、いそいで顔をひつこめたが、向うの櫓はすつぱりと帆を下ろしてはゐるものの、空のやうだつた。

續いて、もう一臺の櫓とすれちがつた。こんどはどうやらうまくすれちがつたやうだつたが、それも空らしかつた。

さうやつて二臺の櫓とすれちがつて、しばらくしてから僕はふいと時計を出してみると、櫓に乗つてから一時間ばかりも経つてゐるので、ああ、もうこんなに乗つてゐたのかと意外におもひながら、一體、いまどのへんなのだらうと、又、例の穴に顔を近づけてみると、ちやうど自分の櫓の通つてゐる岨の、すつと下のはうの谷のやうなところを二臺の櫓がすんすん下りてゆくのが、それだけが唯一の動きつつあるものとして、いかにもなつかしげに見やられた。それにしても、あれがいましたが自分とすれちがつた櫓かとおもはれる位、そんなにもう下のはうまで往つてゐるのには驚いた。さうしてそれと共に、

僕ははじめて自分のいつのまにかはひり出してゐる山の深さに気がついてきた。それほど自分のそれまでの視野のうちには、いつまで経つても、同じやうな白い山、同じやうな白い谷、同じやうな恰好をした白い木立しかはひつて来ないでゐたのだつた。

僕はそれから櫛のなかに再び坐りなほして、がたんがたん揺られるがままになりながら、いよいよ自分も久戀の雪の山に来てゐるのだなとおもつた。すぬぶん昔から、いまのやうに、かうしてただ雪の山のなかにゐること、——それだけをどんなに自分は欲して来たことだらう。べつに雪の眞只中であつたやうといふのでもない。——スボルティフになれない弱蟲の僕は、ただかういふ雪の中になつとして、眞白な山だの（——さう、山もそんなに大それたものでなくとも、丁度いま自分の前にあるやうな小品風なものでいい……）、眞白な谷だの（——谷もあの谷で結構……）、雪をかぶつたいくつかの木立のむれ（——あそこに立つてゐる櫛のやうな木などはなかなか好いではないか……）などをぼんやり眺めてさへゐればよかつた。

ただすこし慾をいへば、ほんの眞似だけでもいい、——眞白な空虚にちかひ、このやうな雪のなかをかうして進んでゐるうちに、ふいと馭者も馬も道に迷つて、しばらく何處をどう通つてゐるのだから分らない、淡々とした氣もちであつた。……

僕は目をつぶつて、幌の穴から見ようとすれば見えたでもあらう、そのやうな雪の世界をただ想像裡に描きつづけながら、かういふ自分の雪に對するそれほど烈しくもない、といつて一時の氣まぐれでもない、長いあひだの思慕のやうなものが、いつ、どうして自分のなかに生じて来たのだらうかと考へ出してゐると、突然、十年ほどまへ八つが嶽の麓にあるサナトリウムで生を養つてゐた自分のすがたが鮮かによみ返つてきた。冬になると、山麓のサナトリウムのあたりは毎日ただ生氣なく曇つてゐるだけなのに、山々はいつも雪雲で被はれてをり、そんな雪のないときには、それらの山々は見事なほど眞白なすがたをしてゐた。僕はそんな冬の日をどうしやうもなしに暮らしながら、ときどき雪の山のはうへ切ない目ざしを向けるやうになり出してゐた。そんな雪雲にすつかり被はれてゐる山のものなかを、なにか悲壯な人間の内部でも見たいやうに、おそろおそろ見たがりながら。……

僕は、いま、その頃の自分にはとても實現せられさうもないやうに見えてゐた、こんな雪の中にはひり込んで來てゐるのだと思ひながら、さて、べつにどうといふ感慨もなかつた。悲壯のやうなものはいささかも感ぜられなかつた。寒さだつて大したことはない。むしろ、雪のなかは濫かで、なんのもの音

もなく、非常に平和だ。さう、嬉しいといったほうがいい位だ。櫛の中にあつて、小さな幌の穴から、空を見あげてみると、無数の細かい雪がしつきりなしに、いかにも愉しげな急速度でもつて落ちてくる。さうやつてなんの音も立てずに空から落ちてくる小さな雪をちいつと見入つてみると、その愉しげな雪の速さはいよいよ調子づいてくるやうで、しまひにはどこか空の奥のはうでもつて、何かごおつといふ微妙な音といつしよになつてそれが絶えず涌いてゐるやうな幻覺さへおこつてくるやうだ。

大きな壺に耳をあててみると、その壺の底のはうからごおつといつて無数の音響が絶えまなしに涌きあがつてゐる。——ちやうどあいつた工合に何か愉しくて愉しくてならないやうに、無数の小さな雪が空の奥のはうで微かにごおつといふ音を立てながら絶えず涌いてゐるやうな氣がせられるのである。僕はいつまでも一ところからちつと、絶えず落ちてくる雪を見てゐる中に、そんな幻覺的な氣もちにさへなり出してゐたが、急にまた坂にさしかかつたと見えて櫛ががたんがたん揺れだしたので、思はず自分自身に立ち返へされてしまつてゐた。

……雪のごとく愉しかれ。

大いなる壺のやすらかに閉ざされし内部に在りて、

すべての歌聲の、よろこばしきアルペジオとなりて、

絶えず涌きあがるがごとくにあれ。

さうしてさういふノワイエ夫人の詩の一節だけが、いつまでも自分の口の裡に、なにか永遠の一片のやうに残つてゐた。……

昭和十八年二月

四

雉子日記

—
去年の暮にすこし本なんぞを買込みに二三日上京したが、すぐ元日にこちらに引つ返して来た。汽車がひどく混んで、私はスキイの連中や、犬なんぞと一しよに貨物車に乗せられてきたが、嫌ひなステイムの通つてゐないだけでも、少し寒くはあつたが、この方がよつほど氣持が好いと思つた。

すつかり雪に埋もれた輕井澤に着いた時分には、もう日もとつぷりと暮れて、山寄りの町の方には灯かげも乏しく、いかにも寥^{さび}しい。そんななかに、すつと東側の山ぶところに、一軒だけ、あかりのきらきらしてゐる建物が見える。あいつだな、と思はず私は獨り合點をして、それをなつかしさうに眺めやつた。

ハウス・ゾンネンシャインと云ふ、いかめしい名の、獨逸人の經營してゐるパンションが、近頃釜の澤の方に出来て、そこは冬でも開いてゐると云ふことを、夏のうちから耳にしてゐたが、私がそれを見たのはついこの間のこと、——クリスマスを前に、二三日續いて、ひどい大雪があつた。さう、このへ

んでも五〇程位は積つた。そんな大雪がからりと晴れあがるや否や、鬱陶しく閉ぢこめられてゐた追分の宿から、私はたまらなくなつて飛び出して、膝まで入つてしまふやうな雪の中を、停車場まで歩いて、それから汽車に乗つて、軽井澤に來たが、ここでも輕便を待つのがもどかしく、勝手知つた道なので、近道をしようとして野原を突切つたのはいいが、茅なんかの埋まつてゐるところは體が半分位雪の中に入りさうになつたり、いきなり道傍から雉子が飛び立つたりして、何度も立往生せざるを得なかつた。やつと別荘のちらほらとある釜の澤の方に出たら、道もよくなり、いきましたが通つたらしい自動車の轍さへ生ま生ましくついてゐる。どこかの別荘に來た奴のだと思ひながら、その轍を辿つていつた、やがて山にかかると、それが消え失せ、その代りに男女の足跡らしいのが入り亂れてついてゐるので、更にそれを追つて行くと、釘づけになつた數軒の別荘の間から、私の前に突然、緑と赤とに塗られた雜型のやうに美しい三階建のシャレエが見え出した。南おもては一面の硝子張りだが、それををりからの日光を一ぱいに浴びながら内部の暖氣のためにぼうつと曇り、その中から青々とした棕櫚の鉢植をさへ覗かせてゐる。——近づいて標札を見ると、「Haus Sonnenschein」とある。ふん、こいつだなと思つて、私はその家の前を何度も振り返りながら、素通りして、裏の山へ抜けようとしかけたが、頭上の大きな縦の木からときをりどつと音を立てて雪が崩れ落ちてくるのに目が開けられないほどなので、又、引つ返してきた。その時ふいに、クリスマスに來たいと言つてきた阿比留信にこんなところに泊らせて

やつたら愉快がるだらうと氣まぐれに思ひ立つて、そのままづかづかと裏木戸から這入つて、臺所を覗いて見ると、ストオヴの側で白いエブロンをかけた日本人の若い娘が卓の上に水仙の花を惜しげもなく一ぱい散らかして、いくつかの花瓶にそれを活かしてゐたが、私の意を傳へると、きのふ主人夫婦も横濱から來たばかりで、何でも、もうクリスマスには大せいな客があるやうに申して居りましたけれども、……まあ、中へおはひりになつてお待ち下さい、と人懐こさうに私の方をまじまじと見ながら、さう言ひ置いて、奥へ引つ込んでいつた。私はもうそんなことはどうだつていいんだと云つたやうな、ぼうつとするやうな氣持で、好い匂ひのするストオヴに頬を赤くしながら、眞白いエナメル塗りの臺所の一隅に片寄せられてゐる、男と女の長靴から、さかんに湯氣が立ちのぼつてゐるのを見入つてゐた。……

二

いま、私の暮らしてゐる追分ときた日には、村中で商ひをしてゐるのは、村はづれの居酒屋みたいなのと、煙草や駄菓子なんか賣つてゐるのと、たつた二軒。——正月こつちへ來てから、無精を極め込んで、一度も髭をあたらずにゐたが、或日、ふらりと軽井澤まで汽車に乗つて理髪店に行つた。軽井澤の町だつて、いまは大抵の店は何處かへ店ごとそつくり荷送されでもしさうな工合に、すつかり四方から荷箱同様の板を釘づけにされてゐる。唯二三軒、うす汚い雜貨店みたいのが、いまでも店を開いてゐる

が、そんな店先にもクレエツンやベル・メルベル・メルの罐が店ざらしになつてゐるのは、さすがに輕井澤らしい。郵便局の横町にある理髪店に飛び込んで髻をあたつて貰ふ。南を向いた店先には一ぱい日がさし込んでゐる上に、ストオヅを自棄に焚いてゐるので、苦しいくらい熱い。この店は夏場は五つか六つ鏡が並べてあつた筈だが、いまはたつた二個、——さうして他の鏡のあつた場所は、何處かの別荘の廢物らしい、パネの弛んでゐさうなベッドが占領してゐる。ここでこの親方は、客の來ない時は晝寝でもしてゐるのだらう。——私の向つてゐる凸凹のある鏡には、筋向ふの、やつぱり釘づけにされた、そして横文字の看板だけをその上にさらし出してゐる、肉屋と、支那人の洋服屋が映つてゐる。おや、何だか見覚えのある奴が通るぞ。なあんだ、テニス・コートの番人か。やあ、こんどは自動車を通る。毛唐の奴らが鯨づめになつてゐやあがる。ふふん、さてはハウス・ゾンネンシャインの連中だな、鏡の中に映らないが、自動車が何か引きすつてゆく音がする、何だい？ と訊いたら、權ですよ、と親方は無造作に答へる。それからいそいで理髪店を飛び出すと、きつとゴルフ場へも行つて權で遊ぶのだらうと思つて、そつちへ行つて見ようと、まだ雪の大ぶ残つてゐる町の裏側の「水車の道」へはひつて聖パウロ・カトリック教會の前まで行きかけたけれど、道は悪し、なんだか面倒くさくなつて、その筋向うの裏口からホテルに飛び込んで、お茶を飲まして貰ふ。勿論、客なんか一人もゐない。そこで輕便の出るまで、ホテルの娘と無駄口をさきながら、ストオヅに噛じりついてゐた。

追分の宿に歸つたら、思ひがけず田部重治さんが來てゐられた。越後の湯澤とかへ兼常さんやなんかとスキーに行かれたお歸りだとか。皆と高崎で別れて、お一人だけわざわざこちらに寄られた由。——茶の間の大火燧の上で、烏鍋をつつきながら、誠にやん宿の主人も加はつてよもやまの話。——田部さんは本當に追分がお好きらしい。ことにこんな風一杯聞こし召されようものなら、誰に向つても、追分のいいことを繰返し繰返し語られる。僕なんぞはもういい加減耳に胼胝が出來てもよささうな筈だが、一向聞き倦きもせず、にこにこしながら合槌を打つてゐるのだから、これも不思議だ。

たかが淺間山の麓で、いくぶん徳川時代の古驛の俵をそのまま止めてゐるといふよりはかに何んの變哲もない、こんな寥しい村が、一體何んでそんなにいいのだらう？ と他の人が聞いてゐたら、思ふかも知れない。

この間、辻村伊助の「スウイス日記」を讀んでおたら、リルケがその晩年を送りながら「ドウイノ悲歌」を書いたシャトオ・ド・ミュゾットのある、ロオヌ河のほとりの、シエルといふ村なんぞは、汽車で素通りしてゐる。ああいふ旅行者にとつては、取るに足りないやうな寒村が、かへつて詩人にとつては仕事をよく實らせて呉れるのかも知れないのである。

淺間山だけがすつかり雪雲に掩はれ、その奥で一人で荒れてゐるらしく、この山麓の村なんぞには、日が明るく射しながら、ちらちらと絶えず雪の舞つてゐるやうなことがある。そんな時なんぞ、どうかして不意にその雲の端が村の上にかかる、南に連つた山々のあたりにはくつきりと青空が見えながら、村全體が翳つて、ひとしきり吹雪く。と思ふと、すぐ又、ばあど日があたつてくる。ここでは、そんなやうな空合ひの日がかなり多い。

田部さんがリュックを背負つて歸つて行かれた七日の夕方、そんな雪催ひだつた。途中の落葉松林のはづれまでお見送りして、其處から一人で歸つてきながら、私はこの村にかうして一人で氣儘に居られるのを幸福に思はなければならぬのかな、と考へたが、それにはいささか、半信半疑だつた。

それから二三日立つてから、去年の夏この村で知合になつた英夫君が、正月になつたら送つてくれと云つて頼んで置いた空氣銃を東京からわざわざ持つて来てくれた。

翌日、一日ちゆう二人で空氣銃をもつて森の中を駆歩いた。森の中はまだ雪が相當深い。これは狐の、これは兎の、それからこれは雉子か山鳥かどつちかだ、と雪の上に印せられてゐる色んな足跡を、この間教へられたばかりのおぼつかなく思ひ出しながら、そんなことを言ひ合つてゐる間にいきなり私達の行手から飛び立つ鳥どもの羽音に、空氣銃を手にしてゐることなんぞちよつと思ひ出せない位に、びつくりしたりしてゐる、即製の獵人たちの間抜けさ加減！一日ちゆうの獲物といつたら、たつた頬白が

一羽。……

その翌日、英夫君は二時の汽車で歸るといふので、晝飯を早目にすませてから、お別れに村の西のはづれの、分去の^{わかまへ}ところまでぶらつと散歩に行つた。馬頭觀音やなんかはまだ雪の中にしよんぼりとしてゐる。二人でその傍に佇んで、しばらく淺間山の方を眺めてゐると不意に思ひがけなく私達の頭上を、一羽の青味を帯びた大きな鳥が翼を水平に擴げたまんま、すうと低目に飛び過ぎた。やあ、雉子だ、雉子だ、と私達が言ひ合ふ暇もないうちに、街道の向うの小さな松林の中に、突然よろめくやうになつて、その雉子は下りて行つた。いそいで私達もその林の中へ躍り込んで見ると、もう飛ぶ力のなくなつてゐるらしいその雉子は、難なく英夫君の手で生捕りにされた。

何處も怪我はしてゐないやうだが、大方鐵砲打ちに翼でもやられて、やつとここまで山の中から逃げ來たのかも知れない。雄だから、綺麗な尻尾をしてゐた。空氣銃でも持つてきてゐたら、それで射とめたのだと宿に持ち歸つて威張れようが、あいにく手ぶらなので、へんな恰好で、そのままそれをぶらさげて歸つた。

英夫君に東京へお土産にしたまへと勧めたが、歸るのはもう一日延ばして、こつちでそれを皆と一緒

に食べて行きたいと云つて聞かなかつた。雉子はまだ辛うじて生きてゐる。それを不自然な殺し方はしたくないので、宿の老犬ジャックを連れ

て、裏の林へ行つて、その雉子を放したら、昔獵犬だつたジャックはその逃げようとする雉子を巧に追ひ廻しながら、要領よく噛み殺し、羽だらけになつた口に銜へたまま、それを私達のところへ持つて来てくれた。

雉子は悪食だから、肉が臭いと聞いてゐたが、鍋にしてもそれほどいやな臭ひはしなかつた。が、なんだかすこし無氣味で、あんまりうまいとも思はなかつた。

昭和十二年一月十七日

續雉子日記

英夫君が歸京してから、こんどは私は一人で毎日のやうに空氣銃を手にして、ジャックを連れては、殆ど二三日おきぐらゐに降るのでますます雪の深くなつた森の中を愉快さうに歩きまはつてゐたが、少しその度が過ぎたと見え、とうとう十日ほど前から風邪を引いて、いくぢなく寢込んでゐるていたら、枕もとにはお義理のやうに横文字の本を堆高く積んであるが、見てゐるのは大抵例の「スワイズ日記」か、ペデカアのスイス案内書位なものである。

この前の日記に、私はリルケが晩年住まつてゐたシャトオ・ド・ミュゾオのある村をラロンと書いて済ましてゐたが、實はラロンはリルケの墓のある村の名で、同じヴァレ州の同じロオヌの川沿ひながら、ミュゾオのあるのはそれより少し下流に位してゐる、シエルといふ小さな町から更に上方へ入つた、葡萄畑なんぞの眞ん中らしい。そしてそのミュゾオもシャトオとはほんの名ばかり、むしろ十三世紀頃に出来た小さな塔のやうなものであるらしい。

一九二一年の秋のことである。それまでスイス中を轉々としながら、長い間中絶されてゐる「ドウイノ悲歌」を再び續けるべく、そのために外界と遮絶して、全く一人きりになつてゐられるやうな隠れ

場所を捜しあぐねてゐたリルケは、遂に伊太利との國境にもはや近いヴァレ州にやつて来て、その何處かプロヴァンスや、また西班牙の或物をさへ思はせるやうな一帶の風物を一目見るや、此處こそ自分の求めてゐる場所と信じて、その町の一つのシェルに暫く滞在し、附近を捜しまはつたがそれも空しく、とうとうその町をも立ち去らうとする間際になつて、偶然或る飾窓に賣物に出てゐる一つの塔の寫眞を認めた。それは彼の或る友人の寢臺の上の壁に以前から掛つてゐた繪の中の古い館だつた。そしてそれがミュゾオだつたのである。それを彼はその同じ友人の世話によつて漸く手に入れることが出来た。

**

「恐ろしい山々の荒蕪たる風物の中に全く孤立せる小さな館。……私はこれまでかかる孤獨な存在、かかる沈黙との極度の親密を想像だに出来なかつた。親愛なるリルケよ、あなたは純粹時間の中に閉ぢ籠つてゐるやうに私に思へた……」と、その頃其處を訪れたボオル・ヴァレリイは書いてゐる。

翌年の二月である。十年前の、一九一二年ドゥイノにて着手せられ、一九一四年以來殆ど全く中絶してゐた「ドゥイノ悲歌」は遂にそのシャトオ・ド・ミュゾオにおいて完成せられた。しかもそれは僅か二三日で出来上つたのである。

それを書き上げた夜半、リルケはもうペンを握る力もない位に疲労しながら、眠る前にその出版者キ

ツペンベルクにその完成を知らせてやつた手紙には甚だ人の心を打つものがあるが、その一節に曰く、
「……私は冷い月光の中に出て行きました。そして小さなミュゾオを大きな獸のやうに愛撫してやりました……かかるものを私に授けてくれた、その古い壁を。それからまたあの破壊されたドゥイノをも。」
(ドゥイノは大戦中に伊太利軍のために破壊された。)

それから數日と立たない裡に引續いて又、その支流とも云ふべき小さな作品が殆ど求めずして出来た。「オルフォイスに捧ぐるソネット」と呼ばれる五十餘篇のソネットがそれである。

それまでもとかく健康のすぐれなかつたリルケは、その仕事の過勞のためにいよいよ健康を損ねてゆき、その後殆どそのミュゾオに居ついたまま、僅な詩作と、二三の翻譯をしたくらゐで、遂に一九二六年十二月の末に死んで行つた。死んだのは、しかし、その愛するミュゾオではなく、發病後強ひて移されたレマン湖畔のモントルウの療養所である。

病名は壞血症といふものだが、その病氣の直接の原因になつたと云はれる、いかにもリルケの最後らしい、美しい挿話を、私はつい最近讀んだ。

**

ある日、リルケはミュゾオを訪れることを豫め約束してあつた一人の婦人を待つてゐた。その婦人は

約束の時間よりもやや遅れてやつて来たが、それを待つてゐる間、リルケはその客に與へようとして、庭に出て薔薇を摘んだ。(ミュゾオの庭には、詩人が自分の手で百株ばかりの薔薇を植ゑてゐたのである。)その時その薔薇の棘が彼の手を傷つけた。そしてその何でもなかつたやうな小さな傷が次第に悪化して行つて、遂に壞血症の原因になつたと云ふのである。「つねに女性の偉大さと薔薇の美しさを説いてゐた詩人はかくして一女性のために摘んだ薔薇の一つに刺されて死んで行つたのである。その最後がいかに痛ましくあつたとは云へ、それはリルケがかれ独自の死を死すべく選んだものであつた」とその話の筆者は云ふ。

そのミュゾオの館の庭には、いまでも詩人の手植の薔薇が咲いてゐるさうである。私が他日スウイスにも行けるやうな身の上になれたら、何よりも先きに、そのミュゾオの館と、それから詩人の墓のあるラロンの村とを訪れることだらう。

が、それはいつのことやら……。私はそれよりか今は、本はとづくに買ひ込んで置きながら、まだ手をつけてゐない、そしてリルケ自身も「長い、時としては骨の折れる讀書」と云ふその「ドウイノ悲歌」を何とかして克服せんことをこそ思ふべきであらう。

昭和十二年二月十一日

ノオト

「雉子日記」のなかで、私は屢々ミュゾオの館ぐふたのことを持ち出したが、それについて富士川英郎君から非常に興味のあるお手紙を頂戴した。「ミュゾオの館」といふのは、御承知のやうにリルケがその晩年を過ごした瑞西のザアレ州にある古い、chateauのことである。その見もしない chateau のことなんぞを私はいろいろと知つたか振りをして書いて見たのであるが、富士川君の注意によつて、二三此處に訂正して置きたいと思ふのである。

先づ、その chateau du Muzot の読み方である。私はそれを普通にシャトオ・ド・ミュゾオと發音してゐた。ところが富士川君の注意によると、リルケ自らが一九二一年七月二十五日にマリイ・フォン・トゥルン・ウント・タクジス・ホオエンロオエ夫人に宛てた手紙のなかにそれを Muzotte と發音してくれと書いてあるのださうである。恐らくそれがその地方特有の呼び方なのであらう。勿論、Muzotte は富士川君も言はれるやうに佛蘭西式にミュゾットと發音するのだらう。従つて私の用ひてゐた「ミュゾオの館」は「ミュゾットの館」と訂正されなければならない。

以上はその館ぐふたのほんの名稱のことだが、富士川君はその名稱のことから更に、その前述の手紙の中で

リルケがいろいろとその館の構造や由来について詳しく語つてゐる由、まだその手紙を見てゐない私に懇切に書いてきてくれたのである。——それによつて私はもう一つ訂正して置いた方がいと思ふ箇處を發見したが、私はその詩人の愛してゐた古い館をただ漠然と十三世紀頃のものと書いてゐたが、その頃から残つてゐるのはその建物の根幹だけで、それから何度も建て直され、現存してゐる天井や家具の多くは十七世紀頃のものらしい。それからリルケがその館のさまざまな歴史を書いてゐるうちに、こんな話があるさうである。

十六世紀の初め頃に、その館に *Isabelle de Chevron* といふ娘が住まつてゐた。その娘は *Jean de Montheys* といふ男と結婚したが、それから一年立つか立たぬうちに、マリニャン戦が起り、その夫はそれに果敢なく戦死してしまつた。若い寡婦になつたイザベルは再びミュヅットの館に引き取られた。やがてそのうちに彼女の前に二人の求婚者が現はれた。そしてその二人は決闘して、お互に刺し合つて二人とも死んでしまつた。その夫の戦死には耐へることの出来たイザベルも、それには耐へ得ずして遂に發狂してしまつたのであつた。そして夜毎にミイェジュにある二人の求婚者の墓まで、薄い衣をまとつたまま彼女はさまよつて行くのだつた。そして或冬の夜、彼女はその墓場に息絶えてゐた……

リルケは死ぬとき遺言して、そのイザベル・ド・シュヅロンの眠りを妨げてはいけなから、ミュヅットの近くのその墓地には自分を葬らないやうにして貰ひたいと言つたといはれる。……リルケの墓の

あるラロンが、もう殆どシンブロンにも近い位、ずつとロオヌの谷を遡つたところにあることは、私の前にも書いたとおりである。その墓の寫眞が、去年の「インゼルシッフ」のクリスマス號に載つてゐたさうだが、それもまだ私は見る機會を得てゐないのである。

昭和十二年三月二十五日

春日遅々

一三八

四月十七日 追分にて

ホフマンスタアルの「文集」を読み続ける。嘗つてビアンキイ女史がこの詩人のことをリルケと並びて論じてゐた本を讀んだ折、既に物故したこの詩人のバセテイツクな、眞の姿を知つて、それ以來何となく心を惹かれてゐたが、最近その文集の佛譯を手に入れることが出来て、數日前から讀み續けてゐるのである。

これまで讀了した數篇——シエクスピアを論じて劇の本質は性格描寫や筋などには無く、その雰圍氣にあるといふ説を立てたもの、或はゲエテの「タツソオ」に就いて語つて從來閑却されがちであつた公女レオノオレの重要性を指摘したものの、或は又、シエテファン・ゲオルゲの詩を取り上げて詩の本質を明らかにしつつ、十數年後の純粹詩の發生をいち早くも豫見してゐたやうな「詩に就いての對話」——などで見ても、ホフマンスタアルが過去の大詩人の崇高な作品を自分の裡に見事に生かし得てゐたばかりでなく、將來に於ける詩の動きにも敏感な見透しをもつてゐたことは、まことに敬服の外はない。

けふ讀んだのは「Lord Chandosの手紙」といふ一篇である。

この西暦一六〇三年八月二十二日の日付のある古い手紙は、フィリップ・ロオド・チャンドスと云ふ英吉利の文人がその友人フランス・ベエコンに宛てて、一切の文學的活動を放棄する辯疏のために書いた手紙である由が註せられてゐる。それはしかし、言ふまでもなくホフマンスタアルの假託であらう。

ともあれ、そのロオド・チャンドスと云ふのは、英吉利文藝復興期に多く見出されるごとく博學多才の人である。彼は年少の頃から牧歌的な詩を作つたり、祖父の残した記録を元にしてヘンリー八世年代記を書かうと計畫したり、又、各國各時代から資料を集めて箴言集のやうなものを編むことを夢みたりしてゐた。が、突然、彼はさういふ一切の仕事を放棄した。そしてそのまま長い沈黙に這入つた。

その長い沈黙を憂へて手紙を寄せた昔の友人のベエコンに對して、その沈黙の辯明を試みたのが即ちこの手紙であるが、以下それを少し抄して置かう。

「簡単に云ふと、自分の場合は次のやうなのです。自分は或る對象を、思考とか言語などをもつて、順序立てて取扱ふことが全然出来なくなつてしまつたのです。先づ、自分は普通に人が使つてゐるやうな言葉でもつて、高尚なことも尋常なことも話すことが出来なくなりました。「精神」とか「魂」とか「肉體」とか云ふやうな言葉を口にするのが云ひ知れず不快に感せられるのです。……何にせよ、批判を明らるみに出すためには使用しなければならぬ抽象的な語は、悉く自分の口の中で、腐つた菌のやうになつてしまふのでした。一度なんぞはかういふことがあつた。四つになる娘のカザリン・ボム

ピリアが子供らしい嘘をついたのを叱責して、いつも正直でなくてはいけなさと云つて聽かせてゐるうちに、自分の口に簇がつてゐた考へが、突然、ざらざらした色を帯び出し、それが次から次へと移つて行つたので、自分は慌ててその叱言を打ち切らなければなりません。恰も生理的な不快に襲はれでもしたかのやうに、實際、自分の顔はいたく青ざめ、そして額の上をばげしく壓しつけられてゐるやうな氣がしました。自分は娘をひとり残したまま、いそいで背後のドアを締めました。そして馬に乗つて、人氣のない牧場をひと時疾駆したおかげで、漸く自分は落着くことができました。」

そんな風にして、ロオド・チャンドスは、今日ならば一種の神経衰弱とも呼ばれさうな、無爲の、苦しい状態に達する。かくして彼は一切の精神生活、一切の思索を断念しなければならなくなる。しかしながら、さういふ殆ど植物に近いやうな存在の裡にも、彼は一種異様な幸福を見出しはじめるのである。

「かういふ存在は、自分の隣人や、自分の親戚や、この國に土地を所有してゐる貴族の大部分のそれは殆ど區別できません。それは幸福な、生き生きとした瞬間を全然もたないわけではないのです。そんな瞬間がどういふものであるかを、貴兄に理解せしめるのは容易ではありません。ここでもまた、言葉が自分には不足するのです。それは名前を持たぬもの、また疑もなくそれを持ち得ないもの、そしてただ花瓶の中のやうに、自分のまはりの目に見える事物の中に、溢れるばかりに生を注ぎ入れながら、

そのときちらりと姿を見せるきりのものだからです。例を引いて見なければ貴兄に納得していただけないかと思ふので、つまらない例ですが二三擧げさせて貰ひます。例へば、如露だとか、畑に棄てられた鋤だとか、日向に寝てゐる犬だとか、みすばらしい墓地だとか、不具者だとか、小さな農家だとか、自分の靈感の場になれるのです。習慣になつてもうその上を何氣なしに目が滑つてしまふやうな、それらの事物やそのほかそれに似た数々の事物が、突然、思ひもよらないやうな瞬間に、それを表現するためには、一切の言葉があまりにも貧弱に見えるほどの、莊嚴な、感動すべき跡形を自分に刻みつけて行くのです。そして目の前にない事物の明瞭な像^{イメージ}までが、全く不可解な方法でもつて、思ひがけず甘美に、自分をば神々しい感情で縁^{エッジ}まで一ぱいに充たしてしまふことさへあるのです。」

或夕方、ロオド・チャンドスはいつものやうに馬に乗つてゐた。先刻畑の一つへ鼠のための毒薬を多量撒くやうに云ひつけて置いたことなど、もうすっかり忘れてしまつてゐた。そしてよく開墾された田地の中を並足で馬を進めながら、ところどころに片寄せられて盛り上つてゐる小石の塊だの、すつと畑の起伏の向うに沈んでゆく大きな夕日のほかには何んの印象も受けずにゐた時、突然、彼の心の裡に、鼠の群が死にかけながら苦しみがいてゐる穴倉のなかの光景がひよつくり浮んだ。毒薬の劇しい臭ひに充ちた、穴倉のなかのひんやりと重くろしい空氣、鼠たちの苦しげな叫び、出口をめがけての空しい殺到、塞がれた裂れ目の前でばつたり出會つた二匹の鼠の怯え切つたつめたい眼差し、——さういつた

すべてのものを彼は自分の裡にまざまざと感じた。が、それは決して憐憫といったやうなものではなかつた。それはさういふ人間的な感情より以上のものであつたし、又それ以下のものであるとも云へよう。それはそれらの動物たちへの自己没入、かぎりもない同化によるのであつて、その無我の状態には全く劇的要素がなく、また人間的要素さへいささかも無いのだ。——そのことは彼の擧げるもう一つの例によつて一層はつきりさせられるのである。

他の夕方、ロオド・チャンドスは胡桃の木の下に、植木屋の忘れていつた、半分水のはひつてゐる如露を見つけた。——その如露、その中にはひつてゐる、そして木の影がうす暗くしてゐる水、その水面をすいすいと泳いでゐる一匹の兜蟲、——それらの意味のないものが、何か無窮の前に自分が立たせられてゐるかのやうな戦慄で充たし、自分を頭から足の先までふるふると震はせました。そして自分は何かの言葉をわめき出したいと思つたほどでしたが、若し自分がひよつとしてそんな言葉を見出したとしたら、自分は自分の信じて居らぬ熾天使の奴さへ自分の前に跪つかせたであります。しかし自分は沈黙したまま、その場を立ち去りました。そして數週間の後、その胡桃の木を認めたとき、自分はそれを横目でおぼおぼと見ながらその傍を通り過ぎました。その思ひ出がいまだにその幹のまはりに漂つてゐるやうな奇蹟や、近くの灌木にまだつき纏つてゐるやうな彼方の戦きを逃がさないやうにとしながら……」

さう云つたやうな瞬間には、まことに取るに足らないやうなもの、たとへば犬だとか、鼠だとか、兜蟲だとか、發育の悪い林檎の木だとか、丘をうねりくねつてゐる車道だとか、苔蒸した石だとか、何物よりも貴重なものになる。すべてのもの、彼のまはりに存在してゐるすべてのもの、彼の思ひ出すすべてのものが、彼には實に意味深く見えてくる。そして彼自身の空けたやうな頭の状態さへ何かの意味を有つてゐるやうに思はれる位だ。「……けれども、そんな異様な幻惑が自分を離れると、自分は何も言ふことが出来ません。かういふ自分と世界全體との間の調和がどういふものから成り立つてゐるか、そしてどんな風にしてそれが知覺せられるやうになるかを、何か意味のある言葉でもつて自分が云ひ現はせないのは、自分の内臓の運動だとか自分の血液循環の停止などに就いてはつきりした説明を與へにくい以上であります。」

精神的なのか、肉體的なのか、どちらだか分からないやうな、そんな危機を除いてしまふと、彼の生活は殆ど信じがたいほど空虚なのである。彼はさういふ心の空虚な状態を自分の妻や雇人たちにやつと隠し了せてゐるのである。

「自分はいま自分の家の一翼を建てさせてゐます。そしてときには建築技師とその仕事の進行について程よく話を合はせてゐます。自分は自分で財産を管理してゐます。そして小作人や雇人たちは、前よりいくらか自分が無口になつたと思ふにせよ、昔と少しもちはがはずに氣立のいい方だと思つてゐるにちが

ひありません。彼等のうちの誰一人だつて、夕方、各々の戸の前に帽子を手にして佇すみながら、馬で通り過ぎる自分を見送つてゐる間、自分の目が、詩の文句なんか捜してゐる人なんぞのやうに、無言の欲望をもつて彼等の腐りかけた床板を撫でまはしてゐるとは思はないでせう。又、誰一人だつて知らないでせう、自分の目がいつまでもいつまでも醜い小犬だの、花瓶の間をしなやかに滑り抜ける猫だのの上に注がれてゐるのを。それからまた百姓家のなかの粗末な、みすばらしい品々の間に、言語を絶した、限界のない、何か謎めいた恍惚の源になり得るやうなものを自分の目が捜してゐるのだといふことを……。」

私はもうその手紙の終りに近いらしい頁を机の上に開いたまま、何かしら感動しながら、外へ出て行つた。目がひどく疲れたので、すこし歩いて来ようと思つたのである。いかにも春めいた日である。しかしまだ何處やら冷くてひんやりとしてゐる。二三日前に、もうこれが最後かと思はれるやうな雪が降つた。その雪が山の巖にも、屋根の上にも、畑の陰にも、さすがに大方は消え去つたが、まだあちらこちらに少しづつ残つてゐる。淺間山は、雪のないところだけ、妙に黝んで見える。私ははげしい感動で一ぱいになつて、かへつて妙に空けたやうな心の状態で、西の方へ歩いてゆく。村はづれのところから、

二又になつて分かれる道を北側にとる。其處からは両側ともすつと落葉松の裸かの林である。一日ぢゆう日陰になつてゐると見える、その左側のせきはすつと汚らしい雪で埋まつてゐる。そんな残雪がそのまま透いた林の奥まで消えずにゐるところもある。一面に褐色の小さな孔の出来てゐるのは、兎でも跳ねまはつた跡らしい。軟かさうに日のあたつてゐる、もう一方の側の林には雪は全然なくて、下草がもう萌黄色になりかけてゐる。鶯がまだ幼稚な啼き方で、ときどき啼いて見せてゐるのも、どうやらこつちの林の奥ばかりらしい。……私はさうやつて無心に數丁ほど歩いてゐるうち、やつとそんな落葉松林が切れて、それから今度は雑木林に變らうとする接ぎ目から、はるか向うに眞白に赫いてゐる北アルプスが望まれる地點まで達した。しばらくそこに立ち止つて、切なげな眼差でそれらの山々を眺めてから、私は再びいま来た道を引つ返した。そして少し草臥れて、やつと村はづれまで戻ると、さつきまで人つ子ひとり居なかつた其處の、觀音像や古碑なんぞの立ち竝んでゐる小高い草つ原に、村の小さな女の子たちが十人許り、がやがや騒ぎながら遊んでゐた。私はそこからやや離れた、觀音像の傍らに足を投げ出した。何といふこともなしに、皆の方には背中を向けて。——そのうち不意にそいつらの騒ぎが一層喧しくなつたやうだと思つてゐると、私の背後にその女の子が一人忍び足で近づいて来るやうな氣配である。それでもまだ私が知らん顔をしてゐると、その女の子は私のすぐ傍までこつそりと来て、何やら白いものを私の足もとに置くと、今度は笑ひ聲を立てて驅け去つた。——見ると、硝子の破片の上

に、雪の小さな塊を載せ、それになんたか薄黄と薄紫の細かい、草花とはほんの名ばかりのやうな奴が、数本、あしらつてある。——私が笑顔をして、皆の方をふり向いたら、女の子たちは大騒ぎをしながら、石碑のかけにみんな姿を隠してしまつた。氣がついて見ると、私のすぐ傍の観音像の前にも、私の前にあるのと同じやうな、あはれなる供へ物が置かれてあるのである。……

それから數分後、私は、そんな可哀さうな女の子たちに別れて、宿の方へ戻つて來つた。今度はみちみち、よく注意してゐると、道傍や畑の縁などに、住きにはすこしも氣のつかずにゐた、そんな薄黄だの薄紫だの、いちらしいやうな細かい花が一面に咲いてゐた。

昭和十二年四月

雲について

この山麓では、九月はたいへん雲が多い。しかし、夏の近づく頃の雲の不活潑な動きとは異つて、白い、乾燥した、動きのいちじるしい雲の塊りが不連続的に通り過ぎる度毎に、何かそれらの雲とともに一剝されでもしたかのやうに、そのあとで青空はいよいよ本物の青色に近づいてゆく。——さういふ雲のたたずまひが、とても好い。林のなかの空地などに寝そべつて見てゐると、さういふ雲は絶えず西から東へとときどき日かげを翳らせながら流れてゆく。

さういふ雲のなかから、淺間山もたえず見え隠れしながら、ときどきその全貌をすつきりと爽やかに見せたりする。山肌はいよいよ黄ばみ、夏などもつと多いと思つてゐた煙りが、思ひがけず、殆どあるかないか位にしか立つてゐなかつたりする。——が、さういふ時くらゐ、淺間山が魅惑的に見えることはない。日がばあつと當つて、それがまだ何物をも温めてゐない、もうかなり肌寒いやうな朝など、起き抜けにふところ手をして山を見に出ると、そんな朝は淺間はきまつて雲ひとつない山肌を冷え冷えと見せてゐる。その山肌一めん日に日が赤あかとあたり出すのを眺めてゐると、山自身が見る間に淡い雲を湧き立たせ、ヴェイルのやうに漂はせ、だんだんそれが濃くなつていつて、しばらくする裡に自分自身

を半分以上その雲のなかに隠してしまふ。それから終日、そのなかに見え隠れしてゐる。

そんな淺間山に憑かれたやうになつて、放心したやうにふらふらと山へ入つていつて死んだ人もあるといふ。——さういふ話を、私は數年前はじめて追分へ來て長い滞在をした秋に、宿の主人から聞いた。丁度その前年の、同じ九月半ばのこと、——一週間ほど前から、關西の方からふらりと來た一人の滞在者があつた。快活さうな男で、淺間山をはじめ見て見に來て、どうもかうも仕様のないくらゐ好きになつて、毎日恍惚惚れと山許り見て暮らしてゐたやうだつたが、とうとう或朝、一人で山へ登つてくると云ひ出した。主人に一人ぢやとても行けませんからと云つて止められたので、それは思ひ止まつたらしかつた。その代り、途中の血の池まで行つてくると云つて、それまでの道筋を主人に聞いて、寫眞機だけ手にして出ていつたが、それがさあ夕方になつても、夜になつても歸つて來ない。宿では騒ぎ出し、翌日から村では搜索隊を出して搜したがとうとう見つからずじまつた。——その男らしい死骸の見つたのは一月位たつてからで、佛岩の崖に落ちてゐたといふ。寫眞機も一しよにあつた。その寫眞をそのあとで現像してみると、まだ使つてゐない二三枚を除いては、みんな淺間の寫眞で、最後に撮つたやつには、初秋の、白い、さわやかな雲だけが映つてゐたといふ……

さういつた妻さを何處かその底にもつてゐる山だが、その淺間も、追分の供養塔などの立ち並んだ村はづれ——北國街道と中山道との分かれ——に立つて眞白な花ざかりの蕎麥畑などの彼方に眺めやつてゐると、いかにも穩かで、親しみ深く、毎日見慣れてゐる私の裡にまでそこはかとな旅情を生せしめる。往昔、遠く中山道を御代田の方から上つてきた旅人がやつと追分まで辿りつき、宿へのはひり口で、いかにもほつとした氣持であらためて淺間山をしみじみと見なほした數百年の感慨が、いまだに此處いらぢゆうに漂つてゐて、私達のけふの感情をもそれとなく支配してゐるのかも知れない。そんな氣もされる。

去年の九月も末近い頃、朝から午過ぎるまで、ここの馬頭觀音などのある村はづれの、昔のままに残つてゐると云はれてゐる、一本の古い松の木かげに、晝架を据えて、いかにも愉しさうに水彩畫を描いてゐた、一見外國婦人と見まがはれるほど、黒づくめの洋装の身についた、日本人の一老婦人がゐた。その傍には、中年の日本服をきた婦人がつきそふやうにして、編物をしてゐた。

偶然その朝そこまで散歩にきた私は、しばらく邪魔にならぬやうなところに立つて、その由緒ありげな老婦人のいかにも朗かさうな氣分で繪を描いてゐる様子を、私自身まで何か楽しくなりながら見物してゐた。

その午後、私が晝餉をへた時分、隣室に客が通されて、物靜かな老婦人らしい話し聲がしたした。

隣室とはいへ、私の居間になつたお小姓の間からは、疊廊下と控への間とを隔てた、大名の泊つた上段の間だから、話し聲は殆ど聞き分けられない。しかし、さつき村はづれで繪を描いてゐた老婦人とその附添ひの上品な婦人にちがひないことは分つた。

「山羊がこの村にだいふ飼はれてゐるやうですが、山羊のお乳を頂戴できますか？」さう云つたのは附添ひの婦人らしかつた。

「はあ、山羊のお乳でしたら、どこかで分けて貰つて差し上げます」宿のおかみさんが答へてゐる。

「山羊の乳飲めるの、たいへん嬉しいです。私、伊太利でよく飲みました。大へん好きでしたが、——こちらへ歸つてきてから、まだ一度も飲みません……」すこしをかしな言葉遣ひで、しかしいかにもこやかな口吻で、獨りごとのやうに云うてゐるのは、その長いこと伊太利で暮らしてゐたらしい老婦人であらう。

私は自分の部屋から出ていつた。隣室で、私なんぞがごそごそ物音を立てたりしてゐない方が、この村における二人の珍らしい短い滞在のためにはすべてが好い、——と思つたからである。

その間散歩でもして來ようかと思つて、板土間を横切つて行かうとすると、そこにちかに繪具箱と編物の袋がおかれ、その傍らに大きな紙挟みが無造作に立てかけられてあつた。その中に挟みこまれてゐるにちがひない、さつきの村はづれからの淺間山の繪が見たかつた。頼んで見たら、氣輕に見せて貰へ

たらうが、強つてさうするほどの氣にもなれず、——それほど一人愉しんで描いてゐたやうな繪なので、——私はそのまゝおもてへ出た。

宿の前には、向日葵が一本、すつかり枯れたまま、いまだに褐色の實を垂らしてゐる。その大きな葉は、夏ちゆう、花を太陽の方へ向けさせてゐたときの剛情な姿勢のまま、ただすこし傾いて、その枯れた向日葵を ブルニエル・フラン 前に ブルニエル・フラン に立てて、淺間山は相も變らず自ら湧き立たせた雲のなかに見え隠れしてゐた。

昭和十三年九月十八日

附記 この老婦人は有名なラケウザお玉さんであつた事を私はあとで知つた。

七つの手紙

或女友達に

一五二

お手紙を難有う。私達の仲間のはもう殆ど此村から引き上げて行きました。さうしてこれから
は、この小さな村の何もかも、みんな私が一人占めです。

夏の間、みんなでよくおしやべりをしにいつたあの栗の木、——さういふ私達の午後のために涼しい
木陰をつくつてゐてくれた、あの栗の木の下に、私は二三日前から、一人でもつて本や紙をいかかへ抱
へていつては、そこで山蟻などを殺しながら、本を讀んだり、手紙を書いたりしてゐます。こんな事を
一週間ほども續けてゐるうちに自分の考へをやをら仕事の方へ向けて行かせようといふのが、私のいつ
もの手。——きのふの午後も、今かうやつて貴方に手紙を書いてゐるこの木陰に寝ころびながら、私は
アペラアルとエロイイズの手紙の事を書いた本に讀みふけつてゐました。あのエロイイズの純粹な場合、

一九三七年九月十一日、追分にて

——既にもうアペラアルとの間に一人の子までなしながら、妻たらんよりは、戀人たらんことを欲して、
アペラアルの求婚を一時斥けようとまでしたエロイイズの心意氣、——それからさういふ二人の戀が世
間から攻撃的となり、遂に別れ別れに修道院に入つてから、數年後再び二人が取りかはすやうになつ
た手紙の中の、相手を思ひ切らせて神のみに仕へようとしながら、しかも自ら相手を思ふのを禁じ得ず
して惱みもだえる彼女の切なげな姿、——さういふエロイイズの歎かひが、數世紀後、その中に再び同
種の小禽の叫びのやうに認められる、あの葡萄牙尼の苦しげな手紙、——そんな昔の不幸な戀人たちの
残していつた手紙だとか、或は日記だとかを、私はこの頃その一つを殆ど身から離さない位にしてまで
讀みふけつてゐるのです。

實を云ふと、私はこんどの仕事には、さういふ手紙や日記を残していつた昔の不幸な戀人たちの一人
を取り上げて見たいのです。さう、まあ王朝時代のものなら申分ありませんが、その頃の不幸な婦人た
ちの残していつた多數の日記や家集のうちに、それを私がちよつと換骨奪胎しただけでそのまま私の好
みの物語になつて呉れるやうなものがありはしないか知らん？ そんな日記や家集の中で、彼女たちの
涙ぐましさの中らちつと我々を見つめてゐるやうな、そしてそれをしばしば手にすることもあつた學
者達はそんな目ざしには少しも氣づかなかつたので、反つて我々には、さういふ彼女たちの歎かひがそ
つくりそのまま、見知らぬ小禽の叫びにも似て、一節々々くつきりと認められると云つたやうなものが、

一五三

かういふ私のために残つてゐて呉れさうな氣もします。これから一つさういふ日記やら家集やらを漁るつもりです。(大體もう二つ三つ見當をつけてはゐるのですが……)

末筆ながら、私の健康のことをいつも御心配下さつて難有う。しかし、山梔子嬢くちなしの手紙に貴方が身體の弱いのに無理ばかりしてゐるといつて氣づかつて來ましたが、かうやつて山の中で氣ままにしてゐる私はともかくも、本當に貴方こそ無理をなすつてはいけませんね。何處か靜かなところへでも行つて、しばらく御養生なさるといい。弟さん達によろしく。そのうち空氣銃でもつて雉子でも打つたらお送りすると言つて下さい。

二

九月二十三日、追分にて

貴方は本當に好いときにお手紙を下さいました。貴方が何處かの海邊に行つていらつしやるとの事、一週間ばかり前に山梔子嬢くちなしからいただいた手紙で知つては居ました。誰にもその行先を知らさずに、何處かへすうつと行つてしまつてゐるなんて、いかにも貴方のなさりさうな事だとは思ひましたけれど、こんな山にゐる私なんぞ位にはすぐ其處からお便りを下すつても好かりさうなものだと、けふも思つてゐたところでした。

折角お貸ししたが、そんなものを讀んでくれるかどうかと思つてゐたユウジエニイ・ド・グランの「日記」、そちらへ持つていつて毎日讀んでいらつしやる由、大變うれしく、「この日記には思想も感情も苦痛もこんなにある。何んと人を夢みさせ、反省させ、生活させるものではないか。いはば、忘れてゐる或メロディに何故かしら胸がゆすぶられて來るやうに、それは自分の裡に郷愁のやうなものを起させる」といふアミエルから貴方がお手紙の中に引いて來られた言葉はいかにもこの日記に向はれてゐる貴方自身の靜かな姿を私に偲ばせてくれましたが、私はこの日記にはもう一種の愛讀者のある事——その愛する弟モオリスのために彼女自身は空しい生涯を送るのにも甘んじたこの美しい魂に對して思はず羨望の聲を洩らしたリルケのごときものゝある事をも、貴方にお知らせして置きたい。最近機會があつて、この日記に就いて書いてゐるリルケの手紙を讀みましたが、その晩年の苦しい年月の間、彼を支へるべく彼のために生きてくれるやうな、そしてその人の許に彼の孤獨な生を避難させてゐられるやうな者を求めてやまなかつたリルケにとつて、この日記がどんなに貴重なものに思はれたか、——私自身はまだ孤獨なんぞと云ふものがいかに手きびしいものか殆ど知らぬも同様でせうが——そのリルケの羨望に近い氣もちは私にもいささか分かるつもりです。

それはさて、貴方がその弟思ひの聖女の日記に親しまれてゐる間、私は私でそれとはおよそ反對な運命の下におかれた、女としての苦しい思ひのありつたけをした一人の女の日記のために心を奪はれてゐ

ました。それはこの前の手紙でお話したやうな、こんどの仕事のために、私がやつとあまたの王朝時代の日記の中からこれこそと思つて選んできた「蜻蛉日記」といふ、さういふ古い日記の中でも最も古いとされてゐるものの一つです。

私の前に現はれたその「蜻蛉日記」といふのは、あの「ぼるとがる文」などで我々を打つものに似たものさへ持つてゐる所の、——いはば、それが戀する女たちの永遠の姿でもあるかのやうに——愛せられることは出来ても自ら愛することを知らない男に執拗なほど愛を求めつづけ、その求むべからざるを身にしみて知るに及んではせめて自分がそのためにこれほど苦しめられたといふ事だけでも男に分からせようとし、それにも遂に絶望して、自らの苦しみそのものの中に一種の慰藉を求めるに至る、不幸な女の日記です。

「唯生きて生けらぬと聞えよ」——さう、生きた空もないやうな思ひで男に訴へつづけた歎かひにも拘らず、彼女があゝの葡萄牙尼同様に、「いと物はかなく、兎にも角にもつかで」いたく年老ゆるまで生きながらへてゐたらしい事、しかし彼女らの死後さういふ皮肉を極めた運命をも超えて彼女らの生のはげしかつた一瞬のいつまでも赫きを失せないである事、常にわれわれの生はわれわれの運命より以上のものである事、——「風立ちぬ」以来私に課せられてゐる一つの主題の發展が思ひがけず此處において可能であるかも知れないのを見、私は何か胸がわくわくするのを覺えてゐる位です。

が、それだけにまた一層悔やまれるのは、この仕事を前にして、私の身體がいまあまり好いコンディションに置かれてない事です。恐らく氣候の變り目のせゐで、こんなに元氣がないのでせう。きつと氣候が落着いたら、すぐ恢復することと思ひます。こんなにくちなない自分を元氣にさせるためにも、貴方の手紙は本當に好いときに来てくれました。それからそれと一緒にあのユウジエニ・ド・ゲランの「日記」も。いま、貴方がそれを讀んでいらつしやると聞いて、急に自分の傍にも生き生きと蘇つてきたやうな氣のするあの「日記」の筆者みたいな、さういふ好い姉をたとへ自分もたすとも、さういふ人のこの世に居たといふ事だけでも、何かそれに似たものにならば私を郷愁させ、それだけでも暫くなりと私を支へてくれるものがありますからね。

三

十月二十三日、追分にて

お手紙を難有う。それから、あの大好きなマロン・グラセなど、いろいろとおいしいお菓子を。

もう御元氣になられて東京でお暮らしの由、結構でした。私は相變らずこちらで仕事に没頭してゐます。こちらは今、とてもすばらしい秋日和です。本當にこんな立派な秋を一人占めにしてゐるのは何んだかもつたないやうだと思つてゐましたら、一週間ばかり、女子大の生徒たちが十四五人でヒュッテ

にやつて来ました。まさかその中にくちなし嬢があるとは思はなかつたので、私は少年みたいに首まであるジャケットなんぞ着込んで仕事をしてゐましたら、或日、突然みんなで押しかけてきて私に油屋ちゆうを案内させました。私はまるで自分の家みたい、ジャケット姿のまんま、昔殿様の泊つた上段の間だの、遊女の名なんぞ一ぱい落書してある壁だのを見せて歩きましたが、一番最後に、いま私の使つてゐるお小姓の間に案内したところ、部屋中一ぱいに散らかした本だの、書きかけの原稿だのをみんな珍らしがつて、いつまでも見てゐられたのは冷汗を掻きました。貴方の送つてくれたマロン・グラセがまだ箱の中に二つ三つ残つてゐるのまで覗き込んでゐたやうでしたが。——すでに追分のこの秋のすばらしさ、それから私の精進ぶりなど、くちなし嬢が歸京して逐一貴方にも報告してゐるとは思ひますが……

私の仕事、まあどうにか一通りは出来上りかけてゐますが、いまになつて、私のこんな長い間の努力が或ひは空しかつたのではないかと云ふ氣がし出してゐてなりません。しかし、どつち途、もう遅い。

——大體、こんどの仕事のテキストとした「蜻蛉日記」なるものは、一讀過の印象は、いかにもひたむきな作者の痛々しげな姿にもかかはらず、何か變にくどくどとしてゐて、いつもおなじ歎きばかり繰り返してゐるやうに見え、どちらかと云へばあまり感じのいいものではないのです。そこでもつて、私はこの日記の本質的にもつてゐる好いもの、例へばあの「ぼるとがる文」などのそれにも似たもの——さ

う云ふ切實なものだけをそつくりそのまま生かしながらその日記全體をもつと簡潔にして、それに一種の小説的秩序を與へ得たら恐らくすつと我々に近いものになるだらうと信じてゐたのですが、私はその代償としてこの日記そのものの獨自性をも危険にさらさなければならぬ事にはさまで深く思ひ及ばなかつたのです。——ところで、この「蜻蛉日記」に於いては、作者はその折々の苛ら苛らした氣もちをその折折の氣もちのままに構はずに誇張し、その前後の記事などに少し辻褃の合はない事があつても一向意に介さない、——言つて見れば、この日記の作者はすべてを論理的秩序(logical order)によつては書かずに、心理的秩序(psychological order)によつてのみ書いてゐる、——其處にやはりこの日記獨自のちやんとした統一がおのづからあつて、それをも生かさうとすると、もはや私の手を入れる餘地なぞは何處にもない位なのです。いつも同じ弟のモオリス、同じ花、同じ小鳥、同じ神様の事を、それをまたいつも同じやうに靜かな調子で語つて倦かうとはしなかつた、あのユウジェニイ・ド・グランの「日記」にもその點似て、不幸な女の涙ぐましさ、執拗さ、根氣よさそのものの中に、寧ろこの日記を永遠的なものにさせてゐるものがあると云つていいのかも知れません。——そんな事にどうして私ともあらうものが今まで氣づかずにゐたのか、この頃になつてつくづく、何んだか取り返しつかない事をしたと思ふやうになりました。

が、さういふ矛盾に苦しみながら、一方この仕事が最後に近づけば近づくほど、ますますそれに私を

没頭させ出してゐるのは、この作品の結末において漸つとその手に負へない女主人公が私のものになり出したやうに見える事です。——その女主人公が男のために絶えず苦しんだ餘り、いつかその苦しみなしには自分が生きてゐられぬかと思へるほどになつてゐる、そんなにまで自分にとつてはもはや命の糧にも等しく思へるほどの貴重な苦しみを、男は自ら與へながらそれには一向氣づかうともしない、そんな情知らずをいまは反つて男のために氣の毒な位に思ふ、——さういふ一種の浪漫的反語とでも言へば言へないこともなさうな、自分を苦しめた男をいまは反つて見下ろしてゐられるやうな、高揚した心の状態を、私とその苦しい女主人公のために最後に見つけてやつた事は、この作品を私のものとして世に問ふ唯一の口實ともなりませう。……

のみならず、私は漸つとかうして自分のものになり出したこの不幸な女主人公をこのまま手離したくはない位なのです。私は出来れば引き續きこの續篇を書いて見たく思ひます。さいはひ私がこんどの仕事に使つたのはこの日記の三分の二ばかりで、まだその三分の一がそつくり手をつけずに残つてゐるし、それにその部分の方が小説的なことはすつと小説的ですから、それを大いに役立てて、——こんどの仕事ではいささか物足らなかつた私の小説的欲求をその方で充分満足させてやらうかと思つてゐます。

この二三日前からといふもの、村中のありとあらゆる木といふ木が殆ど小止みもなしに落葉しつづけ

てゐます。もう一週間もしたら、本當にこの小さな村はすつかり裸かになつてしまひさうな位。——私はときどき仕事に疲れると、その原稿をもつて近くの林の中へそれを讀みにゆきます。そしてしきりに落葉してゐる中に坐つて、それを讀みふけりながら、頭上でさらさらと落葉の立ててゐる音を聞くともなしに聞いてゐるのは、私には何とも云へない refreshment になるのです。

四

十一月二十五日、輕井澤にて

本當に飛んだ目に逢ひました。こんな山の村で火事に出逢はうなどは、およそゆめにも思はなかつた事です。此あぶらや一軒の火事のために、この村ばかりでなく、近在の村々までそれは大騒ぎをしました。しかし晝火事だったので、怪我人も出ず、僕なんぞは着のみ着のまま焼け出されたものの、身體には別狀ありませんでしたから、御安心下さい。數日前からこちらに来てゐた立原君も野村君も、同じやうに焼け出されました。しかし、運よく「かげろふの日記」だけは脱稿して、雜誌社へ送つてしまつた後だつたので、まあ好かつたやうなもの、その續きを書くためにいろいろ取つておいたノオトや、書き入れをした本や、それから澤山のリルケの本など、何もかも一べんに失つてしまつたのはいかにも残念ですが、まあ、この冬中うんと仕事をして、取り返せるものだけでも取り返して見せませう。

いま輕井澤の旅舎に避難してをりますが、この冬ちゆう或知人の別荘を借りられる事になりましたので、あすからそちらへ引き移ります。一しよに焼け出された野村君もたぶん僕とこの冬をこちらで過す事になるでせう。いまちよつと東京へ歸つてをりますが。——僕はどうもこんなジャケット姿ですごすご上京するのも癪ですから、このままこちらに居残つて、小さな仕事を二つ三つ片づけることにしました。

就いては、お言葉に甘えて、貴方に本を一冊御無心します。矢代幸雄氏の「受胎告知」といふ本の（この夏、僕のもつてゐたのを貴方もごらんになつたでせう）を何處かの古本屋で見つけて送つてくれませんか？ ほら、夏、僕がその本の挿繪を見せながら話したことのあるのを覚えてゐませんか、村の娘マリアへの告知の天使ガブリエルの不意の訪れ、——そんなのを輕井澤みたいな山村を背景にしてちよつと書いて見たいんだなどと冗談のやうに話してゐたのを？——あいつなら、こんな時でも、造作なくちよつと書けさうな氣がするので、もう一度あの本でも見てやらうかと思ふのです。

十二月になつて、それでも書けたら、二三日ぐらゐ上京するかも知れません。少くともクリスマス頃にはきつと上京します。さうしたら貴方がたにもお會ひできますね。

この夏やはり追分に來てゐた友達の一人から「この夏の美しかつたものがすべて失くなつたとは、そのためすべてが美しかつたやうで悲しい氣もちです」などと書いてよこしました。本當に僕もそんな

氣もちになる位。……

けさもちよつと追分の焼跡へいつて來ました。焼け出されたあぶらやの人達、みんな割合に元氣です。來年の夏までには何とか小さなバラックでも建てて是非みなさんに又來て貰ふなどと言つてゐました。しばらく焼跡に立つて僕は、あの火事の日にも吹いてゐたやうな、西から強く吹きつける、寒い風に吹かれて居りました。そんな風の中に「かげろふの日記」の下書の焼け残りなんぞがまだひらひらと飛んでゐました。

五

十二月一日、輕井澤にて

「受胎告知」其他いろいろとお心盡しの品を難有う、只今受取りました。

僕は先月二十六日、お話しした例の別荘に引つ越しました。此處は *Hobby Valley* なんぞと外人の呼んでゐる小さな谷の上にある林の中の杉皮葺きのコツテエデ、——林の中とはいへ、いまはもうすつかり冬枯れてゐるので、裸かの枝を透いて、下方の高原とそれを四方から遠巻きにした國境の山々、更らにその山向うにもう眞白になつた巔^{いただき}だけをのぞかせてゐる八ヶ岳などが、殆ど手にとることくに見えるやうなところですよ。……

野村君が数日前やつて来るまで、僕はこんな山のなかに一人きりで暮らしてゐたんですからね、僕もなかなかうきになつたでせう。この頃は野村君と一しよに毎日薪割りをしたり、下の井戸まで水を汲みにいつたりして、半ば自炊生活をしてゐます。正午頃村の娘さんが御飯だけを炊きに來てくれますが、あとは大抵野村君と二人で代る代るやつてゐます。何分こんな冬の山住ひにはまだ馴れないものだから、それこそ食ふ事と寒さをしのぐ事だけにすつかり氣をとられてしまつて、なかなか肝腎の賣文稼業には手が届きかねます。それにもう一つは、大きなファイア・ブレスの中でぼうぼうと音を立てて燃えてゐる火をいい氣持になつて見守つてゐると、知らない間にすんすん驚くほど速く時間が立つてしまふのです。もつとも時計なんぞ二人とも持ち合はせてゐないので、どの位時間が立つたんだか分らないけれども……

とにかくつひぞこれまで一度も味つたことのないやうなこんな原始的生活を、いまかうやつて二人でしてゐるのは、何とも云へず愉快です。

しかしけさなんぞは、本當をいふと、ちよつと僕には辛かつた。やつと十時頃、温かさうな日がちらつと差したかと思ふと、すぐ眞暗な雲に遮ぎられてしまつて、そしていまにも雪になりさうで、——いつその事さつさと雪になつてくれりあ好いのに、と佛頂面をしてゐると、そこへ思ひがけず貴方から贈物が届いたので、急に家の中ちゆう明るくなつたやうな氣がしました。僕がきふに愉しさうに小包をほ

どき出してゐるのを、傍で野村君がうらやましさうな顔をして見てゐたので、折角のお心盡しの品ですが、その中から奮發してシュテツテルの鉛筆を一本分けてやりました。それからそのついでに二人で有平糖を一しよに頬張りました。

それから僕は早速いただいた「受胎告知」をかかへて、二階の寢室に閉ぢこもり、その本へさあつと目をやつてから、いま、この手紙を書いてゐるところです。これまでは本といつたらこの間ちよつとゐた宿屋から借りてきた聖書が一卷、傍にあるきりでした。まあ、こんな時でなければこんなものをしみじみと味ふ機會はあるまいと思つて、リルケの愛讀してゐたと云ふ約百記なんぞを拾ひ讀みしてゐました。

さういへば、日曜日に野村君と一しよにふらつと教會へいつて來ました。(こなひだ大雪の日に二人でその教會の雪をかぶつた美しい尖塔を見上げてゐたら、その神父さんにつかまつて日曜の彌撒に來なさいと云はれたので——)御存知の、あのアントニン・レイモンドの建設になる、瑞西の山間の村にでもありさうな、入口に聖パウロの像の立つてゐる小さな教會の方です。教會には獨逸人らしい中年の婦人が一人、黒いマントにうづくまつてゐたつきり、——ちよつと顔を出すだけですぐ出て來ようと思つた僕達も、入つてみるとさうもならず、小一時間ばかりも寒い思ひをして、隅つこの藁椅子にかしこまつて坐つてゐました。お彌撒がやつとすんで、その婦人が俯向きがちに懺悔室らしいにはひつて行く

のを見てから、僕達も立ち上つて神父さんにちよつと挨拶をして出て来ました。さうしたら、その日の夕方、その神父さんが僕達の山の上の коттеエチまで、わざわざ訪ねて来たので面喰らひました。やつぱり獨逸人で、日本に来てからまだ二年目だとか、日本語をあまりよく解せないらしく、ずいぶんとんちんかんな會話を取りかはして歸つて行きました。

もう二三日したらその神父さんも松本へ引き上げられる由、——あの教會がこれつきり閉されるのかと思ふと、ちよつと残念ですが、それでもまあ物としました。どうもあんな美しい教會が冬ぢゆう開いてゐたりされると、しよつ中そこへ出入りしたくなつてそのために僕なんぞと來たら、カトリックにだつて何だつてなりかねませんからね。

今月五日に友人の結婚式があつて、是非僕にも出席しろと云つてきたので、一つそれへ一張羅のジャケット姿で出席してやらうかと思つたりしてゐます。それまでに何とか仕事の一つでも片づいてくれると好いんだけど……。なんだかこの手紙を書いてゐるうちに急に、寒くなつて來たと思つたら、雪がちらちら舞ひ出してゐます。これからこの手紙を出しがてら、少々食料品を買出しに、ひとりで村まで一走りして來ます。

六

十二月九日、輕井澤にて

例の友人の結婚式にちよつと顔だけ出して、翌朝またこちらへ歸つて來ました。まだ仕事の一つも片づかないので、ゆつくり貴方がたにお會ひしたりしてゐられませんでした。一人で留守番をしてゐた野村君は、すこし風邪を引き込んで元氣がなかつた由、——しかし僕が歸つたら、忽ち元氣になつて、權でもつて僕の荷物を山の上まで運んでくれました。

けさはとても日が温かなので、日あたりのいいヴェランダに焜爐などまで持ち出して、雪に埋つた林や谷を前にしながら、ゆうべの冷飯をバタでいためて食べました。何しろこの僕が腕に縋をかけてこしらへるのですから、そのうまい事つたら！ 本當にこの味ばかりは東京なんぞにゐて寒がつてばかりゐる奴らには想像もできないでせうね。——丁度そこへ郵便屋さんが登つてきたので（大抵かうやつて食事をしてゐる最中にいつも郵便が届くのも楽しみの一つです）紅茶を一ぱい御馳走してやりました。けさ届けてくれた郵便の束の中にはこの前貴方に書いたあの松本へ行つたカトリックの神父さんから送つてよこしたパンフレットが數冊はひつてゐました。端書も添へられてあつてこれを讀んで分らない所があつたら質疑して下さいなんぞと言つて來ました。しかし、神様のことなんぞはもう少しお預けに願ひたいものです。……

まあ、さう言つておかないと、ちよつと氣まりの悪い事がある——といふのは、僕は實はゆうべから

信心深いポオル・クロオデルの「マリヤへのお告げ」といふ戯曲を讀んでゐるところですから、だが、それは何もこの中にあるカトリック的の主題に心惹かれて讀み出してゐるわけではなく、實をいふと例の小さな仕事のために、自分のまはり一種の宗教的雰圍氣みたいなものを人工的に製造しようとしてゐるだけなのです。

一體、このクロオデルの「マリヤへのお告げ」は、その表題が表題だけに、すぐにあの「受胎告知」の畫家たちがしたやうに、天使ガブリエルが村のマリヤの許を訪れるルカ傳の一節かなんぞを戯曲化したものとお考へなさるでせうが、さうではありません。クロオデルはこの戯曲の中に唯、聖女になればなるほどいよいよ人間的になつていつたヴェイオレエスといふカンパアニエの或村の若い娘の姿を描いてゐるだけなのです。それではそんな表題は何を示してゐるか云ふと、まあ、人間的なものの中への神的なものへの闖入といつたやうなものがこの戯曲の主題になつてゐるからだらうと思へます。——いま僕の書かうとしてゐる小さな仕事を、こんなところへ持ち出すのはすこし烏滸がましいやうだけれど、まあ、僕の奴もさういつた氣もちで、つまりあれらの愛すべき受胎告知圖の氣もちだけを汲むやうにして、一切マリヤもガブリエルも出さずに、ただその二つのもの——人間的なものとの神的なものとの美しい挨拶をいま僕の住んでゐるやうな高原の淋しい村での春先きの頃の小さな出来事として、一つの牧歌に歌ひ上げたいまでなのです。ひよつとしたら、そんな出来上つた作品なんかより、かうして雪に

埋れた谷間の一軒家でもつて、寒さにかじかんだ手に自分の息をふきかけながら、こんな手紙を貴方に書いてゐる僕の方がよつほどロマネスクかも知れませんね。

七

十二月三十一日、輕井澤にて

しばらくお便りを差し上げませんでしたね。仕事をしてゐたものですからお許し下さい。それにクリスマス頃上京するなんていつてゐて、——とうとうこちらで野村君と二人きりで淋しいクリスマスを送つてしまひました。野村君はそれから二三日して東京に歸りました。僕だけ残つて仕事を續けてゐましたが、漸つとそれも片がつき、きのふ送つてしまひました。これからその原稿料が届くまで、雪の中に一人で頑張つてゐなければなりません。仕事の方は、自分でも本當に思ひがけなかつたものを書いてしまひました。「風立ちぬ」のエピロオグをなすものです。或日、友人の送つてくれたリルケの「鎮魂曲」レクイエムを何氣なしに讀んでゐる中に急にそれが書きたくなつて殆ど一氣に書いてしまつたのです。

これで「風立ちぬ」も二年ごしに漸つと完成したわけですが、こんどのは去年の冬、あの一聯の作品を書いた當時、その最後には是非付けたいと思つてゐた、自分と共に生を試みんとしてその半ばに倒れた所の愛する死者に向ける一篇のレクイエムです。——實は去年の冬ちゆう、この一篇をこそ書きたいばつ

かりに追分なんぞにたつた一人で暮らしてゐた位でしたが、とうとうそれが書けず、もうさういふ死者に對するレクキエムのごときものは、自分には書けないのではないかと半ば諦めかけてゐたのでした。それがこんどの火事のおかげで、いまのやうな山小屋住ひを餘儀なくされてゐるうちに、急にそれが書けさうな氣がじてきて、いささか持て餘し氣味だつた例の牧歌の方はその儘にして、そつちを一氣に書いてしまつたやうなわけ。「雉子日記」などを残したきりで、去年の冬ちゆう、雪の林のなかなどにそんなレクキエムを求めながら一人でさまよつてゐた頃の、いま思ふと自分の痛々しいやうな姿が、この冬のこんな山暮らしをしてゐる自分の裡にそつくりそのまま蘇つてきて、其處においてはじめてその形體を得た、とまあ言へないこともないでせう。——本當にいろんなものを私は火事で失つたけれど、その代りに思ひがけずそのお蔭でこの一篇のレクキエムを得られたので、もう失つた何もかもさへ惜しくはない位、——來年の春にでもなつたら、「風立ちぬ」を一まとめにして氣に入つた本にして置きたいものだ、いまからもう楽しみにしてゐます。

今、一仕事をしたあとの、やや空虚にさへ似た落着いた氣もちで、僕は暖爐に足をかけながら、「リルケの思ひ出」といふ本を讀んでゐるところ。この筆者のトゥルン・ウント・タクジス公爵夫人といふのは晩年のリルケにかなり深い交渉のあつた女性で、詩人が殆ど十年もかかつて「ドウイノ悲歌」を完成するまでの異常な勞苦をつぶさに僕達に語つてくれてゐますが、そんなものをかうやつて讀みふけつ

てゐると、何か自分にも努力次第でいまに好いものが書けさうな氣さへしてきて、新しい、靜かな力のやうなものが私の裡に充ち満ちてくるのを感じずにはゐられません。

それにしても、こんな雪に埋つた山の中に、自分みたいなのがよくもまあかうやつて一人つきりで平氣で居られるやうになつたものだなあ、とつくづく自分に感心もしてゐます。僕もどうやらこれで漸く一つの人生學校を卒業したのでせうかね。

山の家にて

ト居

津村信夫に

一七四

この家のすぐ裏がやや深い谿谷になつてゐて——この頃など夜の明け切らないうちから其處で雉子がけたたましく啼き立てるので、いつも私達はまだ眠いのを目を覺ましてしまふ程だが——それでも私はその谿谷が悪くなく、よく小さな焚木を拾ひがてらすんすん下の方まで降りていつたりする。その谿谷の丁度向ふ側にある、緑色の屋根をした大きなヴィラが、いまはまだ木の枝を透いて手にとるやうに見える位。その谷間の雑木林はやつと芽を出したばかりだが、今日なんぞ、そこで焚木を拾つてゐたら、ふんと蚘らしいものがいきなり飛んできて、私の顔のまはりにいつまでもつきまとつてゐた。少しうるさかつたが、なんだかちよつとそれに夏の氣分を感じて、懐しくもあつた。——それほどもう夏の或るものがついそこまで來かけてゐるといふのに、それを除いたすべてのものにはまだ春さへ充分には行き渡つてゐない。夜なんぞはこれで想像以上に寒い。いまだつても、この手紙を書きながら、ファイア・プレセスに火を焚いてゐるほどだ。しかしそれは私が晝間谷から自分で採つてきた僅かな焚木でも事足りる、わざわざ薪を買ふほどのこともない……と、まあ、さういつた位の餘寒さだ。

さう、まだ君にはこの新居のことを話さなかつたね。御想像どほりの、相變らずの不便な山の中で、それに慣れつこの自分とはともかくも、はじめての女房には、いささか可哀さうな位だし、それに家がすこし二人だけで住むのには大き過ぎたけれども、小屋のつくりが（こんなのを瑞西などで *Chalet* といふのだらうか）いかにも氣に入つたので、思ひ切つて借りた。——本當をいふと、こんな一番山奥の、それにこんな二人きりには少し大き過ぎて持てあまし氣味の小屋を、他にいくつもあつた手頃な小屋よりも私に特に選ばせたのは、實はこのファイア・プレセスの傍に二つ三つ無造作にころがつてゐた古い檜の木の椅子（昔から私はこんな椅子をどんなに欲しがつてゐただらう！）と、それからレムブラントの繪なんぞの入つた額縁がいくつか裏を向けて埃まみれのまま壁に立てかけてあつた小さな屋根裏部屋となつた。いくら女房持ちになつたつて、こんな風な一向變らない私を知つて、さぞ君は嬉しがつてくれることだらうな？ それとも少しは私達の行末が氣になるとでも云ふかね？

私はその屋根裏部屋をすぐ自分の部屋にきめて、そこに自分の椅子のすべてと、それから去年火事ですつかり焼いてしまつてから又ぼつぼつと集め出した少數の本の中から、特にリルケのだけを持ち込んだ。これは女房の奴には内證だが、私はこの屋根裏部屋にときどき閉ぢ籠つては、全く一人つきりで、昔の自分にそつくりそのままの自分に返つて、心ゆくまで自分の青春に訣別を告げようといふ陰謀。——が、その代り、階下の、女房と共同の部屋には、女房に買つて貰つたトルストイ全集だの、ジャック・

一七五

シャルドンヌの「祝婚歌」や「クレエル」などを積み重ねて、一方、大いに結婚生活者の心理研究もしようといふ感心な心がけさ。……當分、そんな二種類の自分が、私の裡でお互に勝手悪さうに同居してゐるだらうが、それはまあ仕方があるまい。慾を云へば、かへつていつまでもかうしたままの通りでゐてくれた方が自分には何んだか面白さうだ。

こんな手紙を君に書きながら、私がいま思ひ出してゐるのは、二三日前にも讀み返したリルケが「マルテの手記」の中でフランシス・ジャムらしい詩人のことを書いてゐる一節だ。——「ああそれは何んといふ幸福な運命であらう。先祖代々の家の、物靜かな部屋に坐つて、家付の落ちついた家具に取圍まれながら、まぶしいほどの新緑の庭で山雀が啼きかはしたり、又、遠くの方で村の時計の鳴るのを聞いたりしてゐるのは。さうやつて坐つて、午後の温かな日ざしを眺めながら、昔の少女たちの話を澤山知つてゐて、そしてしかも詩人であるといふのは。さうして自分だつて、もし何處かに——この世の何處か、誰ももう行つても見ないやうな閉された田舎家の一つにでも、——住むことが出来て居つたならば、彼に似たやうな詩人にもなれてゐたらうと思ふのは。私にはたつた一つの部屋が（屋根裏の明るい部屋が）ありさへすれば好かつたらうに。さうしたら、私はそこで自分の古い身のまはりの物や、家族の肖像や、書物だのと一しよに暮らしただらう。それから私は椅子や、花や、犬や、石ころの多い小徑のための丈夫なステッキも持つたらう。そしてその他には何ももう持たなかつたらう。……が、すべてはそ

れとこんなにも異つてしまつてゐるのだ。その訣は神様だけが知つてゐられる。私の古い家具類は、私が預かつて置いて貰つてある或納屋の中で朽ちつつあるのだ。そして私自身はと云へば、ああ私にはこのやうに屋根さへなく、雨は私の眼のなかにも降るのだ。」

まあ、この世のこんなところに、——かうして自分の氣に入つた屋根裏部屋をしばらくなりと借りられて、椅子や花や犬などと氣持よささうに暮らしてゐる、恐ろしく出来損ひのマルテといつた恰好の自分、——それにしたつて、その氣持のいい何もかもがいつまでも自分のものであるわけのものではなく、そんなフランシス・ジャムのやうな詩人になり切れさうな日も、また何んと遠いことだ……

が、いまだけはともかくもかうした幸福さうな私達、——この私達には、現在、花だつて、犬だつて、少しも事は缺かない。——例へば、ついこの間、私がすぐ裏の樅の木かげにちよつと目につかないくらゐに小さな青い花が一面に咲いてゐるのを見つけて、何んの花だか知らないけれども可憐だつたので、その見本のやうに一輪だけ摘んで得意さうに持ち歸つてきたら、女房の奴に「あなたが董の花なんぞを摘んできて。それにうちの庭にだつてたくさん咲いてゐるぢやあないの？」と笑はれた。なるほどさう言はれて見ると、わが家の庭の隅々にもそれと同じ可憐な花が一ぱい咲いてゐるのに漸つと氣がついた。それにしても董の花をいまままで少しも知らずにゐた私の迂濶さ！……だがそんな迂濶なところのある私だけに、いま、——こんな人生のこんな瞬間に、——董の花みたいなものまでもかうやつてし

みじみと見て楽しんでゐられるのだから、と誰に向つてともなく負け惜しむ。

夕方、女房が食事の支度をし出す頃になると、何處から來るのか、エアデルテリヤの雑種らしい大きな犬が姿をあらはす。人戀しげな女房がそんな犬まで歡待して、家の中へ入れてやるものだから、私達が食事の間、私達の傍に仲間の一人といった恰好で坐つてゐる。しかし、私達が分けてやるものももう何もなさうなのを見ずすと、私達のこはごはしてやらうとする愛撫には目もくれないで、さつさと外へ飛び出していつてしまふ現金な奴。もうすこし一しよに居て、かうやつてファイア・プレエスの前で私がまだいくぶん獨身者のやうに、ときどき一人ごとなど言ひながら手紙を書き、女房が心もち物足りなさうな顔をして、編み物をしてゐる傍で、ちよつとの間だけでも、こんな少し淋しすぎる一家團樂を賑はせてゐてくれたら好かりさうなものなのに。

昭和十三年五月十七日、輕井澤にて

雨後

六月二十日

これでもう山小屋に雨に降りこめられてゐること一週間。——「雨の輕井澤もまたいいです」などと友達に手紙を書いてゐた女房も、きのふあたりから少し氣が變になつてゐはしないかと思ふ位。

——何しろ、縦の木なんぞの多い山のなかの一軒家なものだから、雨の音が騒がしいほど大きく、それがまた絶えずさまざまな物音に變化して聞える。

子供の頃聞き慣れた支那語の唄がとぎれとぎれになつて聞えてくるなどと女房が不意に言ひ出したりするので、けふなんぞは、私までも一日中なんだか家の外ばかり氣にして見てゐて、仕事に手がつかない位。

かうして二人つきりであると、相手の神経衰弱などすぐうつると見える。——いまでも、黄色の小さなゴム毯のやうなものが草の中をびよんびよん跳ねてゐるのに、をかしい程びつくりして見たら、それはこんな林の奥まで水溜りを傳つてきたらしい一羽の黃鶺鴒。……

六月二十四日

やつと雨があがつた。ひさしぶりに二人で散歩に出る。途中で、鶴屋の主人に逢つて立話。——「今年はどうも葉ばかり多くて、花が少い」と氣の毒がるやうに云ふ。それでも少しは花もあらうかと村を一巡して見た。

なるほど、今年は無残。唯、グリーン・ゲブルスといふ、緑の切妻きりづまのある、イギリスの老婦人の住んでゐる小さな家の裏に咲いてゐた夢の花と、チェッコ公使の別荘の廣々とした芝生だけが鮮やか。……それからまだ躑躅の花の乏しく咲き残つた原へ出たら急に霧がまいてきて、目の前を何羽か啼いてよぎつた尾長の姿さへ見えなかつた位。やつと其處を突きぬけて、ふと振り返ると、まだ、その原は霧の中。

合同教會の裏の、或外人の別荘の前に、野薔薇の木がめづらしく五六輪の花をつけてゐたので、何氣なく近よつて見ると、その茂みの中に一羽の小鳥が不安さうにあちこちと枝移りしてゐる。をかしいと思つたら、小さな鳥の巢があつた。

秦皮アモウリのステッキで其枝を掻きよせて巢の中を覗いたら、まだ羽も生えてない、目ばかり大きな、茶色の雛が四五羽、無氣味にうじようじよしてゐた。親鳥はもう逃げた跡。

昭和十三年六月

山日記

その一

九月三日

ゆうべ二時頃、杉皮ばかりの天井裏で、何かごそごそと物音がするので、思はず目を覺ました。ちやうど僕の頭の眞上のへん。鼠だらう位に思つて、やがてもう音がしなくなつたので、又すぐ寝てしまつた。

朝、起きぬけにけふこそ一つ仕事をしてやらうと思つて、霧の中をすこし散歩をして歸つてくると、僕を迎へる女房たちの様子がちよつとばかり變なので、どうかしたのかと訊いてもなかなか白狀しない。何か僕のいやがる事があつたらしい。

が、とうとう白狀した——けさ、僕が散歩に出た後で僕の部屋の雨戸をあけて見ると、庇から變な白いものがぶらさがつてゐる。よく見ると、二尺ばかりの蛇の抜け殻。——どうしてこんなものがこんなところにあるのだらうと不審なまま、僕が蛇の大嫌ひなのはみんな知つてゐるので、留守の間に片づけて置いて、僕には黙つてゐようと申し合つたのださうだ。

僕はそれを訊いた途端に、もうすつかり忘れてゐた、ゆうべ天井裏でごそごそやつてゐた物音を思ひ

出した。どうも鼠にしてはすこし大人しすぎると思つたが、ことによるとその蛇の奴がそのとき丁度僕の頭上で脱皮したのかも知れない。

僕達のコツテエヂのまはりには、何しろ谷の上だから、少しは蛇も出るだらうと覺悟はしてゐたが、夏ぢゆう一べんも見かけなかつたので好い工合だと思つてゐたら、夜なかに屋根裏へ這ひ込んでゐようとは本當に知らぬが佛。……

もうその蛇はとつくに出でいつたらうが、その窓枠に手をついて背伸びをして見ると、まだ庇の穴から氣味の悪い抜け殻の切れつばしがひらひらとしてゐる。さつきいそいで引つ張つたら途中で切れてしまつた——それだけで二尺餘りもあつたのださうだから、よほど大きな奴だつたのだらう。まだ残つてゐるのは首の方の由。——

蛇の抜け殻を見るのは縁起が好いのださうだが、どうもそいつがぶらぶら下がつてゐる窓の下で、勉強をするのは閉口だから、勉強にいるやうなものはみんな廣間に移して、しばらくその一隅を假りの書齋にしつらへた。そんな事でうかうかしてゐるうちに、午前中、せつかく仕事をやらうと思つてゐた氣分がめちやくちやになつてしまつた。

午後、阿比留信君來訪。霧のなかを歩いて來たので、だいぶ上衣がしとつてゐるやうだし、家の中もけさから何んとなく濕つばいなので、煖爐に火を焚いた。早速阿比留君をつかまへて、けさの出來事を話

して聞かせる。が、君はさう驚いたやうな顔をして聞いてゐない。こんな山住ひではごく有りきたりの出來事のやうにして靜かな様子で聞いてゐる。

それから阿比留君が話を引きとつたが、なんでも君達が數年前借りてゐたコツテエヂには、屋根裏に小さな蝙蝠が棲まつてゐたこともあつたさうだ。夕方、君の妹が鏡に向つて髪をいじつてゐたら、なんだかその鏡のなかを黒い影がすうすうと横切るので、ふり向いて見たら、それがその蝙蝠だつたと云ふ……

「それにしても、あの蛇はまだ天井裏にゐるのだらうかね？」

「いや、脱皮してしまつたんだから、そりあ出ていつてしまつてゐるよ」

「さうだらうなあ」

煖爐では、もう火がぼうぼう音を立てて燃え出してゐた。出來るだけ威勢よく燃えて、おれの裡の、蛇なんぞをびくびくするやうな、けちな根性を燃やしてしまつてくれるといい。

しばらくそれから二人とも黙つて火を見まもつてゐたが、やがて私の唇を衝いて、

……Wie vor sich selbst

erschreckt, durchschucks die Luft, wie wenn ein Sprung

durch eine Tasse geht. So reißt die Spur

(蝙蝠は自身自身を怖れるかのやうに、空中にはためき出る。

さうして茶碗に罫が入るやうな工合に、蝙蝠は掠め過ぎる、

磁器に似た夕闇を横切つて……)

といふ詩句がひとりでに浮んで来た。こなひだちよつと讀んだリルケの「ドワイノ悲歌」中の一句だが、——さういへば先日芳賀檀君が來られての話に、目下そのリルケの「悲歌」の全譯に着手せられ出してゐるとの事、——かういふいまの生きることの難しいやうな秋に、あの生への悲痛なる讃歌ともいふべき「悲歌」を、私達のために紹介してくれることほど有意義な仕事はあるまいと、思へる。その大いなる仕事をはじめられようとしてゐる芳賀君は、甚だ元氣だつた。僕は君を大いに羨んだ。……

夕方、阿比留君が歸つてから、僕は霧のために早目に薄ぐらくなり出した小屋の中に、いつまでも燃え残りの火を守りながら、ぼんやりとしてゐた。

どうもけさ片づけてしまはうと思つてゐた小さな仕事を、これからすぐにでも取りかからなければならぬのだが、それが急に厭になつた。ろくな仕事をこつこつやるより、かうやつてぼんやりしながら「悲歌」のことだの、僕が近いうちに身を打ち込んでやりたいと思つてゐる仕事のことだのを考へてゐる方が、まあどんなに好い事だらう。……

いつもの事ながら、さういふ自分が本氣でぶつからうとする仕事の日々が近づいてくれば近づいてくほど、僕はいよいよ怠惰になつて、自分でもどうしやうもない位、無爲をきはめる。さうしてもう完全に怠惰に、無爲になり切つたとき、やつと仕事に手がかりができる。それまでさうやつて何もせずちつと待つてゐるのが、さすがの自分にも、いかにも苦しい。しかし、いまの自分には他にはどうしやうもないのだ。

阿比留君の話では、蛇は脱皮する前に、かならず半睡状態に陥つてあらゆる動作がきはめて鈍くなるのださうだ。僕なんぞのも、ひよつとしたらその類ひかも知れない。

あんなに蛇をこはがつてばかりゐた僕の、丁度寝てゐる眞上でもつて、その蛇が夜なかに脱皮をしてゐる物音を聞きとがめながら、それとは知らずに平氣で寝てゐたなんて、どうも知らぬが佛とはいへ、僕にとつて何かの瑞兆であればよい。

昭和十三年九月

山日記

その二

一八六

十月九日

こちらはもう秋が深い。冬までぬられさうなことを言つてゐた川端さんも、これからずつと木曾をまはつて鎌倉へ歸ると、さきをとつひお別れに來られたが、たぶんけふあたりはその木曾を旅してゐられることだらう。僕達はいまやりかけてゐる「續かげろふの日記」の仕上がるまでは頑張つてゐるつもりだが、さあ、いつ出來上がるのか知らん？ 實はその仕事もいよいよこれからといふところで、僕が一週間ばかり寐込んでしまつたので、二人ともすつかり惜げてゐた。が、きのふけふはもう大ぶいい。——その病氣の原因はといふと、こなひだうちの栗拾ひらしい。採れたときは、わが家のまはりだけでも、さう、毎日百個ぐらゐづつは採れたらう。しまひには僕よりも身軽な女房に、裏の大きな栗の木に登らせて、枝をゆすぶらせると、忽ち二十やそこいらは大きな音を立てて落ちてくる。僕はその木の下で、それを傍から拾ふのである。そんな労働が過ぎてか、或晩、僕はなんだか身體がへんに大儀なので、ためしに熱を測つて見たら、三十八度近くもあつた。……それからもう朝つばらから大きな音を立てて屋根の上なんぞに落ちるのもそのままにさせつきり、女房を傍らのラッキング・チェアに坐らせて、

おとなしくベッドに寐てゐた。川端さんがお別れに來られたのはそんな最中だつたのでちよつと淋しかった。歸られたすぐあと、藤屋の子供が川端さんを捜しに來たので、丁度いいところと思つて、まだどつさり残つてゐた栗をみんな川端夫人にお届けさせたりした。——しかし、もうそんな熱もすつかり下つた。

こんやあたりから又ぼつぼつと仕事をはじめようかとさへ思つてゐる。その前にちよつと夕方庭へ出てみたら、僕が閉ぢ籠つてゐた間に、いつのまにか何處もかしこも枯葉の山、——そんな中から可哀いやな、龍膽の花がちらほらと小さな顔を出してゐる。ひさしぶりに其處で夜を過ごすことにした、ファイア・プレエスのある廣間なんぞは、病中散らかしたまんまにして置いたもんだから、いかにも山小屋然となつてゐる。

おまけに、日が暮れると一しよに、急に風が物凄く吹きだした。ときどきそんな野分めいた風がさつと屋根や窓にそこらちゆうの枯葉を夕立のやうにぶつつけてゐる。そんな枯葉の或物は窓や戸の隙間なんぞを見つけては、無遠慮にコツテエヂの中まで飛び込んでくる。そして僕たちのまはりで、一塊りになつて、くるくると旋回してゐる。僕は無關心を装つて、あかあかと燃やしたファイア・プレエスの前で、ほんの仕事の眞似、女房もかういふ山住みには大ぶ馴れて來たと見え、僕の傍で落着いた顔をして手紙を書いてゐる。さういふ僕たちを恰も慈むかのやうに、マントル・ピースの上から、この夏釋道空さ

一八七

んが僕たちのために書いて下すつた朱の短冊が、森厳に見下ろしてゐる。

人も馬も道ゆきつかれ死ににけり、旅寝かさなるほどのかそけさ

木の十字架

「こちらで冬を過ごすのは、この土地のものではない私共には、なかなか難儀ですが、この御堂が本當に好きですので、かうして雪の深いなかに一人でそのお守りをしてゐるのもなかなか愉たのしい氣もちがいたします。……」

この雪に埋まつた高原にある小さな教會の管理をしてゐる、童顔の、律儀さうなHさんはそんな事を私に言つたが、かういふごく普通の信者に過ぎないやうな人にとつても、こちらで他所者として冬を過ごすしてゐるうちには、やはりさういふロマネスクな氣もちにもなると見える。

その教會といふのは、——信州輕井澤にある、聖パウロ・カトリック教會。いまから五年前（一九三五）に、チェッコスロヴァキアの建築家アントニン・レイモンド氏が設計して建立したものだ。簡素な木造の、何處か瑞西の寒村にでもありさうな、朴訥な美しさに富んだ、何ともいへず好い感じのする建物である。カトリック建築の様式といふものを私はよく知らないけれども、その特色らしく、屋根などの線といふ線がそれぞれに鋭い角をなして天を目ざしてゐる。それらが一つになつていかにもすつきりとした印象を建物全體に與へてゐるのでもあらうか。——町の裏側の、水車のある道に沿うて、その聖パウ